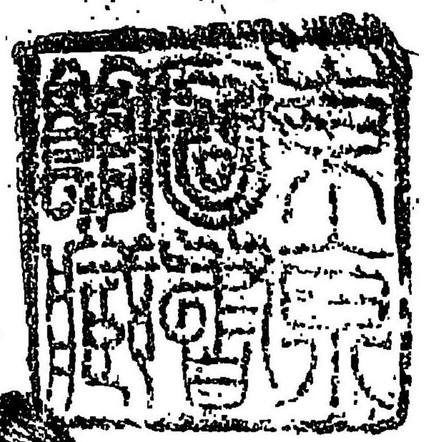
2483



物非高見九主

豊後　物集高見　纂

ことぐさのやし

大日本　東京　みづほや

24-83

神のおしへしのゆゑより

陸國人の、陸國さを讀むならひにて、

閑のまどもの、注釋といふものをも

てそよろづよそのたよりとをすなる。

それをみるとしあらざめれど、

まのをやしいよく〳〵えげり、注の海ます

しなくふくのこの大御世よりてれり、
あまくの書どもを清まんとすなる、初
学の人のかくやうよりていくぐをあらん。
注釈のならひてくその書のさまよ
りてとも出き、かくも書くをもて、ひ
とふしの同じことをこれられまて、実

なるもあれどこの書のをもて、かの出
のまを、めぐらすまじきもあるを、注釋
する先生ふちに、世よ、博覧の学えある
人をて、かくみよ、譽れをきそふものり
く、怪ぶそこの事柄を紛きて、そこの文
理を知らせんとのみををず。蕪説を

破り、新説を立てんとしてへてこゝのも
ども、ところせく、引きせづるもあれば、
注釈文いかゝよりも繁くてとゝすれ
べ、数十倍よさへなれるもありさてて、
限りなき書どもいづれを讀まんこ
の文学の感りをひらけておぐるお

くれどすまゝ法学は法のみさ
なぐらまていぐらかゝりかゝり外り排ふ
ことゝもせずひらぶるゝ昔ざまようち
まうせていづるのみ多らしめば、
ことゝもざ新さ今の人に終はさ取りえ
人の世もうせて走みの樣みゝよ去な

さんにいふもあまりて、そこてくに何が
しくれがしとふるさ書どもの書よ隠
れけんやうにそこらのかどもつぎく
に隠れゆきて、おしわけぬもぞふえもて
ゆくまし。さてこそ吾がともに徒ぐさの書
をのみあさらしとてみちりなんやさ

るこそ、高見おのが才のみどりさをも忘
れてこのこをのみ年ごろ強て思ひ
渡りし間をやう、昨日四年の涙ぐとよ、
高見殿いと若うて美容材とあひ影ひ
て、洋出をしもなしへりしほどよ、かの
洋出まこそ辞書といふものありてその

使りいふぞうり屋うりしうだいでや、
傳兵衛をかくてそそとゆひなりて、
すなそち、稿を起し、六その年の九月
ぞうりまて、おはやけ、私の事のかさへ
まて、何くれの事どもよりひと通で
ぬき出で、その後の雑さごともやが

て、その事よあるを取りさしぬ笑窪
の涙どもをこれうれと拾ひ集めて、雑
記めくものよ志なし、六回ど、十一年
の三月ぞうりなりしがそれよりこな
ゝも程そへもし、割りもして、全くこうの
やうよ志をへしに回ど、十六年の十一

月ぐりなりさ。抑も、佛法よりて、羅也と
いふべきものにふるくに字鏡集、新撰
字鏡、和名抄、蜀抄等あり。近き頃よりて和
訓栞、雅言集覽の類ひこれ多くあり。さ
れど、その書どもにたゞ、漢を
集めるるのみよりて、漢也のるめよりて

みもあらねど、漢をあげて、その義を解
うぬもあり。義を解けるも、かゝぐりよ
て、考さぬもあり。さらぬに、漢字よりあを
ぜて、おさゝよ、訓をよりげる訓よよ
りて、廣く、嘗ぐ、漢字をいぶしるる為
ど、総てて、初学の人の、机よのせて、読也

のかゝへは、おさぐるべくもあらずさ
るは、おの淫きのいつ羅へがゝきふゝは
あへぐふゝ引き出でゝ羅へゆく
ものなれべちの俗りなるハ及ばもい
ちずみちゝの学科はさへあらぜゝる
もあり。さきいへこの夢見がたちのさ

まこゝちゝ似ゝめれ。學び淺くさとり狭
くて、知るまゝぬあながちはまきゝる
なるは、あなゝひ助くる人さへはなり
しゝで、準ふべくもあらぬいもとより、
思ひ侮めゝるなどもあるべく向ゝぶ
はは、いゝはでや思ふ節の無きはしもを

あしずながら、まの林おく、深く浦の海、
そこひなければ、ふかくとみるといひ
てせん。

明治十七年一月　楚後の治民　物集高見

詞のをやし

凡例

一此書は、方言のほかは、古言、今言、雅言、俗言のをかちなく、總て、あるがまゝに集めさりされど、方言も、萬葉集などに見えさる、奈良より、あなさのは載せさり。

一此書は、集めさる語は、二字なるも、三字、四字なるも、總て、五十音の、順序によりて並べさり。但し、也行のゐゑを、和行のよまじへ出させり。

一語の解きやうは、その下は、まづ、種類の記號をさるし、次は、漢字の、その語は、あさるべきものをさるし、その次は、語の意を解き、その次は、その語の、古書は、見

えさるものを引けり。これ、すべての定めなり。されど
も、その漢字の、あされるを見出でぬハ、さながらはて、
出るさぬもあり。まさ、古書も、引くをかりのことなさ
ゝ、あるを、本文の、とみよ見出でぬハ、書名のみを、出る
しさるもあり。されを、語の下よ、全く、書名なきハ、まれ
よを、もれさるもあるべけれど、多くを、今言、俗言まて、
古言、雅言ならぬ出るしなり。

一語の下よ出るせる、種類の記號、(ナ)(カ〈)などのことハ、
巻首の、文典よ述べさり。この書を見ん人、まづ、よく、そ
の文典より見らるべし。因みよ云ふ、記號よ、(ナゲキ)と、
(テナ)とを、出るしわくべきを、ふと誤りて、悉く、(テナ)と
出るせり。見ん人、文典よりて正さるべし。まさ、動詞

の(有り)(居り)ハ、あり、をりと出ざすべきを、これ、そさ、あ
る、をると誤り出ざせり。

一引用書の名ハ、書中よ、つねよ、引き出でさるものゝ、又
を、つねよ呼びなれさるなど、略號をもても、知らるべ
きものハ、和名類聚抄を、和名と出るし、萬葉集を、萬と
出るす類ひの、略號を用ひさり。今、その略號よして、開
えにくきどもを、次よあぐ。

以字……以呂波字類抄
本和……本草和名
類名……類聚名義抄
古節……饅頭屋本節用集
康本……康頼本草

續紀……續日本紀
後紀……日本後紀
續後紀……續日本後紀
三實……三代實錄
古拾……古語拾遺
宇拾……宇治拾遺物語
類雜……類聚雜要抄
雅裝……雅亮裝束抄
拾愚……拾遺愚草
新六……新撰六帖

一まくら詞ハ、別よあつめて、本書のすゑよ出ざせり。その語のならべやうハ、本書の如く、五十音の順序よよ

れり。枕詞ハ、冠辭例などよのせさるハ、その數あれども、その意あらてよて、隱れさる方もなきハ、此書よのせんも、やうなきことなれを、今ハ、たゞ、冠辭考なるをのみ出ざせり。

一此書、そじめ、上梓を、思ひ立ちし頃ハ、專ら、假字の會よのみ、用ひんとせし間、引用書の、漢字なるどもハ、故さらよ、假字文よ改めさり。されど、その文ハ、本書の古訓ら、まさて、先輩の、よめりしよりさるよて、今、新さよ私よ、作りさるよてあらず。まさ、此書の編纂ハ、十數年よりさりさるをもて、その間よ、改めさるもありて、解釋、文の、字綴り、句讀點の類ひハ、卷首と卷尾とよて、聊らづゝ、異なるもあるべし。これらも、他日、增補再刻の

日ゝ訂正すべし。

日本小文典

目次
文字
平假字
傍假字
音韵
母韵、配合韵
通音、通韵、のべ聲、つゞめ聲、音便
言語
名詞
代名詞
動詞、及び、尾辭

形容詞、及び、尾辭
副詞
接續詞
感詞
てにをは

東京帝國大學圖書之印

漢字の文字は、平假字、傍假字の、二體ありて、平假字は、次の如くにて、かきくけこ、さしすせそ、たちつてと、なにぬねの、はひふへほ、まみむめも、やゆよ、らりるれろ、わゐゑをん、(アイウエオ、カキクケコ、サシスセソ、タチツテト、ナニヌネノ、ハヒフヘホ、マミムメモ、ヤユヨ、ラリルレロ、ワヰヱヲ)まさ、この平假字の中よりて、異體のものありて、おかきたとなにはわなどは、れらしさとなるよりをなどとも書くなり。まさ、ゆゑ、ゆえ、ゆうえ、ゆうえと異なれども、常三字は、學術の上よりては、い、う、え、イ、ウ、エ、と異なすれども、常

また、一様に用ひて、異にすることなし。

この、平假字、傍假字に、總て、清音の文字なれば、其れを、濁音に用ふるには、濁音にすべき、文字の右肩に、次の如く、〃點をさし、(がぎぐげご、ざじずぜぞ、だぢづでど、ばびぶべぼ)(ガギグゲゴ、ザジズゼゾ、ダヂヅデド、バビブベボ)半濁音には、次の如く、○點をさすなり。(ぱぴぷぺぽ、パピプペポ)

また、平假字、傍假字の、む|ん|は、語の中と下とにては、撥ぬる音に、開ゆるゆゑに、其れを、ゐつ爲めに、む|ん|と書き、ん|ン|と書くなり。また、重ね字にて、同字を、二字、書くべきところには、下の字の代りに、(〻)を書きて、ち〻の如く書き、疊み字にて、二字、三字を、をり返して、書くところには、(〳〵)を書きて、いろ〳〵の如く、書くことあり。

音韻

假字の、發音を區別する時に、あ|い|う|え|お|の五字に、母韻にて、他の四十五字に、子母韻、また、二母韻の配合なり。其れ故に、他の字に、長聲にて、か|ー|き|ー|の如く、また、や|ー|い|ー|の如く、長く引きて、呼ぶ時に、母韻の、孰れかを、その音尾に、表はすとあり。(か|に、音尾に、ア|を含み、や|に、ア|を含み、き|に、イ|を含み、い|に、イ|を含めり。)然れども、他の字に、既に、配合の上にて、成れる故に、今、その字を割きて、別に、子韻、また、他の母韻を、示すを能はず。唯、學理の上にては、音尾の、母韻を除きて、あとに餘るをもて、子韻、また、他の、母韻なりといふるゝなり。(このことは、委しくいふまほしけれども、既に、日本大文典にも、ことゝに、略せり。)

母韻

母韻の五字は、喉より、出づる聲よて、あは、殊よ、口より、正しく出づる故よ、音韻をいふよれ、先づ、この聲を、第一とすなり。次よ、いは、脇ろ、口を、横よ開く時よ、出づる聲よて、第二とし、次よ、うは、脇ろ、口を窄むる時よ、出づる聲よて、第三とし、次よ、えは、脇ろ、口を、たてよ開く時よ、出づる聲よて、第四とし、次よ、おは、脇ろ、頬を膨ふめて、口を開く時よ、出づる聲よて、第五とすなり。

總て、母韻は、他の、音尾とも爲るが如く、その聲の、輕微柔輭なるが爲めよ、字數、かぎりある何中よも、入るをあり。五歌字の、七字と、限りある、何中よも、頭聲よ、爲るあいうとあおのあり。また、語の中ふれる、語を用ふれば、六字、八字、あとの、かを除きて、とのみよりあまして、除くことあり。いひ、うみの、うを除きて、みのみいひ、いむの、いを除きて、もとのみおもの、おを除きて、もとのみいふことあり。

配合韻

配合韻の三十五字の中、かきくけこは、齒よふれて、出づる聲よて、牙音といひ、さしすせそは、齒と舌とよふれて、出づる聲よて、齒音といひ、たちつてとは、舌よふれて、出づる聲よて、舌音といひ、なにぬねのは、ら、りるれろとは、舌よふれて、出づる聲よて、舌音といひ、ばひふへほは、ま、みむめもとは、脣よふれて、出づる聲よて、脣音といふ。また、やいゆえよは、わゐをとの十字は、母韻の、複りさるものゆゑ、ともよ、喉音といふ。

五十音

母韻の五字と、配合韻の、四十五字とを合せて、五十音といふ。五十音の表は、次の如し。

五十音の表

喉音あいうえお……安行といふ。
牙音かきくけこ……加行といふ。
齶音さしすせそ……佐行といふ。
舌音たちつてと……多行といふ。
舌音なにぬねの……奈行といふ。
唇音はひふへほ……波行といふ。
唇音まみむめも……麻行といふ。
喉音やいゆよ……也行といふ。
舌音らりるれろ……良行といふ。
喉音わゐうゑを……和行といふ。

通音と通韵と

通音とは、同音（同音の、縁とのは、同あいうの音えをおの類ふ。）の、相ひ通ふをいふ。同音の相ひ通ふは、父ちゝを、てゝと、いふ類ひ、同韵（同韵の類ひとの、横あかの、同さたなはまやらわ行の韵をいふ。）の、相ひ通ふは、吾れを、いふ類ひなり。さて、その、同音の、相ひ通ふ中よも、この語を、かの語の、上よおく時は、多くは、もとの、第四韵の聲は、第一韵の聲となるなり。

加行　さけ（酒）　さかつぼ（菅）　すがえふ
佐行　かぜ（風）　かざかみ（早稲）　ゐさご
多行　て（手）　たまくふ（金）　たゝなみ（栖）
奈行　ね（苗）　かなへ（雨）　たゝなび（船）
波行　なへ（苗）　なしろ（上）　ふなうえ
麻行　め（雨）　あまがさ（爪）　つめ　つまゞるし

良行

かれ（枯）　かふやま　まれ（稀）　まふびと

和行

こ（蚕）　こもづくり

まさ、きを、こといひ、（木の葉を、火を、ほといふ如く、ほかげを、）

第二韵の壁を、第五韵の壁を、第一韵の壁を、呼びかへ、ろを、らといふ如く、（ろは系を、ふは問を、くは問をくやみ、）

るもあり。殊ま、古言の、第一韵の壁ハ、後まで、第四韵の壁ま、（時をもてり、多かれをを、多けれをといふ、類ひのごとし。）

移して、いふもの多し。

のべ壁と、つゞめ壁と、

二つの壁を合せて、一つの壁ま、約むるをありて、共れを、つゞめ壁といふ。例へを、吾がいへのがといとを合せて、きま約めて、ゐぎへと呼び、おほぢ（祖父）の、おとほとを合せて、おま約めて、おちと呼ぶ、類ひの如し。まさ、一つの壁をのべて、二つ

の壁ま、することありて、共れを、のべ壁といふ。例へを、いふ（曰）の、ふをのべて、むくとして、いむくと呼び、見むの、むをのべて、まくとして、見まくと呼ぶが如し。

音便

音便とハ、此れ、彼れ、連合する壁を呼ぶま、その壁の、他音ま、開ゆるものをいふ。これま、その、連合する總ての、他音ま爲るものの、他音ま爲るものあり。まさ、連壁ま導られて、一種、あまりの壁を、おこすものあり。

總ての、他音まなるもの、

五十音の、第一韵の壁ハ、うまさハ、ふと連合すれバ、總て、第五韵の壁を、長壁ま呼ぶ、壁となり。（あう、あふ、のとく、おーふ、ゆ。）第四韵の壁ハ、うまさハ、ふと連合すれバ、第二韵の壁ま、ま

うを添ふる、聲と爲るなり。（えう、えふ、いよう の如く用ゆ。）

下のみの、他音よりなるもの、

五十音の、第二韵、第三韵の聲は、ふと連合すれば、ゆうと連合する、聲となり、（きふ、ふゆう の如く用ゆ。）まさに、ふと連合すれば、もとの、第五韵の聲は、う、と爲るなり。（おう、ふう の如く用ゆ。）

まさ、下のみの、他音よりなるものよりは、唯ざ、その聲の、他音より開ゆるのみならず、直ちに、他音の文字より、移して書くもあり。次の例の如し。

きしは、いよ、（白き風寒しもの、いなど、）

くそひふへほまみむりは、うよ、（菩薩を、善き、思ひて、）

を、思うて、ほふし（直衣）を、なほし（法師）を、うほし、たまへりまつるを、たうを仕りて

こみちひうが、取り出でを、こうちひむかなど、（小路を、日向）

にぬそひほみむりるは、んよ、いかにを、いかんを、きぬとらるを、思んをやらるを、かんをよるのおざし、なむぼちと（拜）を、ぼとん（砲）を、ぼちくとん、ぼとん、ぼちくざり（件）を、なんざ（汝）を、とざ（夜の御殿）を、よんのおとざなど、

ちふりは、つよ、（立ちとして、）

まさ、んとつとの、下よ来る、波行の聲は、常よ、半濁音となるなり。ちん（陳皮）ぴ、につぽん（本）などの如し。

餘りの聲を、おこすもの、

餘りの聲を、おこすものとは、詩歌を、ざいかと呼びなし、夫婦を、ふうふと呼びなし、行らずを、行らずんを、行くべくを、行くべくんを、と呼びなす、類ひの如し。

言語

言語とハ、事物の名、及び、事物の、動作、形容等を、聲音をもて、表すものをいふ。日本の言語ハ、形の上よりいへバ、語尾の、動らぬものと、動くものと、他の語ニ附屬する、短きものとの、三種ありて、語尾の動らぬを、體言といひ、動くを、用言といひ、他の語ニ附屬するを、豆爾乎波といふ。また、性質の上よりいへバ、名ことを、かへ詞、ゐざ詞、さま詞、そへ詞、つなぎ詞、なげき詞、てにをはと、名づけふるゝ、八種のものあり、今ハ、其八種のものをいふなり。

名ことを

名詞（なことを）とハ、名をいふニ、用ふる語をいふ。物の名ニてハ、ひと（人）、とり（鳥）、むし（虫）、けだもの（獣）の類ひ、事の名ニてハ、たび（旅）、ざを（作業）の類ひ、數の名ニてハ、ひとつ（一）、ふたつ（二）の類ひなり。また、こゝろ（心）、たましひ（魂）の類ひ、其れと取り出づべき、形なきものも、人の、思ひの上ニ浮びて、有りとして思はるゝハ、また、皆、この中ニ數まふなり。

名詞ニて、連合する思想を、いひ表すため、二個以上を、合併するものありて、其れを、合併の名詞といふ。其れニ、辨へおくべきことあり。手と足とを、てあしといふハ、ともなけれど、山と河とを、合せていふ時、やまがわの如く、下の語の、頭聲を濁ふすると、やまゐの如く、濁ふせぬとあり。その濁ふするハ、山の河の意ニて、山と河と、ふたつニ、あふぬ、ゐるしなり。

名詞のくらゐ

名詞ハ、他の語とつゞなりて、歌文の上まあらはれるゝ時、其おゝるゝ場所まよりて、用ひふるゝ意をへの、異なることあり。其れを、くらゐといふ。例へを、(鳥飛ぶ)といへバ、鳥といふ語ハ、飛ぶといふ動作の、主と爲れども、(鳥の巣)といへバ、鳥などの、巣まとあゝぬまゝを、説き明らす、意をへと爲るが如し。さて、此くらゐまを、五つの區別あり。

第一のくらゐまを、(鳥飛ぶ)(鳥美くし)などいふ時の、鳥の如く、名詞の動作と形容との、主と爲る時、及び、(この鳥ハ、鶴なり)の、鶴の如く、他の名詞の、下まに在りても、上の名詞と、同じ意をへまに、おつる時なり。此くらゐまを表すまを、がのをもぞこそなどいふ、てにををを、添ふることもあり。

第二のくらゐまを、(鳥の巣)(雁ガ音)などいふ時の、鳥の雁がの如く、次の名詞の、説き明らしの、用を爲す時なり。此くらゐまを表すまを、常まに、てにををの、のとがとを添へ、まれまを、つをも添ふるなり。

第三のくらゐまを、(牛飼、牛まに、水を與ふ)(藥ハ、痢ひまよし)などいふ時の、牛まに、病ひまの如く、目的まに用ひふるゝ時なり。されを、(樵夫、山まに往く)の如く、その場所とも爲り、(鴉林へ還る)の如く、その方角とも爲り、(船、湊より出づ)の如く、その根原とも爲り、(父、母と語る)の如く、その對ふものとも爲り、(庭ハ、野と爲る)の如く、その變るものとも爲り、(人ハ、馬まて行く)の如く、その道具とも爲るなり。此くらゐまを表すまを、てにををの、まへよりらふまでまて

てもてなどを添へ、まさ、(山を行く)などの如く、を を添へてもまさし、まさ、(山を行く)などの如く、をを添へても、表をすことあり。

第四のくらかとを、(牛飼、牛を率く)などいふ時の、牛をの如く、その動作より、離れかれぬものと、爲る時なり。まさ、此くらかの名詞ハ、時として、その動作の、受け方と爲れバ、(牛、牛飼ヨ率ゥる)の如く、第一のくらかヨ、變るものなり。此くらかを表をすヨを、常ヨを、てにををの、をを添へ、時としてを、もぞこそなどを添へても、いふことあり。

第五のくらかとを、(汝行け)などいふ時の、汝の如く、呼びかけらるゝものと、爲る時なり。此くらかを表をすヨを、時としてを、てにををの、やよ、ヨさを、をもなどをも添へ

て、いふことあり。

○くらかの表

第一	ゲも 鳥のぞ をこそ など
第二	鳥のゲ
第三	へまで 鳥よりよて うふして など
第四	鳥をもを ぞ など
第五	鳥よや を など

かへ詞

代詞（かへことば）とは、名詞に代へて、用ふる語をいふ。此語は、人の代詞、指示の代詞、疑問の代詞といふ、三つの類ひあり。

人の代詞は、人の名に代へていふものにて、これは、語る人の、名に代ふるものと、聽く人の、名に代ふるものとあり。語る人のは、われ、おのれの類ひ、聽く人のは、なれ、なんぢの類ひなり。

指示の代詞は、事物などの、指して、いふべきものの、名に代へて、いふものにて、此れには、事物を指すものと、場所を指すものと、方角を指すものとあり。

事物を指すものは、これ、それ、あれ、かれの類ひにて、これは、語る人によつきて、近きものに用ひ、

それは、聽く人によつきて、近きものに用ひ、あれ、かれは、遠く、離れさるものに用ふ。

場所を指すものは、ここ、そこ、あそこ、かこ、の類ひにて、ここは、語る人によつきて、近き場所に用ひ、そこは、聽く人によつきて、近き場所に用ひ、あそこ、かこは、遠く、離れさる場所に用ふ。

方角を指すものは、こなた、そなた、あなた、かなたの類ひにて、こなたは、語る人によつきて、近き方角に用ひ、そなたは、聽く人によつきて、近き方角に用ひ、あなた、かなたは、遠く、離れさる方角に用ふ。

疑問の代詞は、人、事物、場所などの、さだらぬものに、代へていふものにて、人の名には、たれを用ひ、事物に

を、なに、いづれを用ひ、場所をは、いづく、いづこを用ひ、方角をは、いづち、を用ひ、時をは、いつを用ふ。

○くらゐの表

人の代詞（語る人の、ひとつを示す）

第一	第二	第三	第四	第五
ガも それのぞ そこそ など	それガ	それよりへまで もて らふて	それをも ぞ など	

指示の代詞（事物を指す、ひとつを示す）

第一	第二	第三	第四	第五
ガも これのぞ そこそ など	この	これよりへまで もて らふて など	それをも ぞ など	

疑問の代詞（人の名の、ひとつを示す）

第一	第二	第三	第四	第五

グも		へ まで	た
たれのぞ	たグ	たれよりもて	たれをも
そこそ など		らふ して など	ぞ など

ヨざ詞

動詞（ことば）とハ、ヨざを呼ぶよ、用ふる語よて、見る、睡るの類ひをいふ。この語ハ、その類ひを、いひかけ（動）と、ひとりざち（自動）との、二つよりつなり。

いひかけの動詞とは、見る、聞くの、類ひの如く、共ヨざの、他物の上よ、及びかゝるものをいふ。されど、此語ハ、例へバ、（人、花を見る）の如く、第四のくらゐの、名詞と伴はざれバ、全き意の、きこえぬものなり。

ひとりざちの動詞とハ、睡る、渡るの類ひの如く、共ヨざの、他物の上よハ、及びかゝらぬ、ものをいふ。されバ、この語ハ、第三のくらゐの、名詞とは伴へども、第四のくらゐの、名詞とは伴はぬなり。但し、（人、橋を渡る）の如くいふ時ハ、渡るといふ語ハ、橋をといふ語と、伴ふ故よ、その橋をを、第四のくらゐと思ひあやまり、共れより、まさ、渡るをも、いひかけゝと、思ひあやまることあり。

然れども、此橋をハ、第三のくらゐとて、（第三のくらゐとも、をを委しくは、日本大文典よ、いへるを見るべし。）なほ、本書の、をの部よも、いさゝかいへり。第四のよは

あらず、されど、第四のハ、別よ、(橋を渡す)の如く、渡すといふ語と、伴ふをもて悟るべし。

動詞ハ、(鼠、猫よとらる)の如く、受け方よ、いふことあり て、その受け方よいふハ、常よ、いひかけのなれど、その事よあひて、困む意よいふ時ハ、(旅人ハ、雨よ降らる)の如く、ひとりざちのも、亦さいふことあり。此困む意のなへ、いひかけよもまりて、常の受け方とも、意わへすこし異なり。

動詞よも、亦さ、連合する思想を、いひ表さず爲めよ、二つの語を、合併するものあり て、共れを、合併の動詞といふ。例へを、推すと、量るとを合せて、推しさるといひ、生ふと立つとを合せて、生ひさつといふ、類ひの如し。

動詞のさ さらき

動詞ハ、行くといふ語の、行ゆき、ゆく、ゆけとさらき、増すといふ語の、增さ、まし、ます、ませとさらくゲ如く、語尾の、種々よ、變りゆくことあり て、共れを、動詞のさ さらきと いふ。共さ さらきよ、四段、一段、二段の區別ありて、一段、二段よも、まさ、上下の區別あり。

四段とハ、往か、押さ、打さ、逢さ、住ま、釣らの類ひ、五十音の第一韵、かさたはまらを語尾として、始る語の、次例の如く、語尾の、變りくて、四つよ爲るものをいふ。

加行	往か	ゆき	ゆく	ゆけ
佐行	押さ	おし	おす	おせ
多行	打た	うち	うつ	うて
波行	逢は	あひ	あふ	あへ

麻行　住ま‖　すみ|　すむ|　すめ|
良行　釣ら‖　つり|　つる|　つれ|

上一段とは、若る、似る、干る、見る、射る、居るの類ひ、五十音の第二韵、き‖に‖ひ‖み‖い‖ぬ‖をもて、始る語の、次例の如く、語尾よ、るとれとを、添ふるものをいふ。

加行　き‖　きる|　きれ|
奈行　に‖　にる|　にれ|
波行　ひ‖　ひる|　ひれ|
麻行　み‖　みる|　みれ|
也行　い‖　いる|　いれ|
和行　ぬ‖　ぬる|　ぬれ|

下一段とは、蹴る、殆る、綜るの類ひ、五十音の第四韵、け‖

ね‖へ‖をもて、始る語の、次例の如く、語尾よ、るとれとを、添ふるものをいふ。

加行　け‖　ける|　けれ|
奈行　ね‖　ねる|　ねれ|
波行　へ‖　へる|　へれ|

上二段とは、起き、こじ、落ち、懸ひ、恨み、老い、舊りの類ひ、五十音の第二韵、き‖じ‖ち‖ひ‖み‖い‖り‖を語尾として、始る語の、次例の如く、第三韵よ移りて、更よ、るとれとを、添ふるものをいふ。

加行　起き‖　おく|　おくる|　おくれ|
佐行　こじ‖　こず|　こずる|　こずれ|
多行　落ち‖　おつ|　おつる|　おつれ|

波行	戀ひ‖	こふ	こふれ
麻行	恨み‖	うらむ	うらむれ
也行	老い‖	おゆ	おゆれ
良行	舊り‖	ふる	ふるれ

下二段とハ、え（得）受け、痩せ、捨て、兼ね、添へ、攀め、消に、枯れ、植ゑの類ひ、五十音の第四韵、え‖け‖せ‖て‖ね‖へ‖め‖に‖れ‖ゑ‖を語尾として、始る語の、次例の如く、第三韵よ移りて、更よ、るとれとを、添ふるものをいふ。

安行	え‖	う	うる	うれ
加行	受け‖	うく	うくる	うくれ
佐行	痩せ‖	やす	やする	やすれ
多行	捨て‖	すつ	すつる	すつれ

奈行	兼ね‖	かぬ	かぬる	かぬれ
波行	添へ‖	そふ	そふる	そふれ
麻行	攀め‖	ほむ	ほむる	ほむれ
也行	消に‖	きゆ	きゆる	きゆれ
良行	枯れ‖	かる	かるゝ	かるれ
和行	植ゑ‖	うゑ	うゑる	うゑれ

四段、一段、二段の外よ、一種、さらきの、變るものあり。共れを、かゝ（変格）りといふ。共かゝりよ、まさ、三つの類ひあり。次の例の如し。

第一ハ、加行と、佐行とよ、在るものよて、來といふ、語とも ていへバ、來ハ、こ‖をもて始り、き、くとさらきて、くの尾よ、まさ、るとれとを、添ふる類ひなり。

加行　來こ　き　く　くる　くれ

佐行　爲せ　し　す　する　すれ

第二ハ、奈行よあるものよて、去ぬといふ、語をもていへバ、去ぬハ、いな||をもて始り、いに||、いぬ||、いねとそさらきて、いぬの尾よ、まさ、る||とれ||とを、添ふる類ひなり。

奈行　去な||　いに　いぬ　いね　いぬる　いぬれ

死な||　去に　去ぬ　去ね　去ぬる　去ぬれ

第三ハ、瓦行よあるものよて、此れハ、四段の如く、語尾の、四つよ、變るものなれども、四段ハる||をもて終止とし、此れハ、り||をもて、終止とするなり。

瓦行　居ら||　を　り||　る　れ　有ら||　あ　り||　る　れ

動詞のたすけ　尾辭

動詞よそ、その意をへを、廣むる爲めよ、語尾よ、短き辭を、添ふることあり。共れを、たすけといふ。今、たすけの、殊なるものを擧ぐれバ、共類ひ七つあり。

第一ハ、り||といふ。この辭ハ、ら||り||る||れ||と、變格の、有り||の如くそさらきて、(花咲け||り||)の如く、その動作の、然ゝありといふを、表そすよ用ふ。

第二ハ、ら||るといふ、この辭ハ、られ||らる||らる||ゝ||られ||と、下二段よそさらきて、(人よ恨みら||る||)の如く、受け方よいふを表そすよ用ひ、まさ、(君ハ起きら||る||)の如く、敬ひを、表そすよも用ひ、まさ、(落つれバ落ちら||る||)の如く、その事の出で來るを、表そすよも用ふ。

第三ハ、るといふ。この辭ハ、第二の、らるの、頭聲を省きさるものよて、れるるゝるれとそさらきて、(人よ憎まる)の如く、その用ひらるゝ意をへも、すべて、第二の、らるの如し。

第四ハ、すといふ。この辭ハ、さしすせと、四段よそさらきて、(君行かす)の如く、その動作を、敬ひていふを、表えすよ用ふ。但し、古言よ、あるものなり。

第五ハ、ーむといふ。この辭ハ、ーめーむーむるーむれと、下二段よそさらきて、(馬を率かーむ)の如く、その動作を、然かさするをいふを、表えすよ用ふ。まさ、古言よて、敬ひを、表えすよも用ふ。

第六ハ、ずといふ。この辭ハ、第五のーむを、約めさるものよて、せずずるずれとそさらきて、(馬を率かず)の如く、その用ひらるゝ意をへも、すべて、第五の如し。

第七ハ、さずといふ。この辭ハ、させさずさするさずれと、下二段よそさらきて、(弱を表さず)の如く、その用ひらるゝ意をへも、第五、及び、第六の如し。

動詞のふし

動詞ハ、其そさらきの上よ、終止、連體、連用、假體、將然、已然と名づくる、六つの節あり。終止とハ、(珠光る)の如く、其そさらきの、そこよて終る、節をいひ、連體とハ、(光る珠)の如く、其そさらきの、名詞よ續く、節をいひ、連用とハ、(光り輝く)の如く、他の、動詞よ續く、節をいひ、假體とハ、(珠の光り)の如く、いひすえて、名詞とする、節をいひ、將然とハ、(珠光らん)の如く、將

ま、然りあらんとする、節をいひ、已然といへ、(珠光れバ)の如く、現ま然りある、節をいふ。この節の、四段、一段などまあるへ、次の表の如し。

	終止	連體	假體	連用	將然	已然
四段	往く		ゆき	ゆき	ゆう	ゆけ
一段	若る 蹴る		き け			きれ けれ
二段	起く 受く	おくる うくる	おき うけ			おくれ うくれ
	く	くる	き		て	くれ

變格				
す 去ぬ 有り	する いぬる ある	し いに あり	せ いな あら	すれ いぬれ あれ

この終止などの、節まそふる、おほまそのてにをそれ、次の如し。但し、假體へ、名詞と、異なること、これまも出でざず。

終止まそふるもの、

なり　ぞり　とも　な　止禁

や　疑　めり　らむ　らし　べし

まじ　まじ　や　感　も　感　な　感

連體まそふるもの、

なり　が　ま　を　そ

も　ぞ　なん　こそ　だに
さへ　すら　より　ゝら　のみ
まで　をゝり　か（疑問）　なべに　よ（感歎）
か（感歎）
連用は、そふるもの、
え　も　ぞ　なん　こそ
だに　さへ　のみ　て　つゝ
や（疑問）　か（疑問）　けり　き　さり
つ　ぬ　てむ　なむ　けむ
將然は、そふるもの、
を　〻　なん　をや　む　まし
ず　ざり

已然は、そふるもの、
を　ど

動詞のいひかさ

動詞は、其ことゝの上は、種々のすがさを、表はすことあり。例へば、打つどいへば、唯だ、打つ意なれども、語尾は、べしを添へて、打つべしといへば、打つことの成る、意はも聞え、まさ、打さんと決しさる、意はも聞ゆるが如し。其れを、動詞の、いひかさといふ。さて、其いひかさは、今は、不定、直説、可能、接續、命令の、五つはもゝてり。

不定のいひかさとは、（往く）（着る）の如く、文主なしは、直率は、いひ出ずものをいふ。されど、此れは、唯だ、そ

の時を、調ふる爲めよ、(往きき)(往ぅむ)の如く、共てにをはを、添ふるのみなり。

直説のいひかさとは、(吾れ往く)(吾れ往きき)(吾れ往ぅむ)の如く、上の、不定のいひかさのうへよ、文主を、添へさるものなり。

可能のいひかさとは、成就、可決、許容、適當、想像などの意をへを、表すものをいふ。例へば、成就は、(風も、取れば取らる)の如く、まさ、(春の日は、まどろまる)の如く、自然よ、然ゥなるをもいふ。可決は、(今は戰ふべし)の如く、許容は、(汝、往ゥを往くべし)の如く、適當は、(男子は、馬よ乘るべし)の如く、想像は、(山を越えば、河あるべし)の如し。此いひかさは、語尾ふ、第二、及び、第三のたすけと、て

にをはのべしとを、添ふるものなり。

接續のいひかさとは、直説と可能との、語尾を、次よ來る語よ、續けゆくものをいふ。此れよ、許諾をいふと、拒否をいふとの、二つあり。例へば、現在の許諾は、(馬あれば)の如く、許次諾よ、乘りなれば)の如く、許次諾よ、乘りなれば)の如く、許次諾よ、乘るとふ、許過去の許諾は、(馬ありけらば)の如く、許次諾よ、乘らんるとふ、現在の拒否は、(馬あれど)の如く、拒次否よ、乘らずるとふ、過去の拒否は、(馬ありけれど)の如く、拒次否よ、乘らざりけるとふ、未來の拒否は、(馬ありとも)の如く、拒次否よ、乘らとるとふ、此いひかさは、語尾よ、てにをはの、をと、どと、どもとを、添ふるものなり。

命令のいひかさとは、(汝行け)といふ、類ひをいふ。此い

ひかさハ、四段と、奈行、耳行の變格とハ、その已然の、節を用ひ、（奈行のハ、已然の、一段と二段と、他の變格とハ、去ね死ねを用ふ。）（汝見よ）（汝起きよ）の如く、語尾よ、てにをそのよなどを添ふ。但し、下二段などよ、古くハ、添へずして、いふもあれど、今ハ、大ゝさをいふなり。

動詞の時

動詞ハ、その語尾のおもむきよて、種々の時を、表そすことあり。例へバ、（往く）といへバ、現在なれども、（往きき）といへバ、過去と爲る、類ひの如し。この時よ、現在、第一過去、第二過去、第一未來、第二未來、第三未來の六つあり。

現在とハ、（鳥飛ぶ）の如く、其去ゐさの、今、現よ、然ゝある をいふ。此時を表そすよそ、たゞ、終止の節を用ふ。

第一過去とハ、（鳥飛びけり）（鳥飛びき）の如く、其去ゐさの、既よ、終りてあるをいふ。この時を表そすよそ、語尾よ、てにをそのけり、まさハ、きを添ふ。

まさ、この時を、今、すこし、深めていふよそ、けり、まさハ、きの上よ、てにをそのさり、てつのそにぬのそきを添へさる、さりけり、さりき、てけり、てき、にけり、にきを用ふ。

第二過去とハ、（鳥飛びさり）（鳥飛びつ）（鳥飛びぬ）の如く、過去よりて、現在よ、近きものをいふ。この時を表そすよそ、語尾よ、てにをそのさり、まさハ、つ、ぬを添ふ。

まさ、この時を、今、すこし、深めていふよそ、さりの上よ、てにをそのに、にのそさりきを添へさる、にさり、つの上よ、さりを添へさる、さりつを用ふ。（さりぬとハ、例を見出でず。）

第一未來とは、（鳥飛をむ）（鳥飛をまし）の如く、其ときの、今、始らんとするをいふ。この時を表をすよを、語尾よ、てにををの、む、まさは、まし を添ふ。

まさ、この時を、今、すこし、深めていふよを、む、まさは、まし の上よ、てにををの、さらむ（さらりのをてつのをきなぬのさらを添へさる、さらむ、さらまし、てむ、てまし、なむ、なまし を用ふ。

第二未來とは、（鳥飛ぶめり）（鳥飛ぶらむ）（鳥飛ぶらし）の如く、現在の、事よ就きて、想像するをいふ。この時を表をすよを、語尾よ、てにををの、めり、まさは、らむ、らし を添ふ。

まさ、この時を、今、すこし、深めていふよを、めりの上よ、

てにををの、つ、ぬ を添へさる、つめり、ぬめり を用ふ。但し、ばら、むら、三の、未よ、來つぬを添るなふれり。

第三未來とは、（鳥飛びけむ）の如く、過去の、事よ就きて、想像するをいふ。この時を表をすよを、語尾よ、てにををの、けむ を添ふ。まさ、第二未來を表をす、らむ、らし の上よ、つ、ぬ を添へさるも、この時を表をす。

まさ、この時を、今、すこし、深めていふよを、けむ の上よ、てにををの、てつのをきぬのをきを添へさる、てけむ、にけむ を用ふ。

さま詞

形容詞とは、ありさまを呼ぶよ、用ふる語よて、長し、久しの

類ひをいふ。

形容詞のさらき

形容詞も、動詞の如く、語尾の、種々よ、變りゆくものよて、例へバ、長しといふ語ハ、長し、長さ、長く、長き、長げと變り、久しといふ語ハ、久し、久しさ、久しく、久しき、久しげと變るが如し。さて、その變りゆくよ、ひと（單辭）へ、ふさ（複辭）への區別あり。

ひとへとハ、白（黒）ろ、くろなどいふ、語の如く、多くハ、既よ、ひとつの、全き語と、成りさるものよ、し、さ、く、き、げを添へて、白し、白さ、白く、白き、白げ、黒し、黒さ、黒く、黒き、黒げの如く、さらゝしゆくものをいふ。

ふさへとハ、樂し、苦しなどいふ、語の如く、多くハ、語尾の、しをもて、終るものよ、さ、く、き、げを添へて、樂しさ、樂しく、樂しき、樂しげ、苦しさ、苦しく、苦しき、苦しげの如く、むさらゝしゆくものをいふ。

この他よ、ひとへ、ふさへのかさちよて、語尾の、たらぬものあり。其れを、かそり（夏俗）といふ。例へを、如しといふ語の、如し、如く、如きとのみさらきて、如さ、如げとさ、さらゝぬ類ひの如し。

形容詞のたすけ（尾辭）

形容詞よも、亦さ、動詞の如く、その意をへを、賦むる爲めよ、語尾よ、二つの、たすけを用ふ。

第一ハ、かりといふ。この辭ハ、から、かり、かる、かれとさらきて、（夜長ゝり）（時久しゝり）の如く、其さまの、然ゝありといふを、表さすよ用ふ。此辭ハ、もと、形容詞の、語

尾のくに（長く、久しの、動詞の、有りと合併して、くあり（約むれば、くを）かるりと出で來さるものなれば、形容詞の、此たすけよかゝる時は、全く、動詞と、成るを知るべし。

まさ、此かりは、常よくともいふ。（長くとも、なさらきの、くは、まはあ）

ならまさ、かりのなさらきの、からは、古言よりては、約めて、かともいひ、（長くなどを）共かを、まさ、通音よ移りて、くともいひ、（長くなどくを）けともいふ。（長くなどけんまさ、共なさらきの、かるは、音便よりてかんともいひ、（長くなどかん）略りて、かともいふ。（長くなどなまさ、共なさらきの、かれは、常よ、通音よ移りて、けれともいひ、（長くなけれど）古言よりては、略りて、かともいひ、（長くなどと）共かを、まさ、通音よ移りて、けともいふ。（長くなけどくの、こは、日の木かり文の興変よ化いへ、なりは、去なしど）

第二は、みといふ、この辭は、（川の深み）（夜を長み）の如く、形容詞を、名詞よ、いひなす時と、そへ詞よいひなす、時とよ用ふ。このみを、動詞よ、そへていふ、降りみ、降らずみなどの、みは、まゞふ可らず。

形容詞のふー

形容詞も、亦さ、動詞の如く、共なさらきの上よ、終止、連體、連用、假體の、四つの節あり。次の表の如し。

	終止（假體も）	假體	連用（假體も）	連體	連用（假體も）
單辭	長し	ながさ	ながく	ながき	ながげ
複辭	久し	ひさーさ	ひさーく	ひさーき	ひさーげ

この終止などの、節よそふる、おほよそのてにをは、次の如し。但し、假體は、名詞と異なることなけれども、こゝに出ださず。

終止よ、そふるもの、

と　や（問疑）　や（感歎）　も（感歎）　な（感歎）

連體よ、そふるもの、

なり　が　よ　を　そ

も　ぞ　なん　こそ

さへ　すら　より　だに

まで　ぞり　か（問疑）　から　のみ

や（感歎）　なべに　か（感歎）

連用よ、そふるもの、

そ　も

だに　さへ　のみ　なん　こそ

形容詞の、いひかさと時と

形容詞も、亦さ、動詞の如く、いひかさと、時とをもてり。然れども、其いひかさは、不定（長し）（久し）と、直說（日長し）（年久し）との二つよりて、その時は、終止をもて表はす、現在の一つなり。されば、その他は、總て、第一の、たすけを添へて、全く、動詞として、表はすことなり。

そへ詞

副詞（たへことば）とは、動作と、形容とのさまの、如何なるゝをいふよ、用

ふる語よて、(煙り、幽かよたなびく)(花、きわめて多し)の如く、動詞と形容詞との、上よおき、まさ、(煙り、いと幽かよたなびく)の如く、他の副詞の、上よもおきて、共さまをもいふものなり。されを、その用ふる、意をへ廣く、その類ひも、亦さ、きわめて多きこと、次の例の如し。

時の副詞　きのふ　けふ　いま　むかしなど

地の副詞　こゝよ　そこよ　かゝこよ　いづくよなど

形狀の副詞　幽かよ　明らかよ　いと　いとゞなど

順序の副詞　先づ　次よ　漸く　次第よなど

分量の副詞　僅かよ　聊か　頗るなど

願望の副詞　いかで　せめて　同じくなど

推量の副詞　若し　蓋し　よも　さぞなど

反復の副詞　いよ〳〵　なほ　次々　頻りよなど

集合の副詞　すべて　みな　ともに　なべてなど

殊別の副詞　特り　殊よ　ひきてなど

反動の副詞　いかでか　却て　あになど

疑問の副詞　など　などてなど

應答の副詞　うべ　げになど

副詞よも、他の語をも、用ふることあり。名詞の下よ、と、まさは、よを添ふれを、(水は、掬手よ流る)(恩は、海と深し)の如く、副詞となり、動詞の、連用の節よ、てを添へて、(鳥は、飛びて行く)の如くいひ、形容詞の、連用の節をもて、(鳥は、遠く飛ぶ)の如くいへば、副詞となるなり。

まさ、副詞の語尾よ、にをもちさるは、共に、ありと連合して、

なりと爲り、幽らなり、明ららなり、健やらなり、頻りなり、殊なりの、類ひの如く、一種の、形容詞は、用ひらるゝことあり。

また、共なりは、りを省きて、なとのみもいひ、共なは、通音は移りて、のともいふなり。源氏、夕霧卷（ならら の御いらへや）

つなぎ詞

接續詞（つなぎことば）とは、上節の文と、下節の文とを、つなぐに用ふる、語をいふ。この語は、上節の句尾は、つくるものと、下節の句頭は、つくるものとの、二つありて、句尾はつくるは、（空曇るゆゑ、雨降るべし）の類ひ、句頭はつくるは、（空曇る。されど、雨降るべし）の類ひなり。この語も、亦さ、その用ふる、意をへ廣くて、その類ひ、種々あり。

同じ類ひを、並べていふは、用ふるもの、

また　また　或るは　或ひは

そへてゆく意は、用ふるもの、

かつ

前事を、再びいひおこすは、用ふるもの、

そも　そも〳〵

語を、あらさめていふは、用ふるもの、

たゞし

前事を、承けていふは、用ふるもの、

然れを　然れを　さるは　然れど

されど　斯れを　斯るは　斯れど

なげき詞

感詞とハ、嘆き、感きなど、總て、感じを呼ぶよ、用ふる語よて、あ、あゝ、や、やゝの、類ひをいふ。されど、心意よ、感ずるものハ、鳥の聲のかうも、鐘の音のごんも、皆、これよ數まふなり。

てにをは

てにをはとハ、名詞、動詞、形容詞、副詞などよ、そへて用ふる短き語をいふ。この語よた、動詞、形容詞の如く、語尾の、をさらくもあれど、今ハ、その用ひらるゝ、意をへよりて、すゑ辭、たすけ辭、なげき辭、つけ辭の、四つよゆりてり。

すゑ辭　この辭ハ、名詞、動詞などの、下よすゑて、次の如く、種々の意をへを、表そすものなり。

第一　その事を、慥ゥよいふよ、用ふるもの、

なり　ありの如くをさらく。(人まつむしの、聲すなり)など、但し、東京ハ武藏國なりなどの、なりハ、動詞なり。これとを異なり。

第二　名詞のくらね、或ひを、他の、種々の、意をへをあらをすよ、用ふるもの、

が　(鳥が飛ぶ)(ゼが宿)など

の　(鳥の飛ぶ)(鳥の巣)など

つ　(天つ神)(國つ神)など

に　(人、馬よ乘る)(藥ハ、病ひよよ)など

と　(淵ハ、瀬となる)(水ハ、氷りと爲る)など

へ　(鳥ハ、林へ還る)(水ハ、海へ流る)など

もて　（文字ハ、筆もて書く）など
よて　（海ハ、船よて渡る）など
を　（馬ハ、車をひく）（人、路を行く）など
え　（猫ハ睡る）（人も、夜ハ睡る）など
も　（猫も睡る）（猫ハ、昼も睡る）など
ぞ　（雷ぞ鳴る）（雷ハ、夏ぞ鳴る）など
ぞ　（これハ玉ぞ）（玉ハ光るぞ）など
なん　（鶯なん鳴く）（鶯、今なん鳴く）など
こそ　（鳥こそ鳴け）（鳥、今こそ鳴け）など
だに　（月だに宿る）（月、今だに宿れ）など
さへ　（風さへ吹く）（雨、今さへ降る）など
すら　（女すら行く）（女、今すら行く）など

より　（車より行く、船よりとやし）など
から　（陸から往きて、海から見る）など
まで　（麓より、峯まで登る）など
のみ　（山ハ、雪のみ高し）など
ばかり　（雪ハ、山ばかり降る）など

第三　接續詞と、同じ意をへよ、用ふるもの、

て　（鳥ハ、飛びて行く）など
つゝ　（鳥ハ、飛びつゝ行く）など
もて　（鳥ハ、飛びもて行く）など
が　（空ハ曇れるが、雨ハ降らず）など
よ　（花の散るよ、道も見えず）など
と　（雨降ると、蛙ハ鳴く）など

とも　（男ハ往くとも、女ハ往ゥじ）など
ど　（男ハ往けど、女ハ往ゥず）など
バ　（彼れ、往けバ往く。往ゥずバ往ゥじ）など
から　（空曇るから、雨降る）など

第四　命令の、意をへを表わすよ、用ふるもの、

よ　（汝勉めよ）など
ね　（汝勉めね）など
なん　（汝勉めなん）など

第五　希望の、意をへを表わすよ、用ふるもの、

が　（柳よ、花を咲ゥせてしが）など
ぞや　（柳よ、花を咲ゥせぞや）など

第六　禁止の、意をへを表わすよ、用ふるもの、

な　（花園の、花ハ採るな）など
な　○　○　そ　（花な採りそ）など

第七　疑問の、意をへを表わすよ、用ふるもの、

や　（火や燃ゆる）（水や流るゝ）など
や　（火ハ燃ゆや）（水ハ流るや）など
か　（火か燃ゆる）（水か流るゝ）など
か　（火ハ燃ゆるか）（水ハ流るゝか）など

第八　うらうへの、意をへを表わすよ、用ふるもの、

や　（我れや劣る）など
や　（我れ劣らんや）など
か　（我れ劣るべきか）など

第九　副詞と、同じ意をへよ、用ふるもの、

なべよ（日出づるなべよ、明くなる）など
よよく（日出づるよよく、明くなる）など
よゝよ（日出づるよゝよ、明くなる）など
ながら（花ハ、枝ながら採る）など

たすけ辭　この辭ハ、動詞の、語尾よつけて、過去、未來などの、時を表すよ、用ふるものなり。

第一　過去を表すよ、用ふるもの、

けり　ありの如くさらく。（八見けり）など
き　し、ーゝとさらく。（八見き）など
さり　ありの如くさらく。（八往きさり）など、但し、我れハ、この家の主人さりなどの、さりハ、動詞なり。これとは異なり。

つ　て、つる、つれとさらく。（八來つ）など
ぬ　な、に、ぬる、ぬれとさらく。（八來ぬ）など

第二　未來を表すよ、用ふるもの、

む　めとさらく。（八聞ゝむ）など
まし　まーゝとさらく。（八聞ゝまー）など

第三　現在の、想像をいふよ、用ふるもの、

めり　める、めれとさらく。（聞くめり）など
らむ　らめとさらく。（八聞くらむ）など
らー　（八聞くらー）など

第四　過去の、想像をいふよ、用ふるもの、

けむ　けめとさらく。（八聞きけむ）など

第五　うちけしをいふよ、用ふるもの、

ず　じ、ぬ、ねとそさらく。(人聞ゥず)など

ざり　ありの如くそさらく。(人聞ゥざりき)など、

この辭ハ、終止を用ひず。其よ文典ハ、日本大いへり。

第六　決定の未來、即ち、半決定をいふよ、用ふるもの、

べー　形容詞の、變格の、單辭の如くそさらく。(人聞くべー)など、まさ、語尾よそ、形容詞の、第一、第二の、尾辭をもそふるなり。

第七　第六の辭の、うちけーよ、用ふるもの、

まじ　形容詞の、變格の、複辭の如くそさらく。(人聞くまじ)など但し、第二の尾辭ハそへず。

なげき辭　此辭ハ、感詞と、同じ意をへよ、用ふるもの也。

よ　(君よ)(見ゆよ)(見ゆるよ)(聞けよ)など

や　(君や)(見ゆや)(見ゆるや)(聞けや)など

も　(君も)(見ゆも)(善しも)など

な　(君な)(見ゆな)(聞けな)など

か　(君か)(見ゆるか)など

つけ辭　この辭ハ、名詞、動詞などの、頭尾よつけて、用ふるものよて、意あるも、意なきもあり。

第一　頭よつけて、用ふるもの、

ま　(ま心)(ま夜)など

み　(み雪)(み空)など

を　(を籠)(を山田)(を止む)など

さ　(さ苗)(さ渡る)など

い　(い行く)(い向ふ)など

け（け厭さる）（け清し）など

そ（そたゝく）など

た（た忘る）（た遠し）など

か（か安し）（か黒し）など

第二　尾はつけて、用ふるもの、

い（仲麻呂い）など

ろ（子ろ）（悲しきろかも）など

ら（筆のさきら）など

し（人しなければ）など

を（心はを思へ）（見てを行かん）など

み（降りみ、降らずみ）など

かし（書讀みさりきかし）など

てにをはも、亦さ、二つ三つを連合して、用ふることありて、共れを、合併のてにをはといふ。例へば、よと、てとを合せて、よてといひ、よと、てと、もとを合せて、よてもといふ、類ひの如し。

○ あるしのさだめ

ナ……なことば（名詞）
カヘ……かへことば（代詞）
ワ……わざことば（動詞）
イヒ……いひかけ（能動詞）
ヒト……ひとりだち（自動詞）
四……四段のはたらき
カ一……上一段のはたらき
シ一……下一段のはたらき
カ二……上二段のはたらき
シ二……下二段のはたらき
カ……變格
ワタ……わざことばのたすけ（動詞の尾辭）

サ……さまことば（形容詞）
ヒ……ひとへのはたらき（單辭）
フ……ふたへのはたらき（複辭）
カ……變格
サタ……さまことばのたすけ（形容詞の尾辭）
ソ……そへことば（副詞）
ツナ……つなぎことば（接續詞）
ナゲキ……なげきことば（感詞）
テ……てにをは
ス……すゑことば（後辭）
タ……たすけことば（助辭）
ナ……なげきことば（感辭）
ツ……つけことば（接辭）

ことばのえやし

日本大辞典

豐後　物集高見　纂

あ　[illegible]のどよりいづるこゑにて、よろづのこゑの、おやごゑなり。されど、
[illegible]のこゑの、はじまりにて、かさたなはまやらわの、
[illegible]のこゑのひびきにて、みな、このこゑをひきいだすなり。

あ　[illegible]なし。古事記

あ　[illegible]日本紀

あ　[illegible]てよぶ、ことぞ。われ、われ、

あ　[illegible]ならん）

あ　[illegible]あれ。に、おな
じ。竹取（あのかきおきし、文をよみて）朗恢集（淡路島、
あはとくるは、みし月の、近きこよひも、所がらかも）

あ　テ・ナ。嗟。こゑなり。なげくときに、いづるこゑ。名類

あ　テ・ナ。こゑなり。こたへを、するときのこゑ。[illegible]抄

ああ　テ・ナ。嗟。こゑなり。なげくときに、いづるこゑ。字鏡

ああ　テ・ナ。こゑなり。うたがひいぶかるこゑ。源氏若菜（みみもおぼおぼしかりければ、ああと、かたぶきてゐたり）

あい　ナ。愛。かなしくおもふをいふ。方丈記

あい　テ・ナ。こゑなり。こたへを、するときのこゑ。

あいきやう　ナ。鮎鮨。うをなり。としなえたる、あゆ。また、こもちあゆの、たほづけなりともいふ。[illegible]抄

あいぎやう　ナ。愛敬。かたゆき、おもむちの、みゆるをいふ。源氏竹川（あいぎやうの、
濱松二（あいぎやうの、こぼるるはかり）

こはれ おちたるやうゝ みゆる、砌もてなし なども）空穂蔵明（かたちもけだかく、あいぎやうづきてぞありし）

あいさ ナ。狩沙。とりのな。あさき。ゝおなじ。

あいさう ナ。愛想。とりまかなひの、よきをいふ。

あいさつ ナ。挨拶。ひとゝ、むかひてする、わざをいふ。古節

あいし ナ。愛子。こなり。かはゆくおもふ、こ。空穂蔵俊（ちちもとが、あいしとして、一生、ひとりこなり）

あいしふ ナ。愛執。ものを、めづるところの、ふかきをいふ。源夢の浮橋（あいしふの罪を、はるかしきとえ給ひて）

あいす ワ。イヒ。カ。愛。ものを、めづるをいふ。また、かはゆくおもふをいふ。狭衣三（うつくしみ、あいじ給ふ）

あいせふ ナ。愛妾。なんなめ。かはゆくおもふ、なんなめ。

あいぞう ナ。愛憎。あはれむと、にくむと。

あいだちなし サ。ヒ。なにの、おもひわくかたも、なきをいふ。ものゝ、ふんべつなきをいふ。源宿木（あいだちなくぞうれへ給ふ）同蜻（あいだちなき、御様どもなり）

あいたどころ ナ。朝所。あしたどころ、ゝおなじ。以字

あいたんどころ ナ。朝所。あしたどころ、ゝおなじ。太政官式（奏議以上、あいたんどころゝ等く）

あいたる ワ。ヒ。シニ。ものゝ、あまゆるをいふ。あまゆ、ゝおなじ。源夕顔（うるとけぬさま、あいたれたり）

あいちやく ナ。愛着。かはゆしと、おもひこむをいふ。

あいなし サ。ヒ。なにの、ふんべつもなきをいふ。また、こゝろゝ、おくそこのなきをいふ。枕草二十（あいなく、人のため、びんなきいひすくしなど、ゝつべき所々も）

あいなたのみ ナ。むなしきたのみをいふ。空穂蔵明（きみよ、あいなたのみして、おねぶりまたまはん）

あいまい ナ。曖昧。ものごとの、あきらかならぬをいふ。

あいよく ナ。愛欲。かたゆくおもふ、こゝろをいふ。今昔十三（たちまちに、あいよくの、こゝろおこして）

あいらし サ。フ。愛。かたゆらし、ゝおなじ。和歌口伝

あいろ ナ。文理。もののあや。また、もののありさま。

あういく ワ。ヒト。ヰ奥行。またがひゆくをいふ。ひとゝゝおくれてゆくをいふ。枕草五（後れじと思ひつるゝ人ゝも知らず走られつるをあういかんこそ、をさまじけれ）

あうぎ ナ。奥儀。おくのこゝろ。また、おくのところ。

あうー ナ。奥旨。おくのこゝろ。あうぎゝおなじ。

あうーち ナ。鷹巣。うぐひすのきのみゝおなじ。和名

あうーちのき ナ。鷹巣。きのな。うぐひすのきゝおなじ。

あうなし サ。ヒ。ところのあさきをいふ。おくなきなり。源東屋（怪しくあうなく人の思たん所もまらぬ人ゝまて）

あうひ ナ。奥秘。あうぎ。あうしゝおなじ。

あうむ ナ。鸚鵡。とりのな。たねあなくくちはしあかく。またもちどのまたゝまにて。よくひとのものいひをまねぶ。枕草三（あうむいとあてれなり。人のいふらんことをまねぶらんよ）孝経紀（新羅より鸚鵡を献ず）

あうむがひ ナ。鸚鵡盃。かひのな。かたちあうむのくちはしゝまにて、まろく、あかきゝあり。さかづきゝつくる。

あうむがへし ナ。鸚鵡返。いひかけられたることばをもていひかへすをいふ。小島口號（あうむがへしなど）

あうむせき ナ。響石。にしなり。ひびきいしゝおなじ。

あうむのつき ナ。鸚鵡杯。あうむがひをもてつくれるさかづき。夫木五（あうむのつきの石ゝさえるを）

あうむのとり ナ。鸚鵡。とりのな。あうむゝおなじ。空穂

あうよる ワ。ヒト。ヰ。おくのかたゝよるをいふ。枕草九（あうよりて三四人つどひて給など見るもあり）

あうら ナ。足占。うらなひなり。あしをふみあるきてうらなふうらなひ。万H（ゆふけとひあうらをそせ〜）

あえか ソ。ものやさしかよわくみゆるをいふ。源夕顔（いとらうたげゝあえかなるこちまて）

あえまつ ワ。ヒト。ヰ。過。あやまつゝおなじ。霊異記

あえもの ナ。肴物。あやかりものゝおなじ。空穂蔵明（あえものをそこまもけさうそあらじかし）

あか ナ。明。赤。すきとほるひかり。またくれなゐのいろ。

あか　ナ。垢。ものゝつけるよごれ。ものゝつけるけがれ。万五十（いもがころものあかつくみれば）

あか　ナ。淵。ふなぞこよりいるみづ。ふなゆゝおなじ。

あか　ナ。閼伽。ほとけゝたてまつるみづ。またほとけゝそなふるれうのみづをもるうつそ。源若菜（あかたてまつり花なりなどするもあらそゝ見ゆ）

あかのぐ　閼伽具。ほとけゝそなふるれうのものをもるうつそ。源鈴山（あかのぐれいのきそやかゝ）

あかのたな　閼伽棚。あかのぐをすうるたな。

あかのはな　閼伽花。ほとけゝたてまつるそな。源幻（あかのそなのゆふはえまていとおもしろくみゆれば）

あかのみづ　閼伽水。ほとけゝたてまつるみづ。新六二（あさなあさなあかのみづくみまきみつみ）

あかのをしき　閼伽折敷。ほとけゝたてまつるものをのするをしき。山家集下（ささみおくあかのをしきゝゆ　ちなくはなにゝあられのたまとまらまし）

あかあか　ソ。もののあきらかなるをいふ。讃岐典侍日記（おほとなぶら近く差らせてあかあかと有けるゝ）

あかあしげ　ナ。赤驃。うまなり。あかはみたるあしげ。東鑑

あかあづき　ナ。赤小豆。まめなり。あづきゝおなじ。本和

あかいろ　ナ。赤色。あかきいろ。あきらかなるいろ。また、そめいろのな。あかさらつるはみゝおなじ。狩衣玉要抄

あかうま　ナ。騂。うまなり。けいろのあかきうま。

あかたどし　ナ。赤威。あかいとのおどし。盛衰

あかたほね　ナ。紅蘿蔔。おほねなり。かたちつねのごとくまてもそなもねもあかむらさきなるおほね。

あかたまな　ナ。鮓。うをのな。さけゝおなじ。御湯殿記

あかかがち　ナ。酸醬。くさのみのな。ほほづきゝおなじ。

あかかげ　ナ。赤駿。うまなり。あかはみたるかげ。和名

あかがさ　ナ。麻疹。あかもがさゝおなじ。榮花楚王の夢（あかがさののちなごりやみこそいとほしうきけ）

あかがしら　ナ。赤裳。かみのけのあかはみたるをいふ。

あかがね　ナ。銅。かね。あかきいろのひとつのかね。和名

あかがは　ナ。赤革。あかいろゝそめたるつくりかは。

あかがひ　ナ。赤貝。かひのな。いがひゝおなじ。

あかがへる　ナ。山蛙。かへるなり。やせからめきてあかくくろはめるひとつのかへる。つねゝくすりとす。大同類聚方

あかがみ　ナ。赤髮。あかがしらゝおなじ。今昔三（頰かちゝ頭そりたり鼻さがりてあかがみなり）

あかかり　ナ。蘇。さむさゝあてられて。てあしのさきのさくるをいふ。神樂歌（あかがりふむなまりなる子）

あかぎ　ナ。赤木。あかいろのき。またあらかそをけづりたるき。源野分（黒木あかぎのませをゆひまぜつつ）

あかきれもの　ナ。赤蒲。かゆなり。あづきがゆゝおなじ。四季物語（巻くれはあかきおもののあつものも）

あかきかさ　ナ。麻疹。あかもがさゝおなじ。榮花浦々の別（例のもがさまてあらでいとあかきかさのこまかなるいできて老たる若き上下わかずこれをやみののしり）

あかかゆ　ナ。赤粥。かゆなり。あづきがゆゝおなじ。散木（むつきの十五日あかきかゆのみゆるを）

あかきみ　ナ。丹黍。きびなり。あかいろのきび。本和

あかきこころ　ナ。赤心。きよきこころ。まごころゝおなじ。万二（かくさしぬあかきこころをすめらべに）

あかきぬ　ナ。赤絹。きぬなり。あかくそめたるきぬ。垂仁紀

あかきぬ　ナ。緋袍。ころもなり。あかきいろのほうい。榮花音樂（あかきぬ着たる者どもいで來て弓づゑまて）

あかきぬすがた　緋袍姿。あかきぬをきたるすがた。五ゐのひと。源澪標（あかきぬすがたいときよげなり）

あかきれ　ナ。蟬。ひびのたぐひなり。あかがりゝおなじ。

あかく　ワ。ヒト。円。蹴。うまのまへあしをもてものをかくをいふ。またあしをまへゝむけてまはしはうごかすをいふ。またひとなどのてあしをまきりゝうごかすをいふ。万七（あか駒のあがくそそぎにぬれゝけるかも）古事談（權守あわてて四枕ゝたふれ。ふして手足を

あがく）盛蕊（手をあがいていやいやゆめゆめ此こ
とまた人まかたりたまふな。そらおそろしとて）
あかくさ ナ。地膚子。くさのな。はきくさまおなじ。宇鏡
あかくさし サ。ヒ。塩蒸。あかのにほひのくさきをいふ。
排内侍日記上（あかくさげなれときこえしを）
あかくちば ナ。赤朽葉。あかはみたるくちば。裝束雜事抄
あかくりげ ナ。黄騮。うまなり。あかはみたるあしげ。和名
あかげうま。ナ 騂馬。うまなり。あかうままおなじ。和名
あかご ナ。赤子。うまれていまだひかずへぬほどのちご。
狭衣（あかごのむつきまつつまれたることちまて）
あかごま ナ。赤駒。こまなり。けいろのあかきこま。万十（あ
かごまのいゆきはばかるまくずはら）
あかごま ナ。我駒。さいはらのてうしのな。催馬樂
あかごめ ナ。赤粕。いねなり。ひとつのいねまて。はたほ
そくみじかくてのきなし。つぶてほそながくてあかし。
あかざ ナ。藜。くさのなめたちのときむはのいろうす
あかまて。ちろし。つねまくひものとし。くきてつゑまつ
くる。徒然草（あかざの羹いくばくか人の費をなさん）
散木下（いかでかはこの世のやみもてらさましあかざの杖なかりせば）和名（藜字をよめり）
あかざのつゑ 藜杖。あかざのくきをもてつくれるつゑ。散木下（ひかりあかざのつゑなかりせば）
あかざのはひ 藜灰。はひなり。あかざをやきてつくれ
るはひまて。そめものまもちふるもの。本和
あかざか ナ。鶏冠。とさかまおなじ。藤川百首（職ひの背
の庭もには鳥のあかざかこえておもひいでつつ）
あかし ナ。燈火。あかりをとるひなり。ともしびまお
なじ。源夕顔（御あかしのかげほのかまうきてみゆ）
あかし ナ。醒。ものごとをあきらかまするまるしまも
ちふるもの。またいつはりなきまるしまもちふるもの。
あかし サ。ヒ。明。赤。ひかりまくもりのなきをいふ。ま
たところまくもりのなきをいふ。またくれなゐのいろ

まみゆるをいふ。空穂上（とうだいの火のあかきま）
万二（かくさはぬあかきこころを）拾遺雜（まろたへの白
き月をも紅の色をもなどかあかしといふらん）
あかしくらす ワ。ヒト。日よをあかしひをくらすをい
ふ。つきひなおくるをいふ。源盛（給物語のすさびまて。明し暮し給ふ）唐物語（山の中まも明し暮す）
あかしだま ナ。赤石玉。たまなり。うるはしきたまをい
ふ。またさんごじゅににせてつくれるたま。
あかしらが ナ。まらがのあかはみたるをいふ。枕草三（牛
かひもおはきまて。髭あかまらがまて顔の赤みて）
あかしらつるばみ ナ。あかはみたるまらつるばみ。弾正式
あかす ワ。ヒト。日命明。あきらかまするをいふ。かく
さすいひあらはすをいふ。源朝顔（涙まひぢてあかし
くらし給ふ）濱松三（委しきことあかしまをし侍らん）
あかずるしやう ナ。赤水精。あかいろのするしやう。臨時祭式
あかた ナ。上田。みつなきたをいふ。はたまおなじ。

あかた ナ。縣。みかどまつきたるたはたのあるところ。
またおなかまおなじ。万七（あふみあがたのものがたり
せん）土佐（ある人あがたの四とせ五とせはてて）
仲勢（昔あがたへゆく人まの島のはなむけせんとて）
あがたありき ナ。あがたをみありくをいふ。蜻蛉上（いみ
たがへんとてあがたありきの所まわたりたる）
あかだいこん ナ。紅蘿蔔。おほね。あかおほねまおなじ。
あかだて ナ。赤盾。たてなり。あかくぬりたるたて。崇神紀
あかだな ナ。開伽棚。ほとけまそなふるうつはものをす
うるたな。方丈記（その西まあかだなをつくり）
あがたぬし ナ。縣主。あがたをつかさどるつかさびと。また
かばねのな。古事記（大縣小縣のあがたぬしをさだめた
まひき）姓氏錄（志紀のあがたぬし多朝臣）
あかだひ ナ。赤魚。うをなり。あかきたひをいふ。神代紀
あかだま ナ。赤玉。たまなり。あかきたま。古事記（あかだ
まはをさへひかれどまらたまの。きみがよそひ〜）

あかたま ナ。虎魄。たま なり。こはくま おなじ。水和

あがたみ ナ。縣見。あがたありきま おなじ。古今雜（やんやのやをひでがみかはのそうま なりてあがたみ まはいでたたじやといひやれりけるかへりごとま）

あがためし ナ。縣召。ちもく なり。くにぐにの つかさびとなさだめらるるちもく。むかしは むつきま ありき。公事根源

あがたもり ナ。縣守。あがたを つかさどる つかさびと。

あかぢ ナ。赤地。おりぢ なり。あかき おりぢ。盛衰

あがちご ナ。賜兒。はらへま もちふる もの なり。みかどの おんあがもの まてひとがたの たぐひ の もの なり。公事根源（是て一日より八日まであがちごもちて まる。あさがれひまて主上ま まるらず。四の かはらけを指して。上まはりたる紙ま穴をあけて御いきを入る）

あがちだ ナ。頭田。たなり。たみま わかち あたふる た。孝德紀

あがつ ワ。イヒ。円。頭。わかつまおなじ。蜻蛉（わりごも）ちきたれはさまざま あがちなどまて）

あかつき ナ。閼伽器。あかみづをもりてほとけまそなふるうつは。源鈴出（あかつきのおと。みづのけはひ）。

あかつき ナ。曉。よのあくるころ。あかときまおなじ。

あかつきたち 曉起。あかつきまおくるを いふ。續千（夏草の露分衣此頃もあかつきおきは袖ぞすずしき）

あかつきがた 曉方。よのあけんとするころほひ。源夢（念佛のあかつきがたなど志のびがたし）

あかつきづくよ 曉月夜。あかつきまつきの あるころ。源榊（夜ふかきあかつきづくよのえもいはず）

あかつきづゆ 曉露。あかつきまおくつゆ。千載

あかつきやみ 曉闇。あかつきまつきの なきころ。續後撰雜（うはたまのあかつきやみのくらきよま）

あかつきげ ナ。赤髑毛。うまなり。あかはみたる つきげ。和名

あかづく ワ。ヒト。円。垢。あかの つくを いふ。よごるるをいふ。万五（いもがころものあかづくみれは）

あかつち ナ。代赭。つちなり。あかくくろはみていはのごとくかたまりたる つちくれ。本和（代赭をよめり）

あかときの ナ。曉。よのあけんとするころ。万二（あかときのめざましぐさと是をだま みつつ坐して我を忍はせ）

同十二（あきの夜はあかときさむし まろたへの妹が衣手きんよしもがも）同十（此頃のあかときつゆま我宿の萩の下葉も色づきにけり）同十三（あかときのかたたれどきまさまかぎをときにし舟のたづきまらずも）

あかごんぼ ナ。赤牛。むし なり。あかゑむしはま おなじ。

あかごり ナ。耳斗。ふなゆなくみとるうつもの。

あがなふ ワ。イヒ。円。贖。あがふま おなじ。和玉篇

あかに ナ。赤土。つちなり。あかいろのつち。

あかにし ナ。辛螺。かひのな。にしま おなじ。

あかにのほ ナ。さけをのみてかほのあからむをいふ。祝詞式（長みけの遠みけとあかにのほまきこしめし）

あかぬく ワ。ヒト。シコ。あかのとるをいふ。

あかね ナ。茜。くさのな。つるくさ なり。はそまろくちひさくてすゑとがれり。ひとやしごとま四つのはつきて。はのあそひまたくきまもほそやかなるはりあり。あきのころ。なをさきてみをむすぶ。ねたあかくむらさきはめり。ねをとりてあかいろのそめものまもちふる。本和

あかねぞめ ナ。茜染。あかねをもてそめたるそめもの。

あかねり ナ。赤絹。きぬ なり。ねりたるあかきぬ。彈正式

あかは ナ。明衣。みかどのめしたまふゆかたびら。三箇重事抄

あかはだ ナ。赤膚。あかきはだをいふ。かむなをたがれたるはだへ。またきものをとりたるはだへ。古事記（あかむだなるうさぎ）六帖二（世をうしとおもひいれども あかはだのやまを身をこそかくさざりけれ）

あかはだか ナ。裸。あかはだまおなじ。七一職人歌合（生剝のかたかたうさぎ跳れはあかはだかまも澄る月哉）

あかはだかども ナ。裸伴。むかしのつるぎのな。垂仁紀

あかはとり ナ。明衣。いみきよめたるきよきそとり。大嘗祭式

あかばな ナ。赤桑。そなさきのあかきそな。源末摘花（てづ

からこのあかはなをかぎつけにほたして）

あかはむ　ワ。ヒト。ヨ。赤。あかくいろづきてみゆるをいふ。空穂蔵開（あかはみたるさきしまかきていれたり）

あかびきのいと　ナ。赤引糸。いみきよめたるきよきいと。かんみそをおるれうまもちふるいとなり。神祇令義解

あかひげ　ナ。赤髭。ひげなり。あかいろのひげ。今昔（たゞけすむやかまてすこしあかひげなるありけり）

あかびつ　ナ。明櫃。いみきよめたるきよきひつ。四時祭式

あかひも　ナ。緋紐。ひもなり。なみまつくるひも。式縫殿

あかひゆ　ナ。赤芋。くさのな。ひとつのひゆなり。くきもともあかきひゆまてあかいろのそめものまもちふ。和名

あかひる　ナ。白蛇。あきらかなるひる。くらくなきひる。落葉三（かくわが家をあかひるまいりたちて）

あかふ　ワ。イヒ。ヨ。照。ものをいたしてつみをつぐのふをいふ。万十（あがふいのちもたがためまなれ）續世機六（このとがむいかがあがひむべるべき）

など立そひもてあがめ）同明石（かしつきあがめられ）今昔ヨ（此國ま上古よりあがめまつる神ましま）

あがむ　ワ。イヒ。シニ。照。あがふまおなじ。霊異記

あかむらさき　ナ。赤紫。いろなり。あかはみたるむらさき。源給合（あかむらさきの表紙志たんのぢく）

あかめ　ナ。鬼うなのな。たひまおなじ。古事記

あがめかしつく　ワ。ヒト。ヨ。たいせちまかしつくをいふ。源東屋（けたかきことをせんとあがめかしつかると）

あかも　ナ。赤裳。もなり。あかきこしごろも。万六（ますらをむみかりまたたしをとめらむあかもすそひく）

あかもがさ　ナ。赤疱瘡。もがさなり。あかきもがさ。禁花月峰（かくいふ程ま今年むあかもがさといふ物出來て上巾下わかす病ののしる）日本紀略（赤疱瘡をよめり）

あかもの　ナ。腐物。あがなひものなり。ならへのときいままでをかしたるつみのあがなひまいたすもの。公事根源雄略紀

あからかッ。暉。ひかりのすきとほりたるをいふ。

あからけし　サ。ヒ。暉。ひかりのすきとほりてみゆるをいふ。ひかりのあかきなり。古事記（はだあからけみ）

あからさま　ソ。倏忽。ものごとのにはかなるをいふ。またかりそめなるをいふ。空穂忠乞（ちひ中してあからさまにまかでぬ）狭衣二（火などおこしおきてよゐの間のあからさまにいでたる）神武紀（倏忽をよめり）

あからさまにす　ワ。ヒト。カ。おもひのほかなることまあふをいふ。ちぬるをいふ。神代紀（夭折をよめり）

あからし　サ。ッ。鯉。ねもごろまみゆるをいふ。霊異記

あからしぶ　ワ。ヒト。ヨ。鯉。ねもごろまするをいふ。霊異記

あからさまかぜ　ナ。暴風。かぜなり。にはかまおなじ。神武紀

あからす　ワ。イヒ。ヨ。令明。あきらかまするをいふ。祝詞式（あめつち月日ととるまてらしあからし）

あからぶ　ワ。ヒト。ヨ。暉。あからかまなるをいふ。うるはしくなるをいふ。祝詞式（赤玉の御あからびまし）

あからぶ　ワ。イヒ。シニ。昭察。あきらかまするをいふ。

あきらむ　ヨ　おなじ。續紀三（山川のきよきところをば、たれとともまかもみそなはし　あからべたまへん）

あからむ　ワ。ヒト。四。熟。このみくさのみのうれてあかくいろづくをいふ。皇極紀（九穀なりあからむ）

あからめ　ナ。實眼。めをほかのものまうつすをいふ。ほかなみるなり。空穗藏開（御ふみよむさかりまうへあからめ　ほたまへるまま宮とりて見たまひて）

あからめさす　ワ。ヒト。四。候忽。ことのにはかなるをいふ。孝行紀（あからめさすごとわが子をうしなひ）

あからめす　ワ。ヤヒ。カ。實眼。めをほかのものまうつすをいふ。こころをほかへやるをいふ。榮花　山花（君ぞいづこヨあからめせさせ給へるぞやと云々なき給ふ）

あからをとめ　ナ。紅顏麗子。かほのあからかなるをとめ。古事記（あからをとめをいざさはよらしな）

あからたぶね　ナ。赤舟。あかくぬりたるふね。万六十（沖行や赤ら小舟ヨつとやらはけたし人見て聞きみんかも）

あかり　ナ。明。燈。あきらかなるひかり。また　ともしび。

あがりうま　ナ。駿馬。うまなり。はねうまヨおなじ。續世紀七（あがりうまヨのせてさきヨぐせさせたまへり）

あがりかひこ　ナ。蠶蠶。かひこなり。まにたるかひこ。

あがりくち　ナ。うへヨあがるくちのところ。

あがりこ　ナ。蠶蠶。かひこなり。あがりかひこヨおなじ。

あかりしやうじ　ナ。明障子。さうじなり。ひかりをとるやうヨすくたりたるさやうじ。今昔三（みづから立走りてあかりしやうじをあけて文をとりてみれば）

あがりだん　ナ。階壇。たかきところヨのぼるもしをいふ。

あがりたるよ　ナ。上代。とほきむかし。とほきいにしへ。源若菜（雲間をさわがしたる例あがりたる世ヨはあり）

あがりてのひと　ナ。上代人。とほきむかしのひと。源若菜（あがりてのひとにてあたるべくもあらじをや）

あがりてのよ　ナ。上代。あがりたるよヨおなじ。大鏡七（いとあがりてのよを知りたべらず）

あかりてる　ワ。ヒト。四。明耀。あきらかなてるをいふ。神代紀（日尻あかりてれり眼ゑやたかがみの如く）

あかりまど　ナ。明窓。まどなり。あかりまどヨおなじ。

あかりまど　ナ。仰窓。まどなり。あかりをとるまど。

あかりや　ナ。半食。いへなり。つみびとをいるるいへ。

あかる　ワ。ヒト。四。明。赤。暗。熟。あかくなるなり。ひかりのすきとほるをいふ。いろつやのうるはしくなるをいふ。このみくさのみのあからむをいふ。枕草二（やまぎはすこしあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる）祝詞式（あかるさへてるたへ）万十（あかるたちばな）

あがる　ワ。ヒト。四。上。たかくなるをいふ。うへヨなるをいふ。万十二（あがるひはりヨ）源桐壺（われをを思ひあがり）續紀三（穀の價あがりたかうまて）

あがる　ワ。ヒト。四。騰。うまのたねくるふをいふ。雄略紀

あがりくるふ　うまのたねくるふをいふ。五代帝王物語（基頼と鹿ををりて背ヨさしてくせるものヨのりて

あがりくるひたるなり）

あがりさわぐ　うまのたねさわぐをいふ。枕草二（うまのあがりさわぎたるおそろし）

あがる　ワ。ヒト。四。もののたてヨなるをいふ。いろのそまるをいふ。またうをむしのまゆるをいふ。林葉集（くれなゐのいろあがりけるこひのちしほぞ）

あがる　ワ。ヒト。シ二。別。わかれわかれヨなるをいふ。空穗陰後（みな十人廿人とあがれてよべの道を求め奉る）源宿木（人々も昔所々ヨあがれちりつつ）同澪標（さぶらふ人々もやうやうヨあがれゆき）

あがるくひ　ナ。麻柱。あなひヨおなじ。宇治拾遺（火をうちふりつつかみざまを見るほどヨあがるくひのうちヨおちつまりてえたらかぬなどあり）

あかるたへ　ナ。明妙。うるはしくつややかなるたへ。祝詞式

あがれあがれ　ソ。わかれわかれヨなるをいふ。大鏡五（なをのこ君達の御母あがれあがれヨおもしましき）

あかゐ　ナ。赤猪。きしなり。けいろのあかきゐのきし。古事記

あかゐ　ナ。閼伽井。あかのみづをくむゐ。拾玉二（諸共ゐ住らん物を年をへて向ふあかゐの水の心を）

あかゑむば　ナ。赤卒。むしなり。みのほどちひさくやせほそりて。つはさあかきひとつのゑむば。和名

あかなけ　ナ。閼伽桶。をけなり。あかのみづをくむをけ。

あかなけら　ナ。莪朮。くさのな。うけらゐおなじ。

あき　ナ。大辛螺。かひのな。ひとつのにしなり。かたちさざえゐにてながく。からゐつのなくてみあかし。本和

あき　ナ。秋。いねのあからむころ。もとのことみのふづきよりながづきまでをいふ。万一（あきさらは今もみるごとつまどひゐ鹿なかん山ぞたかの原の山）

あきのいろ　秋色。あきのけしき。拾愚上（さえのぼる月の光ゐことそへて秋の色なるほしあひの空）

あきのかぎり　秋限。あきのえてをいふ。拾玉七（世々をへて法の道を照さなんあきの限ぞ秋の夜の月）

あきのかたみ　秋記念。あきをおもひいづるかたみ。拾遺秋（くれてゆくあきのかたみゐおくものこ）

あきのけしき　ナ。秋景。あきのころのけしき。玉葉（志のめの云々秋のけしきゐ世となりにけり）

あきのけはひ　秋氣。あきのころのけはひ。紫式部日記

あきのこころ　秋心。あきのさびしきこころ。千載（事毎ゐ悲しかりけりうべしこそ秋の心を恋といひけん）

あきのころも　秋衣。あきのころきるころも。壬生集二（一夜月曇らで宿れ五年の秋の衣と涙なりけり）

あきのこゑ　秋聲。あきのころのさびしきこゑをいふ。まつかぜのおと。きぬたのひびきなど。拾愚下（さえ渡る霜ゐ向ひてうつ衣幾年秋の聲をつぐらん）

あきのさかり　秋盛。のべのちぐさやまのもみぢなどのあきをさかりゐよそほへるころをいふ。拾遺（忍ぶれは苦しかりけり篠薄秋の盛ゐ成や志なまし）

あきのしぐれ　秋時雨。あきのころふるしぐれ。古今戀（あ

きのしぐれと身ぞふりまける）

あきのしも　秋霜。しもなり。あきのころおくしも。

あきのしらべ　平調。もののねのしらべ。あきのころゐかなふしらべ。りつゐおなじ。狭衣三（忍ぶるを音ゐたてよとや今宵さえあきのしらべの聲の限りを）

あきのせつ　秋節。なつとふゆとのあひだのせつ。

あきのぢもく　秋除目。あきのころあるぢもく。公事根源

あきのつかさめし　秋司召。あきのころあるつかさめし。源葵（秋のつかさめしあるべき定めゐて）

あきのとなり　秋隣。あきのあとときとなりいふ。なつまたふゆなり。續千載冬（かきねなるくさもひとめもしらもがれぬあきのとなりやとほざかるらん）

あきのとまり　秋止。あきのをもり。新拾冬（おちつもる紅葉をみれは一年の秋のとまりをあじろ成けり）

あきのなぐさ　秋七草。ななくさなり。あきのころのなぐさ。万八（秋の野ゐ咲たる花を指をりかきかゞ

そふれは七草の花）また（はぎのたなをはな葛花なでしこの花をみなへし。またふぢはかま朝顔の花）

あき　ナ。商。うりかひのわざ。あきなひゐおなじ。類名

あきあつき　ナ。秋小豆。あきのころみのるあつき。

あきあはせ　ナ。秋稗。ころもなり。あきのころきるあはせ。新六五（あきあはせをやくもいそぐつちの音かな）

あきうど　ナ。商人。あきなひをするひと。あきびとゐおなじ。源玉葛（あやしきいちめあきうどのなかまて）

あきかぜ　ナ。秋風。かぜなり。あきのころふくかぜ。

あきかた　ナ。すこしあきそめたるころをいふ。仲勢（ふかくさゐすみける女をあきがたまやおもひけん）

あきがはり　ナ。商變。ころかをりてかひたるものをかへすころゐなるをいふ。万十（あきがをり志らすとの御法あらはこそわがまたごろもかへしたまはめ）

あきぎり　ナ。秋霧。きりなり。あきのころたつきり。古今

あきぐさ　ナ。秋草。くさなり。あきのころのくさ。夫木

あきぐさ　ナ。秋草。くさなり。きくさおなじ。塵添壒嚢抄

あきぐるま　ナ。空車。くるまなり。からくるまおなじ。

あきさ　ナ。秋沙。とりのなひとつのかもなり。かたちつねのよりもちひさく。かしらとせとをうすぐろく。たらたまろく。あしとくちばしとをあかし。万七（山のまま波るあきさの往てゐんその河の瀬ま波たつなゆめ）

あきさしき　ナ。空蚕。ざしきなり。ひとのをらぬざしき。

あきさす　ワ。イヒ。日。蝨。もののてづけをするをいふ。字鏡

あきさま　ナ。秋方。あきのかた。あきのころ。玉葉雜（巻山院かくれさせたまひてつぎのとしあきざまより）

あきさめ　ナ。秋雨。あめなり。あきのころふるあめ。

あきさりどろも　ナ。秋衣。ころもなり。あきまなりてきるころも。万十（たなばたのいはばたたてておるぬのの　あきさりどろもたれかとりみん）

あきさる　ワ。ヒト。日。秋玉。あきのくるをいふ。万二（秋さらは今もみるごと妻戀ま鹿鳴ん山ぞたかの原の上）

あきしく　ナ。菊。くさのな。きくまおなじ。藏玉集（淺茅生も雜る草葉もかるる迄野ま殘けりあきしくの花）

あきづひ　ナ。清貫。まぶたをあきてみえぬめ。和名

あきしりぐさ　ナ。秋知草。くさのな。をぎあり。藏玉集（衆発ま秋知草の風よりや老の秋の先ま知るらん）

あきぜみ　ナ。蜩蟬。せみなり。なぜせみまおなじ。夫木九（たかき木ますずろがましきあきぜみのこゑ）

あきた　ナ。秋田。たなり。あきのころのた。万十（あきたかりかりほを作り我をれば衣手寒く露おきにけり）

あきたし　サ。ヒ。飽。あかまほしきをいふ。源帯木（ようせずハあきたき事もありなんや）狭衣二（女君のありさまのいとあきたく怪しげなるをいかに見給るらん）

あきだな　ナ。空店。ものをすゑぬたな。またあきやなり。

あきたる　ワ。ヒト。日。厭足。もののたりてあくはかりなるをいふ。万十（あきたらねども）字鏡（嗣字をよめり）

あきちぐさ　ナ。秋遲草。くさのな。たぎまおなじ。藏玉集（秋ちぐさ早花咲る此野ま旧射の鹿を待ぬ計りを）

あきつ　ナ。蜻蛉。むしのな。やまめまつはさのいできたるものまてなつあきのあをひ。おほくそらまとぶ。いろをあをぐろきもの。あかはめるもの。きはめるもの。あり。字鏡

あきつかた　ナ。秋方。あきざままおなじ。とりかへ三（こぞのあきつかたよりみだりどちのあやしく）

あきつかみ　ナ。現神。みかどをまなす。あらを。なるかみといふところまてみかどをたたへまをすみなり。万八（あきつかみわが大君のあめのした八島のなかま）

あきづく　ワ。ヒト。日。秋附。あきのけしきのつくをいふ。またあきまなるをいふ。万十（いまよりを　あきづきぬ　らしあしびきのやまもつかげまひぐらしなきぬ）

あきつくに　ナ。蜻蛉洲。あきつしままおなじ。夫木三（島の外も涙治れるあきつ國ま道ある君の恵をぞまる）

あきつしま　ナ。蜻蛉洲。みくにのおほななり。おんむのみかどのこのくにのかたちをあきつのとなめせるさまなりとのたまへりしよりこなたこのみくにをまかよびならへり。またかうあんのみかどのみやこなり。万一（うましくにぞあきつしまやまとのくにを）

あきつば　ナ。蜻蛉羽。あきつむしのつはさ。またうすらかなるおりもの。万三（あきつはのそでふるいもをたまくしげおくまおもふをみたまへわぎみ）

あきつぼね　ナ。空局。ひとのすまぬつぼね。排内侍日記（あかとりのいしとさかあるがけいろうつくしきをたまりてあきつぼねまほこらかして）

あきつむし　ナ。蜻蛉。むしのな。あきつまおなじ。類聚名

あきどふ　ワ。ヒト。日。喉喝。くちをあくるなり。ちごのものをいひならふをいふ。またうをのみつのうへまうかびてくちをうごかすをいふ。古事記（あきとひまたまひき）神武紀（うをみなうかびいで水ま隨ひてあき

とふ）蜻蛉三（そこらのひとのあぎとふやうますれば）

あさなぐさ　ナ。瓊菊。きくなり。ふゆまでのこれるきく。藏玉集（たなちりてその名はかりまあさなぐさ）

あさなひ　ナ。商。もののうりかひをいふ。竹取（いとかたきあさなひなり）爲頼集（あさなひものま）

あさなひぶね　ナ。商船。ふね。あさなひものをのするふね。

あさなひもの　ナ。商物。あさひとのうりかひまもちふるものをいふ。爲頼集（いちひめのかみのいがきのいかなれやあさなひものま千代をつむらん）

あさなふ　ワ。イヒ。ヰ。商。もののうりかひをするをいふ。空穂藤原の君（物をたくさへていちし。あさなふはこそかしこからめ）大和（かかるものあさなひて世まふる人いかならんといひて泣けれは）類名（市字を訓り）

あさの　ナ。秋野。のなり。あさのころののはら。万二（あさのまを今こそゆかめ物部の男女の花にほひみま）

あさのあふぎ　ナ。秋扇。あふぎなり。あさまなりてすてられたるあふぎ。ときおとろへてすさめられぬものまなりたるたとへ。壬生集二（いまをとてひとをおくともたなはたのあさのあふぎの名をはわすれじ）

あさのしも　ナ。鄙。つるぎまおなじ。草庵集（あさのしもかけける松もあるものを結ぶ契りの色變るらん）

あさのしらべ　ナ。平調。もののねのきらべ。あさのこころまかなやきらべ。りつまおなじ。狹衣二（忍ぶるを音またてよとや今宵さを秋のきらべの聲のかぎりを）

あさのはな　ナ。秋花。くさのな。きくまおなじ。藻鹽

あさのふた　ナ。甲香。あさといふかひのふたをいふ。たきものをあたするときまもちふるものなり。本和

あさのみや　ナ。秋宮。きさきのおんしまする みや。またきさきをまをす。榮花御着裳（あさの夜まあさのみやまてなかれはつきのひかりをそへてこそみれ）

あさはぎ　ナ。胡枝子。くさのな。はぎまおなじ。万葉

あさはつ　ワ。ヒト。シ。鮑果。あくことのきたまるをいふ。

いたくあくなり。千載離（ぬしきらぬやまたのひつぢつれもなくあさたてし世まなにのこるらん）

あさひと　ナ。商人。あさなひをもてなりたひとするひと。古今序（文屋のやすひでも詞巧まて其さま身まおもす。いたはあさひとのよききぬ若たらんが如し）

あさべや　ナ。空部屋。へやなり。ひとのすまぬへや。

あさまめ　ナ。秋豆。まめなり。あぎのころみのるたいつ。

あさみつ　ワ。ヒト。ヰ。飽滿。ところまみちたるをいふ。土佐（あさみちてふなこどもたちつづみをうちて）

あさむし　ナ。秋虫。むしなり。あぎのころくさむらますたきてなくさまざまのむしをいふ。新万下（あきの野またまとかかれる白露をなくあさむしの涙なりけり）

あさんど　ナ。商人。あきひとまおなじ。

あさんどやど　ナ。商人宿。あさひとのやどる。をたごや。

あさめくら　ナ。清盲。めくらなり。あさじひまおなじ。

あさや　ナ。空屋。いへなり。すめるひとなきいへ。

あさやう　ナ。阿膠。にかをなり。ろのぐまもちふるよきにかを。綾小路俊量卿記（びんたたらをあゆがせはこそ。あゆがせはこそ。あさやうついたれ。やれことうとう）

あさやしき　ナ。空邸。やしきなり。すめるひとなきやしき。

あさやま　ナ。秋山。やまなり。あぎのころのやま。万葉

あさらか　ソ。明。ひかりのすきとほるをいふ。くもりなくみゆるをいふ。またきよらかなるをいふ。九恭紀

あさらけし　サ。ヒ。明。あさらかまあるをいふ。万十二（きしまのやまとのくにまあさらけき名まおふともものをこころつとめよ）拾遺（よろづよをあさらけくみんかがみやまちとせのほどをたちりもくもらじ）

あさらむ　ワ。イヒ。シ。昭察。あさらかまみるをいふ。あさらかまるをいふ。万九十（あさの花まがいろいろまみし給ひあさらめ給ひ）源橘姫（まはしはたちよらせたまふひかりに云々ものあさらむるこころまてなん）

あさる　ワ。ヒト。シ。惆。おもひのほかなることまあひ

てつねのところをうしなふをいふ。またものゝおぼろくをいふ。蜻蛉中（たてもあきれてぞ居たる）枕草五（あきれていとこゝもすぢなき世かなとたてるもなかし）榮花川（いみじきめをみてあきれまどひて）讃岐典侍日記（あきれられける）

あきれいたし　サ。ヒ。あきるることのたなだたきをいふ。源松三（あきれいさきまでおもひよろこびたる）

あきれがほ　ナ。悃頃。ものゝあきれたるかほつき。

あきなさめ　ナ。秋収。あきたのいねをかりとるをいふ。夫木計（志ぐれせぬよしだのむらのあきなさめ）

あく　ナ。蝗。あげはりゝおなじ。空穂藏開（右近のあくよりくさくをいだす。左近のあくよりふたつな山〜）

あく　ナ。灰汁。たひみづのまたたりのまる。そめものゝのまるゝもちひ。またものをあらふゝもちふ。和名

あく　ナ。悪。もののあしきをいふ。志わざのあしきをいふ。

あく　ナ。味噌。あぢたひなり。ゑぐきあぢたひをいふ。

あく　ワ。ヒト。厭。もののみちたりていとたしきまでゝなるをいふ。源手習（こよなくあきにたるこちす）古今（櫻花春加れる年だゝも人の心ゝあかれやとする）

あく　ワ。ヒト。日明。明。空。あかくなるをいふ。またものゝひらくるをいふ。またもののなかのむなしくなるをいふ。枕草五（戸のあきたるがあらたなれば）紙世櫂一（あきたるゝ隨ひて中務の少輔ゝぞ成にける）宇拾八（藏どもあけさせて）太平九（道をあけよとて）

あく　ワ。ヒト。三。明。あかくなるをいふ。またあらたまるをいふ。源桐壺（あくる年のなる。坊さだまり給ふ）伊勢（ほのぼのとあくるゝなくなくかへりにけり）

あぐ　ワ。イヒ。三。上。結。ものをうへゝするをいふ。ものをたふとくするをいふ。またものをたてまつるをいふ。またあたひをたかくするをいふ。たれたるかみをうへゝとりてむすぶをいふ。狭行紀（力よく鼎をあぐ）續紀十（冠位一階をあげたまふ）神代紀（御くしを

あげて）万廿（うなゐもなりもかみあげつらんか）

あくい　ナ。悪意。わるきこころ。まことならぬこころ。

あくえん　ナ。悪縁。えんなり。をとこをんなのわるきえん。

あくがらす　ワ。イヒ。日。令憧。あくがるるやうゝするをいふ。蜻蛉中（かくのみあくがらしたつるた）

あくがる　ワ。ヒト。三。憧。こゝろのそらゝなるをいふ。こゝろのおちつかぬをいふ。落窪二（おもておこしゝ思ひしたたたあくがれゝあくがる）類名（憧字をよめり）

あくがれありく　あくがれてありくをいふ。源野分（風のさきゝ。あくがれありきたまふもあれゝみゆ）

あくがれいづ　あくがれていづるをいふ。後拾（わが身よりあくがれいづるたまかとぞみる）

あくがれすごす　あくがれてすぐすをいふ。源松四（すゝろゝ山ふかくあくがれすごさましや）

あくがれうむ　あくがれたじひるをいふ。空穂藏國（そゝろごころのつきてあくがれそめゝしを）

あくがればつ　いたくあくがるるをいふ。源夕霧（魂もあくがれたてたみる毎ゝとがめられたべれば）

あくがれまどふ　ふかくあくがるるをいふ。源松四（ところの志づまるよなくあくがれまどふ）

あくぎやう　ナ。悪行。わるきおわざ。平家三（たゞしあくぎやうあらはおそんまでたかなふまゝ）

あくぎやく　ナ。悪逆。みちゝさかへるわるきおわざ。

あくこう　ナ。悪口。ののしるをいふ。わるくちゝおなゝ。

あくさう　ナ。悪相。にんさうなり。わるきにんさう。

あくゝ　ナ。悪事。わるきおわざ。みちならぬおわざ。

あくしつ　ナ。悪疾。やまひ。あしきやまひゝおなゝ。

あくゝん　ナ。悪心。わるきこゝをおもふこゝろ。

あくせん　ナ。悪銭。わるきわざをもてえたるぜに。

あくそう　ナ。悪僧。ほうしなり。わるくあらあらしきほうし。盛衰二（勢至房といふあくそうあり）

あくた　ナ。芥。けがれゝまみれたるくゝ。またちりぼひ

すたれたるもの。散木下（あくたゐてきたなき溝のみづぐきもかきながせどもきどろもどろゐ）

あくた　ナ。蚊。むしのな。ひとのたらのなかゐいでくるむしなり。きろくてながきむし。和名（蚊字をよめり）

あくたう　ナ。惡黨。わるもののなかま。東鑑（去月二十六日五十餘人のあくたうを率て寺領ゐ亂入〜）

あくだう　ナ。惡道。ほとけぶみゐあることは。佛となりがたきみち。榮花蜻蛉林（おのれをばあくだうゐおちさどもさばこそあらめ。たゞ念佛なのみきくべき）

あくたとり　ナ。塵斗。あくたをすくひとるだうぐ。

あくたふ　ナ。塵堆。ゐりあくたのつもれるところ。和名

あくたむし　ナ。蠶蠶。むしのな。つのむしゐおなじ。本和

あくたる　ワ。ク。ヒ。淋灰。ものひみづのきたたるをいふ。和名

あくたれもの　ナ。惡黨。わるもの。あくたらゐおなじ。

あくと　ナ。惡徒。わるものなり。あくたらゐおなじ。東八（併あくと涙人等をまねきゐて）

あくどし　サ。ヒ。ものいひのかさなるをいふ。あながちなるをいふ。空穗。藏開（かくあくどくいたきたまふ）

あくなふ　ワ。カ。ヒ。沛艾。うまのあとあしをあぐるをいふ。うまのたゐるをいふ。類名（沛艾をよめり）

あくにん　ナ。惡人。わるききわざをするひと。

あくねん　ナ。惡念。わるきことをおもふおもひ。

あくのざ　ナ。軸座。とばりをひきめぐらしたるかりや。儀式三（歌人まづ軸ゐ入る次ゐ國司あくのざゐ就く）

あくび　ナ。吹呿。くちのおのづからひらくるをいふ。ねむりをもよほせるとき。ものゐうみたるときなどゐすることなり。源朝顏（宮もあくび〜）字鏡（吹呿をよめり）

あくびす　ワ。カ。カ。吹呿。あくぶゐおなじ。醫心

あくひつ　ナ。惡筆。てかくわざのつたなきをいふ。

あくぶ　ワ。カ。ヒ。吹呿。あくびをするをいふ。榮花後悔大將（俄ゐあくぶせ給ひて御けしきいと苦しげなれば）枕草三（長々とうちあくびて）類名（嚏字をよめり）

あくま　ナ。惡魔。おになり。ほとけのみちをさまたぐるおに。空穗初秋（あくま國ゐ。うどんげとりゐいかん）

あくまで　ソ。もののみちたるをいふ。ものの十ぶんゐ。るをいふ。空穗國讓（御てならひあくまでせさせたまふ）

あぐまふ　ワ。ヒ。シ。踞。ふたつのあしをくみむすぶをいふ。今昔三（足をもて後よりあぐまへてかかへて）

あくみやう　ナ。惡名。ななり。あしきなをいふ。

あぐむ　ワ。ヒ。四。踞。ふたつのあしをくみむすぶをいふ。古事記（そのつるぎのさきゐあぐみ居て）

あぐむ　ワ。ヒ。四。倦勞。ものゐうみつかるるをいふ。北條九代記十（平兵云々なかなかあぐみてぞみえける）

あくめ　ナ。惡馬。うまなり。むねうまゐおなじ。經世纏七（馬をひきたまひける大方いひきらぬあくめゐなん）

あくや　ナ。幄屋。あくをひきめぐらしたるかりや。太平記

あぐら　ナ。胡床。いすのたぐひ。きりをかくるだうぐ。雄略紀（きしまつとあぐらゐ坐〜）和名（胡床を訓り）

あくらう　ナ。惡獠。おになり。たたりをするおに。あくりやうゐおなじ。源夕霧（あくらうたきふねきやうなれど）

あぐらかく　ワ。ヒ。四。踞。あしをくみてすわるをいふ。

あぐらゐ　ナ。踞居。あぐらのうへゐをるをいふ。古事記（あぐらゐの神の御手もちひく琴ゐまひするをみな）

あくりやう　ナ。惡靈。おになり。たたりをするおに。大鏡五（あくりやうの左のおほいどのと申〜つたへたる）

あくるつとめて　ソ。つとめてゐおなじ。空穗菊宴（大宮あくるつとめてなかのおとどゐわたらせたまふ）

あくるとし　ナ。明年。つぎのとしをいふ。空穗俊蔭（あくるとしの春よりきけばこの林より西ゐ木をたふす）

あくるひ　ナ。明日。つぎのひをいふ。空穗嵯峨の院（かんのおとどわたり給ひて。あくるひ一日なやみたまへば）

あくなけ　ナ。灰汁桶。をけなり。あくのきるをいるるをけ。

あけ　ナ。朱。あかきいろ。あかゐおなじ。續拾雜（くものうへゐつきみし秋を思ふゐもあけの衣のいろも恨めし）

あけのうほぶね 緒舟。あかくぬりたるふね。万三（やましたのあけのそほぶねおきゝこぐみゆ）

あけのたまがき 朱玉垣。あかくぬりたるかき。散木四（ことゝしもあとなたるみのあけのたまがき）

あげうた ナ。いにしへのうたのふしのな。神代紀（おきつどりかもづくまゝゝ云々あげうたといふ）

あげたおり ナ。わらたのふりわけがみをあげたるすがたのふりわけがみのときよりもおとりざまゝゝみゆるをいふ。源桐壺（いとかうきびたなるほどたあげおとりやとうたがたしくおぼされつるを）

あげかすがひ ナ。鼎蓋。あげどをとむるかすがひ。和名

あげかた ナ。明方。よのあけんとするころ。新古秋（秋の夜の月やをじまの天の原あげがたちかき沖の釣舟）

あけく ワ。ヒト。カ。明来。よのあけてくるをいふ。万葉

あげく ナ。結局。ことのをたり。ことのとまりをいふ。

あげくだ～ ナ。吐瀉。あるたときあるたくたすやまひ。

あけくらす ワ。イヒ。四。あかしくらすゝおなト。空穂俊陸（春たを花をながめあきたを紅葉をながめてあけくらすゝ）

あけくる ワ。ヒト。シ。よのあけひのくるをいふ。つきひのゆくをいふ。蜻蛉下（ことさわがしくてあけくるるもひとめいかにとおもふひごろあるまでおとなし～）

あけくれ ナ。日暮。あさゆふゝおなト。空穂俊陸（ただあけくれいかで鳥の聲もせざらん山ゝこもりてしがな）

あけぐれ ナ。よあけのたはしをぐらくなるときをいふ。源野分（さやかならぬあけぐれのほど色々なる姿を）

あけごろも ナ。緋袍。あかきいろのかりぎぬ。頼政集（あけごろも色を添にし紫の今一しほやまして嬉しき）

あけさる ワ。ヒト。四。よのあけてくるをいふ。万三（ゆふされはたはをみたしめあけされはたはをひしむ）

あげじとみ ナ。揚戸。たとみ。あげおろしするたとみ。

あげた ナ。高田。たなり。みづなきたをいふ。古事記（其いろせあげたを作らは汝が命たくは田を作り給へ）

あげだい ナ。揚代。うかれめをよぶときのみのしろ。

あけたつ ワ。イヒ。四。よのあけわたるをいふ。古今恋（あけたてはこの打たへ鳴鼓し夜を盛のもえこそ渡れ）

あけたて ナ。開閉。あるひたあけあるひたたつるをいふ。

あけつげどり ナ。明告鳥。とりなり。あけがたをつぐるとり。にはとりゝおなト。夫木廿（すもりこのかへらぬそらもありなましあけつげどりのこゑなかりせは）

あげつちもん ナ。上土門。やねゝつちをあげたるもん。

あげつらひ ナ。論。ことのすぢをいひとくをいふ。またいさかひゝおなト。今昔廿（此あげつらひ由なき事なり）

あげつらふ ワ。イヒ。四。論。ことのすぢをいひとくをいふ。櫻園紀（貴賤をあげつらふことなく）

あげど ナ。揚戸。となり。あげおろしするとをいふ。

あげどうふ ナ。とうふなり。あぶらあげのとうふ。

あげに ナ。ひつのたぐひ。たびのにもつをいるるもの。

あけのころも ワ。イヒ。四。明暁。よのいまだあけそめぬをいふ。風雅雜（あけのころほしのかずそきえゆく）

あげのり ナ。価。あげやらひゝおなト。紅名

あげば ナ。揚場。ふねのものをとりあぐるところ。

あけはなる ワ。ヒト。シ。よのあけなるをいふ。源宿木（あけたなるるまゝゝ霧のたち籠たる空おかしきゝ）

あけばん ナ。とのゐのつぎのひのやすみをいふ。

あけばり ナ。幄。まくなり。かりやをつくるゝもちふるものゝたてうへをおほひよるをめぐらすべきひとつのまく。空穂俊陸（御前ゝすなごまかせせんざいうゑさせあげばりあたらしくうちて）和名（幄字をよめり）

あけび ナ。茵子。くさのみのな。つるくさなり。はをいびつゝたていつつのたひところゝいづ。なつのたじめ。三ひらのうすひらさきなるたなあるたまろきたなさき。のちゝみをむすぶ。おほきさ二すんはかりみのかたちうりゝにてかをこそし。和名

あけびかづら ナ。茵子。くさのみのな。あけびゝおなト。本和

あけぼの ナ。曙。よのほのかまあけたるころ。源 帚木（かげさやかまみえてなかなかおかしきあけぼのなり）

あけぼのくさ ナ。曙草。きのな。さくらまおなじ。藻玉集

あけぼのぞめ ナ。曙染。くまどりてそめたるそめもの。

あげまき ナ。総角。わらをすがたなり。ふりわけがみをあげてひたりみぎまむすびたるをいふ。またわらをまおなじ。またさいはらのふしのな。催馬樂（あげまきやとうとうひろはかりやとうとうさかりてぬたれぞも）源蓬（あげまきのころさへぞ）和名（総角をよめり）

あげまきむすび ナ。ひものむすびかたなり。ふたところまわないだしてそのなかをいしたるみまむすぶをいふ。雅藝（まろをなをつけて總あり。あげまきまは結びて）

あげまさり ナ。わらをのふりわけがみをあげたるすがたのふりわけがみのときよりもまさりざままみゆるをいふ。狭衣一（一の宮御あげまさりのゆゆしさを）

あげもちふ ワ。イ。カ。登用。ひとをあげてつかさまもちふるをいふ。ひとをとりたつるをいふ。持統紀

あげや ナ。揚屋。うかれめをよびあげてあそぶいへ。

あけゆく ワ。ヒ。ヰ。明行。よのやうやうまあけてゆくをいふ。源 若紫（あけゆくそらをいたうかすみて）

あげわたす ワ。イ。ヰ。すだれなどをみわたしのかぎりあるをいふ。狭衣一（えじとみあげわたして）

あけわたる ワ。ヒ。ヰ。明渡。あけゆくまおなじ。新拾（あけ渡る空まきられて久方の岩戸の開を非や越らん）

あげを ナ。綾。おいかけまおなじ。今昔（冠のあげをの長かりけれは世の人あげをの主となん付たりける）

あこ ナ。下火。くわさうまたうるときひをつくるひと。

あご ナ。網子。あみをひきてすなどりするひと。万三（大宮の内まで聞ゆあびきすとあご整ふる蜑のよび聲）

あご ナ。吾兒。わがこ。またひとをまたしみてよぶことは。万九十（大船ままかぢまじぬき此あごを唐國へやる祝へ神等）源 帚木（さりともあごたわが子まてあれよ）

あご ナ。顎。くちのうへまたをいふ。あぎまおなじ。

あこえ ナ。鼠。にたとりのつめ。けづめまおなじ。和名

あこがらす ワ。イ。ヰ。烏。あくがらすまおなじ。源 若菜（身をさしもあらぬさままあこがらしたまふ）

あこがる ワ。ヒ。ヰ。憧。あくがるまおなじ。太平六（宮もまた南山のみちあきくもまふみまよはせたまひてあこがれたる御すまひときこゆれど）

あこぎ ナ。ひとつことをかさねがさねまするをいふ。もとあこぎのうらといふところまてかさねがさねまあみをひきしことありしよりいひあらへり。あこぎのあびきのことも六帖（あふことをあこぎのたままひくたひのたびかさねはひとも志りあん）

あこだ ナ。南瓜。うりのな。ぼうぶらまおなじ。御湯殿記（新大すけ殿よりあこだまおこる。たつおりめでたし）

あこめ ナ。袙。ころもあり。あこめぎぬまおなじ。源 総角（わらは六人あかいろまさくらがさねのかざみ。あこめを〜れなるわまふちがさねのおりものあり）

あこめぎぬ ナ。袙。ころもあり。をんなのきるころも。まるめのわらをのきるころも。和名（袙字をよめり）

あこめのはな ナ。瀬。くさのな。すすきまおなじ。春雨抄

あこや ナ。あこやだままおなじ。山家集（あこやとるいがひの殻を秘おきて寶のあとをみするなりけり）

あこやがひ ナ。珠母。かひのな。おほきさ一二すんより四五すんはかり。からのおもて。あらあらしくてかきのごとく。からのへりを。かみのごとくうすしとそ。

あこやだま ナ。たまなり。あこやがひのなかよりいづるひとつのまんじゆをいふ。六帖三（いせの海あまの志わざのあこやだまとりてのちまこひの志けん）

あこやのたま ナ。たまなり。あこやだままおなじ。字拾

あさ ナ。淺。かさなりのすくなきなり。みづのすくなきをいふ。いろのすくなきをいふ。へだたりのすくなきをいふ。あさひのすくなきをいふ。万十（秋されはおく白つ

ゆゑ我門のあさぢがうら葉色づきゐけり）夫木八（古川の岸の波りのあさ草ゐつはな波よる夏の夕風）

あさ ナ。朝。よあけてほどもなきあひだ。万八（あさ戸明て物おもふ時ゐ白露のおける秋萩みえつつもとな）

あさ ナ。麻。くさのな。たかさ六七ちやくばかり。くきをけ〻たゐてすぐく。はをかへでのをゐにてながし。つねゐかゝちハもぎていとゐより。そのみもくすりゐもちひ。本草

たくひものゐもちふ。万九（ながきつのあさを引ほし）

あさ ナ。麻布。おりもの。あさぬのゐおなじ。夫和下（猶雪のふるやが下ゐ獨寢のうつぶし染の麻のけさなり）

あさ ナ。麻。をたへゐいでくるあかくくろめるほし。和名

あさあけ ナ。よあけてほどもなきあひだ。續古巻（あさ〻あけの殿の衣ほしそめて巻立なるるあまのかぐ山）

あさあけ ナ。淺緋。そめいろ。うすきあかいろ。順集（深緑松ゐもあらぬあさあけの衣さへゐぞ志ぐみそめけん）

あさあさ ナ。淺黄。つけものなり。あさづけゐおなじ。御湯殿記（ながもしよりあさあさまゐる）

あさあざ ソ。鮮。あざやかゐおなじ。源御法（句ひ多くあさあざとおもせし盛りをなかなか此世の花の蕚りゐ）

あさあね ナ。淺藍。そめいろなり。うすきあゐいろ。縫殿式

あさい ナ。朝雜。あさひのさしのぼるまでもねたるをい〻ふ。よあけてなほおきいでぬをいふ。万十（時鳥けさのあさけゐ鳴つるを君きけんかあさいかぬらん）

あさいと ナ。麻糸。いとなり。あさのかををたぎてうみたるいとをいふ。順集（たなばたゐ今朝をかしつるあさいとをよるをまつるとひとも志らずや）

あさいひ ナ。朝飯。あさくふいひ。あさのくひもの。

あさうつ ナ。通草。くさのな。あけびゐおなじ。以学

あさうり ナ。白瓜。うりなり。志ろうりゐおなじ。

あさおき ナ。朝起。あさとくおくるをいふ。

あさかげ ナ。あさひのかげ。あさひのまたさきぬあひだ。また あさひゐうつるひとかげ。万十二（あさかげゐわが身

をなりぬかぎろひのほのかゐみえて出し兒ゆゑゐ）

あさがすみ ナ。朝霞。かすみなり。あさたつかすみ。万七（朝霧やまず棚びく立田山船出せんヨを我戀んかも）

あさかぜ ナ。朝風。かぜなり。あさのほどゐふくかぜ。万集

あさかぜ ナ。風。たか。はやふさゐおあり。四園寺鹽百首（烈くも落くる物か冬山の雪ゐ堪らぬ峰のあさかぜ）

あさがたち ナ。朝容。あさおきいでたるすがた。頼政集（暮ぬとて人ぬる野べの女郎花今さた花の朝形みん）

あさかは ナ。朝川。かたなり。あさのほどわたるかた。万二（人事を繁み言痛みおのも世ゐ未渡ら思朝川渡る）

あさかへ〜 ワ。イ。ロ。わざなをはしはかへしてするをいふ。古德傳（文をあざがへし。義をわきまへて）

あさがほ ナ。朝顔。ひとのかほなり。あさおきいでたるときのかほをいふ。源夕顔（さくをあるゐうつるてふ名をつつめさもならですぎうきけさのあさがほ）

あさがほ ナ。牽牛子。くさのな。つるくさなり。をゐ三つのとがりあり。また五つのとがりあるもあり。あさのほどゐさきてひのひかりゐあへはさはむ。本和

あさがほ ナ。桔梗。くさのな。ありのひふきゐおあり。字鏡

あさがみ ナ。朝髪。あさおきいでたるときのぬくたれがみをいふ。万四（あさがみのおもひみだれてかくはかりなねがこふれぞゆめゐみえける）

あさがみしも ナ。麻上下。ころもなり。あさぬのをもてつくれるかたぎぬとたんばかまとをいふ。武德編年集成

あさがら ナ。麻殼。あさのくき。かををぎたるくき。

あさがり ナ。朝獵。かりなり。あさのあひだゐするかりをいふ。万二（あさがりゐいまたたすらし）

あさがれひ ナ。朝餉。あさのかれひなり。あさのくひものをいふ。またみかどゐたてまつるあさのごと。源桐壺（あさがれひのけしきはかりふれさせたまひて）

あさぎ ナ。淺黄。そめいろなり。あさぎいろ。

あさぎ ナ。淡縹。そめいろなり。あさぎあゐいろ。

あさき ナ。麻木。きあり。あしききをいふ。實治百首（とりかはるあさきのいろぎふし　さげみさもわれにくくひ　とのいふかな）千載 總（あづまやの　あさぎの　たしらわれおがらいつふしおれてこひしかるらん）

あさきた ナ。朝北風。かぜあり。あさふきたかぜ。土佐（あさきたのいでとぬさきまつあでたやひけといふ）

あさきぬ ナ。麻衣。あさごろもまおなじ。備馬樂（あさぎぬも云々たもとよく若よく云々ぬひきせめかも）

あさきよめ ナ。朝淨。あさするきよめをいふ。あさするさうぢあどあり。拾遺雜（とのもりのとものみやつこころあらはこのたるはかりあさきよめすあ）

あさきり ナ。朝霧。きりあり。あさたつきり。万十（朝霧の棚引小野の萩の花いまやちるらんいまだあかなくま）

あさくさ ナ。淺草。あさくたえたるくさたち。夫木（古川の岸のあたりのあさくさまつはな涙よる夏の夕風）

あさくさのり ナ。紫菜。のりなり。あさのりまおなじ。

あさくさまぬ ナ。猫。けたもののな。ねこまおなじ。吳竹集（さよふけてあさくさまぬまあひぬるかみくひさもそのうらぶれてあく）

あさくちなし ナ。淺支子。あさきくちなしいろ。雜殿式

あさぐつ ナ。淺沓。くつあり。そこのあさきぐつ。また若やうそくのときまたくひとつのくつ。師抄

あさくままぬ ナ。猫。けたもののな。あさくさまぬまおなじ。秘藏抄（さよふけてあさくままぬまあひぬるかみえひきくまのうらぶれてあく）

あさぐも ナ。朝雲。くもあり。あさたつくも。万二（あさぐもまたづたみだれゆふぎりまかたづたさわぐ）

あさぐもり ナ。朝曇。くもりあり。あさのくもり。万三（あさぐもり日のいりゆけは）保元女集（うぐひすハをしめとやあくあさぐもりちりゆくゆきのたちのおごりま）

あさくら ナ。朝倉。かぐらうたのふしのな。神樂譜

あさくらざんせう ナ。朝倉山椒。あるたじかみまおなじ。

あさけ ナ。よあけてほどもあきあひだ。万八（此ごろのあさけまきけは足引の山をとよもしさをしかのあく）

あさけ ナ。朝食。あさのくひもの。八雲三（飯。かれいひ。あさげあどいふ）新千 非（うちあびきさとこそかすめをちこちのあさげのけぶりたるやたつらん）

あさけ〜むらさき ナ。淺滅紫。そめいろあり。ひとつのむらさきまてあさくつやをとりたるものをいふ。雜殿式

あさけぶり ナ。朝煙。けぶりあり。あさたつけぶり。あさげあどのけぶり。夫木十（やまふかみたくすみがまのあさけぶりこころぼそくもみえわたるかな）

あざけり ナ。嘲。わらひそしるをいふ。またたくみまそしるをいふ。散木止（こよひのとまずがたりをまてあすのあざけりをはかへりみざらんかな）

あざける ワ。毛。四。嘲。わらひそしるをいふ。またたくみまそしるをいふ。唐物語（いまはじめてひとのわらひあざけるぞきまあらす）字鏡 嘲字をよめり

あざける ワ。ヒ。四。おもひをやるをいふ。こころをたらすをいふ。後拾 序（つきまあざけりかぜまうそむく）

あざこぎ ナ。あさふねをこぐをいふ。万十（あさぢこまきけはもるけしいみづ川あさこぎ若つつうたふ舟人）

あざこち ナ。朝東風。かぜあり。あさゆくこち。万十（春日野の萩し散あはあざこちの風まそ類ひて此まそ散こぬ）

あざこほり ナ。朝氷。こほりあり。あさのこほり。夫木七（川わたまそ各つくるふし若はを一つまくさる 朝氷哉）

あざころも ナ。麻衣。ころも。あさぬのをもてぬへるころも。万二（白妙の麻衣きてをまやすのみかどの原まそ）

あざさ ナ。荇菜。くさのな。みづぐさ。ありはもくきもぬな。たのごとくまて。おつのころ。みづのうへまうかびきいろある五ひらのたなさく。六帖六（みるからまそ思ひ增田の池まねふるあざさのうきて世をはへよとや）

あざさ ナ。朝座。あさのあひだのまとゐ。またたちかうあ。このときのあさのむしろ。源蜻蛉（五日をいふ朝座まそ）

あさざむ　ソ。朝霧。あさのほどのさむくあるをいふ。源野分（今朝のあさざむある打とけわざまや物たち、あざするねびたち。御前まあまたきてほそびつゆく物まゝ）

あざさる　ラ。ヒ。ル。朝至。あさのくるをいふ。万十（あさされはいもが手ままく観あすみつのたまびま）

あさし　サ。ヒ。淺。かさゐりのすくあきをいふ。みづのすくあきをいふ。いろのすくあきをいふ。へたりのすくあきをいふ。あたひのすくあきをいふ。古今戀（山の非のあさき心も思ふまかげはかりのみ人のみゆらん）

あさしほ　ナ。朝潮。あさのみちしほ。万十二（堀江よりあさしほみちまよるこづみ貝まゐ有せはつとませましを）

あさじみ　ナ。あさつちのきみてこほるをいふ。關東紀行（かの山ゆきふり道あしかるべし。あさじみのほどまたたはよかりあんといふをとへは道の氷りたるを）

あさじめり　ナ。朝濕。あさぎりあさづゆあさのきめり。新古秋（薄紫の藤の花の朝濕り秋も夕と誰かいひけん）

あさじも　ナ。朝霜。きもあり。あさおくきも。夫木十（栗津野のとたちの源ふみきたき朝霜わけていづる狩人）

あさすずみ　ナ。朝涼。あさのすずみ。まさあさのすずしき。あひだ。源木椎（あさすずみの程まいでたまひければ）

あさすはう　ナ。淺蘇枋。そめいろあり。あさきすたう。縫殿式

あさせ　ナ。淺瀬。せあり。かたあどのあさきせ。古今秋（天川あさせ白浪たどりつつ渡り果ねは明そきにける）

あさだち　ナ。朝發。あさとくいでたつをいふ。万葉

あさだち　ナ。賊。うをのあ。かたうをあり。くちおはきく。うろこまやかまてまだらあるあやあり。和名

あさだち　ナ。淺茅。くさあり。あさくたえたるちまさざやかあるくさのあさくたえたるところ。万十（秋されはおく白露まわが門のあさだちがうら葉色づきまけり）

あさだちがはら　ナ。淺茅原。あさだちたらまおあト。

あさだちのなは　ナ。茅繩。ちがやをもてひたりよりまあへるあたあり。たらへのときまもちふるもの。夫木九（お

もふ事あさだちのあたまときつけてきよき川瀬まあつどらへきつ）また（みそぎするけふのあさだちのひだりあたあらぶるかみもこころとくらし）

あさだちはら　ナ。淺茅原。あさだちのたらをいふ。順宗紀

あさだふ　ナ。淺茅生。ちのあさくたえたるところ。

あさつき　ナ。島葱。くさのあ。ひるのたぐひあり。はいろまにてみじかく。ひとつのねよりおほくのはいづ。和名

あさづくひ　ナ。朝日。あさのひ。あさひまおあト。

あさづくよ　ナ。朝月夜。ありあけづきののこれるあけがたをいふ。万九（あさづくよあけまくをしみ）

あさづけ　ナ。淡漬。つけもの。あぢそひあさきつけもの。

あさづまぶね　ナ。朝妻船。あふみのくにのあさづまといふところのわたしぶねをいふ。山家下（おぼつかないふきおろしのかざさきまあひやまぬらん）

あさづゆ　ナ。朝露。つゆなり。あさのつゆ。万十（あさづゆまにほへる花をみる毎まに思ひもやまず想しきけしも）

あさて　ナ。明後日。あすのつぎのひ。

あすて　ソ。明後日。あすのつぎのひ。源屋東（あすあさてとおもへは心あわたたし）字拾（あさてとて俄まに）

あさで　ナ。淺痛。あさくおひたるきず。いささかなるきず。

あさでこぶすま　ナ。ふすま。なり。あさぬのをもてつくれるふすま。万四十（にたまたつあさでこぶすまこよひだにつまよしこせねあさでこぶすま）

あさど　ナ。朝戸。となり。あさおきてあくるかどのと。万八（あさどあけてものおもふときまさらつゆの）

あさどこ　ナ。朝床。ねどこなり。あさのねどこ。万九十（あさどこまきけは遠けし射水川朝こぎまつつ歌ふ丹人）

あさとで　ナ。朝戸出。あさたやくかどをいづるをいふ。万十（あさとでのきみがよそひをよくみすは）

あさな　ナ。朝菜。なり。あさつみたるな。万四十（此川まあさな洗ふ兒汝も我もよちをそ持るいでこたはりま）

あさな　ナ。字。おとのなのほかまつねまよぶなをい

ゆ。類異記下（文忘寸云々あさなを上田三郎といふ）

あさなあさな ソ。毎朝。あさあさ ま。あさごと ま。のこころ。古今 非（のべちかくいつゐしをれはうぐひすのなくなるこゑたあさなあさなきく）

あさなぎ ナ。朝和。あさなみかぜのなぐをいふ。万四（あさなぎまかこの壁よび。ゆふなぎまかぢのとをつつ）

あさなけ ソ。毎朝。あさなあさなまおなじ。古今。（あさなけまみべき君とし頼ねは思ひたちぬる草枕なり）

あさなさな ソ。毎朝。あさなあさなまおなじ。万十（まそ鏡手ま取持てあさなさなみれども君をあく非もなし）

あさなはる ソ。ヒト。四。紐。もののすぢのひとつまよりてまじりあふをいふ。類名（撰字をよめり）

あさなふ ワ。ヒト。四。紐。あざなるまおなし。塵添壒嚢抄

あさなゆふな ソ。朝夕。あさゆふまおなし。万十（いせの海の朝な夕なまかづくとふ蛤の貝の片思ひまして）

あさにけに ソ。毎朝。あさごとまといふごとし。万三（青山の峰の白雲あさにけま常まみれども珍らしわぎみ）

あさには ナ。朝庭。にたあり。あさのにた。万七（あまざかる ひなをさめまと云々あさにたまいでたちあらし）

あさぬの ナ。麻布。あさいとをもておれるぬの。和名

あさね ナ。朝寝。あさいまおなし。夫木十（あけやらぬねやの隙のみ待れつつ老ぬる身まあさねせられず）

あさねがみ ナ。朝寝髪。あさおきいでたるときのねくたれがみ。万十（あさねがみわれをけづらしうつくしきひとのたまくらふれてしものを）

あさのたちえ ナ。あさのくきなり。たらひのときまもちふるもの。五社百首（みそぎするあさのたちえのあなにぎてさはへの神もなびけとそおもふ）

あさのつとめ ナ。朝勤。ほうしのするあさのどきやう。

あさのま ナ。朝間。あさのあひだ。あさのほど。

あさのみ ナ。麻苧。あさといふくさのみ。本和

あさのをぬさ ナ。麻帛。あさをもてつくれるぬさなり。た

らひのときまもちふるもの。夫木三（たまのをやみじかからましみそぎするあさのをぬさま新かけずは）

あさはか ソ。淺。ものごとのあさきをいふ。源空蟬（あさはかまもあらぬ御けさきを）同若菜（うちつけまあさはかなりと御らんぜられぬべきついでなれは）

あさはた ナ。麻機。たたなり。あさぬのをおるたた。新六五（あさはたまおるてふぬのぬきをあらみよそのあらしもえやたふせがん）

あさばどり ナ。杜鵑。とりのなほとときすまおなし。篠目抄

あさはなだ ナ。淺縹。そめいろなり。あさきはなだ。継殿式

あさはん ナ。朝飯。あさのくひもの。あさげまおなし。

あさはる ワ。ヒト。四。紐。あざなるまおなし。機関紀（あさはるつらたたきあざもり）字鏡集（紐字をよめり）

あさひ ナ。朝日。ひなり。あさのひ。古事記

あさひかげ ナ。朝日影。あさひのかげ。万四（あさひかげ匂へる山まてるつきのあかさる君を山ごしまおきて）

あさひこ ナ。朝彦。あさひまおなし。神楽歌（いづこまか駒をつながん あさひこがさすや岡べの玉笹の上ま）

あさひのみや ナ。朝日宮。いせのないぐう。玉葉（神風の朝日の宮の宮移し影のどかなる代まぞありける）

あさびらき ナ。朝發。あさふねをいだすをいふ。万三（あさびらきこぎにしふねのあとなきがごと）

あさふ ワ。ヒト。三。淺。もののあさきかまあるをいふ。源竹川（あだくらのなどもあさくたるほどをおぼすま）

あさぶ ワ。イヒ。ヒト。四。淺。もののあさくなるをいふ。またものをおもひかろむるをいふ。万六（まさらくも往て見てしが神なびの淵もあさびて瀬まかなるらん）

あざふ ワ。イヒ。シ。紐。ものをくみまじふるをいふ。神代紀（くさぐさの物を悉く百取の机まそあへあざへて）發心集（手をあざへ目をとぢいきをととのへ）

あざぶすま ナ。麻被。ふすまなり。あさぬのをもてつくれ

るふすま。万五（あさぶすま ひき かかぶり）

あさぼらけ ナ。よのほのかまあけたるころ。古今（あさぼらけ 有明の月とみる迄は吉野の里はふれる白雪）

あさまし サ。フ。浅。ものごとのあさむかなるをいふ。万四十（われをたのめてあさましものを）

あざまし サ。フ。ものごとのおもひのほかまておどろきぬべくあるをいふ。拾遺（さをしかのつめたはひたぬ山川のあざましき迄ぬるる袖かな）源帚木（御ふみをもてきたれは女房あざましきまなみたもいで來ぬ）

あさまたき ソ。あさのたやきをいふ。拾遺。（あさまたきあらしの山の雪けれはもみぢの錦きぬひとそなき）

あさまつりごと ナ。朝政。まつりごとなり。あさのまつりごとをいふ。むかしたよのほのぼのとあけたるほどはみかど紫宸殿はいでたまひて。たみのうれへぶみどもをみそなはしてまつりごとをせさせたまひしなり。源桐壺（あくるもまらでとおもほしいづるはもなほあさまつ）

りごとをおこたらせたまひぬべかめり）

あさみ ナ。淺處。あさきところ。伊勢（あさみこそ袖はひづらめなみたがたみさへながるときかはたのまん）

あざみ ナ。蘭。くさのな。たのかたちくれなゐにてきざみふかく。くきたともはもりありたなはもりをあつめてつくれるまりのごとくまてむらさきなり。またまれはまろきもの。きいろなるものあり。和名

あさみぐさ ナ。松。きのな。まつはおなじ。藏玉集（夜はは餘る月をや山のあさみぐさすごきをのこすあきの曙）

あさみどり ナ。淺綠。そめいろ。みどりのあさきいろ。繼殿式

あさむ ソ。イセ。四。淺。あさしとみるをいふ。おもひかろむるなり。徒然草（みるひとあざけりあさみて）

あざむ ソ。ヒト。四。おもひのほかなることはあひておどろくをいふ。水鏡下（手をうちてあざむこと限なし）

あざみあふ おもひのほかなることはあひておどろきあふをいふ。宇拾一（みよ誠なりけりとあざみあひ

たり）平家三十（東國北國のそむくたはあるは西國さへこそいかはとて手をうちてあざみあへれける）

あざみさわぐ おもひのほかなることはあひておどろきさわぐをいふ。宇拾八（さてとびゆくほどはひとびとみののしりあざみさわぎあひたり）

あざみののしる おもひのほかなることはあひておどろきののしるをいふ。撰集抄（そのさとのものどもめもめづらしはおぼえてあざみののしる）

あざみほむ おもひのほかなることはあひておどろきほむるをいふ。宇拾二（あざみほめけり）

あざむき ナ。欺。いつたり。またそしりはおなじ。

あざむく ワ。イセ。四。欺。いつたりていざなふをいふ。またそしるをいふ。万五（ぬさおきてわれをこひのむあざむかすたたまるゆきてあまぢをらしめ）砂石集下（神明もいかでか明し給ふべきとてをこづきあざむきけり）發心集（法師をみれどもたふとむ人なしをしへすむるひとあれはかへりてこれをあざむく）

あざむきいづ あざむきをするをいふ。古今雜（たれかたあきのくる方はあざむきいでてみかきよりとのへもる身のみかきもりをさをさしくもおもほえず）

あざむきおもふ たのみなくおもふをいふ。ほいなくおもふをいふ。水鏡上（ひとへはあらぬ世はなるはやなどあざむきおもふべからず）

あざむらさき ナ。淺紫。むらさきのあさきいろ。繼殿式

あざめ〜 ナ。朝飯。あさのくひもの。あさげはおなじ。

あざめよく ソ。あさおきいでたるときのめのよきをいふ。そのあさのめのよくといふころなり。古事記（あざめよく汝とりもちて天神の御子はたてまつれ）

あざやか ソ。鮮。あきらかはきよやかなるをいふ。またあたらしくうるはしきをいふ。空穗あて宮（少將云々よそほひあざやかさて）雄略紀（鮮麗をよめり）

あざやぐ ワ。ヒト。四。もののきよやかなるをいふ。また

うるはしきをいふ。源手習（ひとゝのいとなさけなくあ〻さやきたるさ）同少女（少しなをしうあざやきたる）

あさゆふ　ナ。朝夕。あさとゆふとをいふ。

あさら　ナ。芹。くさのな。せりさおなゝ。能因歌枕

あさら　ナ。桃染。そめいろ。あらそめさおなゝ。万葉

あさらか　ソ。淺。あさきをいふ。あさたかさおなゝ。万十二（あらそめのあさらの衣あさらかさおもひて妹さ）

あさらか　ソ。鮮。もののあたらしきをいふ。またあざやかさおなゝ。土佐（或人あざらかなるものもてきたる）

あさらけ〜　サ。ヒ。鮮。あざらかさみゆるをいふ。仁德紀

あさら〜　ナ。水豹。けだものの〻な。うみさすむけだものなり。かたちをおつとせいさにてけあらく。ところとく〻ろとのまだらなるふありて。ひかりつややかなり。新儀式（あざらしの皮の腹巻）和名（水豹をよめり）

あさり　ナ。蛤仔。かひのな。かたちまさぐりさにて。からふく〻またからのおもてさほそやかなるたてをもちあり。

あさり　ナ。漁。いざり。またすなどりさおなゝ。万五（あさりするあまのこどもとひとをいへど）

あざり　ナ。阿闍利。だいとこ。またのりのしさおなゝ。源夕霧（あざりひとりとどまりてなほだらによみたまふ）

あざる　ワ。ヒト。色。四。求食。漁。くひものをもとめありくをいふ。またすなどりをするをいふ。またもとむさおなゝ。源須磨（いせ島やさほびのかたさあさりてもいふかひなきをわが身なりけり）空穗の院（のゝ毎さあさらせ給ひて）榮花浦々の別（あざれあざれとせんじ類なり）

あざりありく　くひものをもとめてありくをいふ。蜻蛉中（たなちうまごものあざりありくも）

あざりとる　あさりてとるをいふ。空穗忠乞（かしこさたゞるものの聊なるてうどなどみなあさりとりてさかりにしかば）源夕霧（せめてもあざりとらで）

あざりはむ　鋤。あさりてたむをいふ。字鏡

あざりもとむ　たづねありきてもとむるをいふ。唐物語（きき つけてあながちさあざりもとめけり）

あざる　ワ。ヒト。四。彷徨。やすらふ。またたちもとほるさおなゝ。万五（たちあざりわれこひのめど）

あざる　ワ。ヒト。シ二。鰒。うをなどのくさるをいふ。仁德紀

あざる　ワ。ヒト。シ二。戯。たはぶるさおなゝ。狹衣一（中中なる水いひ出て上もあざれたりとぞおぼされん）

あざれあふ　たがひさたはぶれあふをいふ。土佐（さほう〜みのほとりさてあざれあへり）

あざれありく　たはぶれをさありくをいふ。源夕顔（おもひよらぬさまさたゆまずあざれありけば）

あざれかかる　たはぶれよるをいふ。源帚木（手なのこい給ひそとゝいたくあざれかかれば）

あざれがま〜　サ。フ。とものすれはたはぶれんとするさまさみゆるをいふ。紫式部日記（何かあざれがましと）

あざれはむ　ワ。ヒト。四。たはぶれたるさまさみゆるをいふ。源橋姫（なほざりごとをうちいであざれはむも）

あざわらふ　ワ。ヒト。四。嘲笑。そしりわらふをいふ。あなどりわらふをいふ。古事記（こそあざわらふそ）源手習（われがしこさあざわらひてかたるを尼ぎみなども）

あ〜　ナ。足。たぎのまたのところ。またものをささへうくるたしらをいふ。またものの〻またのところ。古事記

あ〜　ナ。菜。くさのな。いりえなどさたゆ。たかさ一つ〻ゑをすぐるもあり。はたたけのごとくさてながし。あきのころ。くきのすゑさほをいだす。すすきさにておほきやかなり。万五十（たづかなきあしべをさしてとび渡るあなたづたづし獨りさぬれば）和名（葭字。菜字を訓り）

あ〜　ナ。錢。ぜにさおなゝ。徒然草（おほくのあしをたまひて數日さいとなみいだしてかけたり）

あ〜　サ。フ。惡。さだまりののりさかなたぬをいふ。もの〻ただしくなきをいふ。履中紀（あし解除。よし解除をおほせ）續世紀五（あし宰相とぞ人を申し侍り〜）

あしあと ナ。足印。あるきたるあとまつけるあしのかた。
あしあらひ ナ。蹈洗。ころもなどをあしをもてふみつつあらふをいふ。拾玉四（まづのめも大路あづつまゆふすみふるかたびらのあしあらひまて）
あしうたす ウ、イヒ。シ三。按摩。あしをうたするをいふ。
あしをさすちするをいふ。榮花みはて（これをめして御あしなどうたせたまひけるほどま）
あしうら ナ。足占。あうらまおなじ。夫木六（月夜よみ門またち出あしうらまてゆく時さへや妹まあをざらん）
あしうら ナ。蹠。あしのうらなり。あなうらまおなじ。
あしおと ナ。蹤然。あるくときのあしのひびき。
あしか ナ。海獺。けだものの名。うみまずむけだものなり。かたちかなそまにてこえたり。くちをすこしとがりていろをあをどろく。けをやたらかまてみじかし。夫木三（わがこひをあしかをねらふえぞ舟のよりみよらずみなみまなそまつ）和名（茶鹿をよめり）
あしがき ナ。蘆籬。かきなり。あしといふくさをもてゆへるかき。能因歌（あしがきまがきかきわけて）
あしかし ナ。械。つみびとのあしをとづるだうぐ。和名
あしかせ ナ。械。あしかしまおなじ。
あしかた ナ。足印。あしのかたなり。あるきたるあとまつきたるかた。續世繼六（犬のあしかた八つ九つあり）
あしかなへ ナ。鼎。かなへなり。あしの三つあるかなへ。和名
あしがに ナ。蘆蟹。かになり。あしのおひたるたまへますめるかに。万十（おしてるやなにその小江まいほつくりかたまりてなるあしがにをおほきみめすと）
あしかび ナ。菜牙。あしといふくさのめだち。古事記（あしかびのごともえあがるものまよりて）
あしがも ナ。蘆鴨。かもなり。あしのおひたるところますめるかも。万十（あしがものすだく池水たふれども）
あしからみ ナ。螺魚。むしのたまごなり。おほちふぐりまおなじ。字鏡（螺蜷をよめり）

あしからめ ナ。螺蜷。むしのたまごなり。おほちふぐりまおなじ。字鏡（螺蜷をよめり）
あしからなぶね ナ。ふねなり。ふなあしのかろきふねをいふとぞ。またあしがらやまといふやまのきをもてつくれるふねなりともいふ。万四十（ももつしまあしがらなぶねあろきおほみめこそかるらめ心はもへど）
あしがる ナ。足輕。あしのかろきひと。またみのほどのかろきいくさびと。盛衰三十（あしがるどもみだれいりてさがしたてまつれと下知す）
あしきかみ ナ。邪神。かみなり。ひとをそこなふかみ。神代紀（ちをやぶるあしきかみどもあり）
あしきて ナ。惡作。てのつたなきをいふ。枕草三（にげなきもの。あしきてをあかきかみまかきたる）
あしきぬ ナ。絁。きぬなり。ふときいとをもておれるきぬ。和名
あしきみち ナ。惡道。ほとけまなりがたきみち。源帯木（かへりてあしきみちまたよびぬべくそおぼゆる）
あしきもの ナ。鬼。かみなり。ひとをそこなふかみ。和名
あしきやまひ ナ。惡疾。やまひ。よのつねならぬやまひ。和名
あしきらひもの ナ。あしのつめをいふ。たらへまいふことば。神代紀（あなすゑのあしきらひもの）
あしくさ ナ。蓼實。くさのな。めどまおなじ。康水
あしくせ ナ。足癖。くせなり。あしまつきたるくせ。
あしくび ナ。足首。あしのすゑのところ。
あしげ ナ。葵雖。うまのけいろなり。ほろきけまくろきさしげあるうまをいふ。和名（葵雖をよめり）
あしげぶち ナ。葵雖。うまなり。あしげまおなじ。
あしと カ。彼所。をなれたるところをゆびさしていふとぞ。きのことば。空穗國讓（あしこまもちわたりなんとするをひとのいむといふ）枕草九（あしこまでもゆきつかざらめところゆくこそこそすれ）辨内侍日記（あしこここひとをたたせんとて）

あしともと　カ。あしこのところ。またあしこまおなじ。源宿木（あしこもとまなどそのかしきゆ）

あしざま　ナ。あしくあるをいふ。よからぬさまなり。源総角（宮の御方なるもさりとあしざままきこえじ）

あしたろ　ナ。麻桂。もしごのたぐひ。あなひまおなじ。

あしずり　ナ。蹴。あしをふみするをいふ。ものまくいてもたふるときまするわざなり。万九（たちもしりさけびあしずりこいまろびあしずりまつつ）空穂宮（あてみやまふみたてまつりてあしずりをしてなく）

あしする　ワ。ヒ。四。蹴蹋。あしずりをするをいふ。字鏡

あしぞろへ　ナ。いくさびとなどの。あしなみをととのふるをいふ。四季物語（ついたちを競馬のあしぞろへ）

あした　ナ。朝。よあけてのちほどなきあひだ。万十（魂を朝夕またまふれどあがむねいたし恋の慰めまけきまの。榮花（ものふしで）（とのを小袴きてあしたかせたまひてつ系をつきて）和名（履字をよめり）

あしたかぐも　ナ。蟷螂。むしのな。ひとつのくもなり。みのかたちまめまにてあしをいとすぢのごとし。以字

あしたかのくも　ナ。蟷螂。あしたかぐもまおなじ。和名

あしたづ　ナ。蘆鶴。たづなり。あしのおひたるたまへますめるたづ。万十（あしたづのさわぐいりえのあらりげのまられんためとこちたかるかも）

あしたづくり　ナ。履工。あしたをつくるをなりたひとするひと。七一職人歌合（あしたづくり）

あしたどころ　ナ。朝所。さんぎなどいふつかさびとのなるたいおやうくわんのうちのひとつのところ。

あしたま　ナ。足玉。たまなり。あしまきつけたるたま。万十（あしたまもただまもゆらにおるたを）

あしたまり　ナ。あしをふみとどむるところ。

あしたゆ　サ。ヒ。足懈。あしのたゆきをいふ。古今（みるめなき我身を浦と知ねはや枯なで蜑の足懈くくる）

あしたゆふべ　ナ。朝夕。あしたとゆふべとをいふ。あさゆふまおなじ。万十（たましひもあしたゆふべまたまふれどあがむねいたしこひのまげきま）

あしだらひ　ナ。足盥。たらひなり。あしをあらふたらひ。

あしたわび　サ。フ。きぬぎぬのわかれのわびしきをいふ。拾遺恋（ものもがきねかくまぎもわがごとくもしたわびしきかずもまさらじ）

あしだな　ナ。履系。あしだまつくるをなな。和名

あしつき　ナ。うみくさのな。ぞちごのくになどのかをまたゆるみるのごときものなりとぞ。万十（をかみ川紅匂ふなとめらしあしつきとると瀬またたすらし）

あしつぎ　ナ。ふまえてあしをたかくするもの。

あしづつ　ナ。蒭萃。あしといふくさのなかまあるうすきかな。後撰恋（なまもがた刈りつむあしのあしづつのひとへもきみをわれやへたつる）

あしづの　ナ。葦。あしのめたち。あしかびまおなじ。和名

あしつな　ナ。とびのをどとまつくるを。雅楽（柱まくり）かたをうちてあしつをのつなをひきまはして）

あしで　ナ。茶筅。もじのかきかたなり。もじのかたちをくづして。あしのおひたるさまにせてかくもあり。みづのながれたるさままかくもあり。もじのかたりまえをまじへてかくもあり。源梅枝（あしで歌給をおもひおもひまかけとのたまへば）拾遺（すさまのまきものまあまたのうたあしでまかけるなかま）

あしでがき　ナ。もじのかきかた。あしでまおなじ。

あしてまどひ　ナ。みまものつきまとふをいふ。ものままとれてわれとわがこころのままままならぬをいふ。

あしどり　ナ。あしのたびざまをいふ。

あしなか　ナ。わらぐつなり。あしのなかはかりのわらぐつ。雑々記（あしなかまと禮儀なし。人の敷皮まを座しぐつ。雑々記（あしなかまと禮儀なし。人の敷皮まを座し候ともとほるときまあしなかをぬくまじきなり）

あしなが　ナ。長脚。あしのながきひと。むかしうみのな

かのあるさまをすめりしひとまて。あしのながきことニちやうはかりなりきとそ。枕草一（清涼殿の云々北のへたてなる御障子まあらうみのかたいきたるものゝ恐しげなるてながあしながをそかかれたる）

あしながぐも ナ。蟏蛸。くも。あしたかぐもまおなじ。本和

あしなつな ナ。浮藻。くさのな。はまたかなまおなじ。和

あしなふ ワ。ヒト。ニ。壅。あしのなふるをいふ。和名

あしなへ ナ。壅。あしなへたるひと。和名

あしなべ ナ。鉛。なべなり。あしのあるなべ。和名

あしなへぐ ワ。ヒト。四。跛。あしなへのゆくさまをいふ。和名

あしなみ ナ。足蟲。あるきゆくあしのならびをいふ。夫木世（かたがたまいそめるこまのあしなみをさつきならでもいつかくらべん）

あしなゆ ワ。ヒト。ニ。壅。あしのなゆるをいふ。唐物語（あしなえたる者のたふたふおざりつつ水をくみき）

あしなる ワ。ヒト。ニ。足腫。あるきなるるをいふ。源玉葛

（すこしあしなれたるひきたとく御堂まつきまけり）

あしのある ナ。蘆草。くさのな。かきなまおなじ。醫心

あしのうら ナ。蹠。あなうらまおなじ。後撰（あしのうらのいと磯くもみゆるかな波たよりても洗ざりけり）

あしのくび ナ。あしのすゑのところ。東北院職人歌合（男まゝ馴たる數なあしのくびまゆふ事の侍るとかや）

あしのけ ナ。脚氣。やまひなり。あしのいたむやまひ。和名

あしのは ナ。荒紫。あしなもてなへるなまて。かどまかけてわざたひをたらふまじなひまもちふるもの。和名

あしのまがひ ナ。足蹠。あしのあやまち。あしよりおこるわざたひをいふ。祝詞式（手のまがひあしのまがひ）

あしのまろや ナ。蘆屋。かりいほなり。あしといふくさをもてふけるかりいほ。寂蓮法師集（ゆふされはたみのの志ままの浦なきてあしのまろやまころもうつなり）

あしのや ナ。蘆屋。かりいほなり。あしのまろやまおなじ。續後撰（あしのやのこやの志のやの志のびまもひ

とまさられぬもしをみせなん）

あしのや ナ。茨矢。やなり。あしをもてつくれるや。おに。やらひのときものゆみまそへてもちふるもの。陰陽式

あしば ナ。あしのふみどころ。またあなひまおなじ。

あしはや ナ。足搦。あしのたこびのたやきをいふ。盛衰五（とりはかまきてあしはやまこそかへりけれ）

あしはやし サ。ヒ。足搦。あしのたこびのたやきをいふ。梁塵和歌（飛鳥もあしはやくしてたしりつゝく）

あしはやたぶね ナ。足搦小舟。ふねなり。ふなあしのたやきふね。夫木三（かきくもりあめをふりきぬみへなさがあしはやたぶねとまやふくらん）

あしはら ナ。蘆原。あしのひろびろとたえたるところ。

あしはら ナ。茨原。あしたらのくにまおなじ。玉葉

あしはらがに ナ。蟹蟹。かになり。つめまたほそやかなるけおひてあしまたけなきひとつのかに。和名

あしはらのくに ナ。茨原國。みくにのまたのななり。むかしこのくにのうみべまあしといふくさおほくたえたりしより。かくよびならひきとそ。竟宴歌（草木みな言やめよとてあしたらのくにへ立ましいさをなりけり）

あしび ナ。馬酔木。きのな。はたほそながくてのこはのごときさざみあり。たるのころ。ちひさくあをきたなさく。はたふゆまなりてもおちず。万十二（をしのすむ君がこの志まけふみれはあしびのたなもさきまけるかも）

あしび ナ。蘆火。ひなり。たまへのいへまてあしといふくさをたくをいふ。新古雜（なにためのころもほすとてかりてたくあしびのけふりたたぬ日そなき）

あしびやうし ナ。足拍子。あしをふみならしてとるひやうしをいふ。懷竹抄（かしらをふり。ひざびやうし。あしびやうし。けしからず日またつほどま）

あしふき ナ。足拭。あしをふくもの。あしをのごふぬの。

あしぶち ナ。蹴。うまなり。あしのたろきうま。和名古記

あしぶね ナ。蒹船。あしをもてつくれるふね。

あしぶみ ナ。あしどりヨおなト。源紅葉賀（おなじまひのあしぶみおもも世ヨみえぬさまなり）

あしま ナ。蘆間。あしといふくさのもえたるあひだをいふ。源若紫（いわけなきたづのひとこゑききしよりあしまヨなづむふねぞえならぬ）

あしまき ナ。蝦蟇。むしのたまごなり。おほちふどりヨおなト。字鏡（螺蛸をよめり）類名（螺魚をよめり）

あしまつひ ナ。蟶。むしのな。かしらもくちばもまたもうをヨにてほそやかヨながきことうしみのごとく七八しやくはかりなるもありてみづヨすめり。字鏡

あしまとひ ナ。蟶。むしのな。あしまつひヨおなト。以字

あしまぬり ナ。接摩。あんまなり。あんまをとるをいふ。源玉鬘（右近を御あしまぬりヨめす）

あしむ ワ。イ。ロ。鹿。にくむヨおなト。景行紀

あしもと ナ。足下。あしのまた。またあしぢかのところ。古今序（とほきところもいでたつあしもとより始りて）

あしやがま ナ。蘆屋釜。かまなり。ちくぜんといふくにのあしやといふところヨいでくるちやのゆのかま。茶具備討集

あしやむ ワ。ヒト。四。足惱。あしのなやむをいふ。空穂國讓（あしやむといふを蓋の宣旨を申し下さんなど思ふ）

あしゆひのくみ ナ。足結之組。くみいとなり。つくゑなどのあしのかざりヨもちふるいろいろのいとのくみものをいふ。源給合（うちしきを背地のこまのにしき。あしゆひのくみ。花足のこころばへなどいとをいまめかし）

あしよね ナ。粧。よねなり。あしきよね。類名

あしよわ ナ。足弱。あしのよわきひと。なんなこどもなど。

あしらひ ナ。あひきらふことをするをいふ。

あしらふ ワ。イ。ロ。應接。あひしらふヨおなト。

あじろ ナ。網代。あみのかをりヨもちふるもの。ふゆのころ。ひをといふうををとらんためヨ。かをのなかヨ。あまたのくひをうちてそのすゑヨふくろをつけおくものをいふ。掘川百首（かがりびのなからましかは

氷魚のぼるあじろのほどをいかでさらまし）

あじろ ナ。網代。たけまたもあしといふくさなどをもてあみのめのやうヨくみなしたるものをいふ。またあじろぐるまヨおなト。枕草ニ（あじろをもしらせたる人のかどよりわたりたるを）

あじろがき ナ。網代垣。かき。あじろをもてゆへるかき。

あじろかご ナ。網代籠。のりもの。あじろをもたれるかご。

あじろがさ ナ。網代笠。かさ。あじろをもてつくれるかさ。

あじろぎ ナ。網代木。ひをといふうををとるためヨふくろをつけおくき。またあじろヨおなト。万三（ものの〻ふの八十氏川のあじろぎヨいざよふ浪の行へ知ずも）

あじろぐるま ナ。網代車。くるまなり。あじろをもてやかたをたれるくるま。源榊（おほいどのヨ夜ヨかくれて渡り給へり。あじろぐるまのうちやつれたるヨ）

あじろど ナ。網代輿。のりもの。あじろをもてたれるこし。大鏡三（俄の事ヨてあじろ輿だヨなかりけれは）

あじろびと ナ。網代人。ひをといふうををとらんためヨあじろをまもれるひと。万七（うぢがはをよどせなからしあじろびとふねよばふこゑなちこちきこゆ）

あじろもり ナ。網代守。あじろをまもるひと。あじろびとヨおなト。師兼百首（まよふべきやみをもさらずあじろもりさのみやひをのよるをまつらん）

あしわけ ナ。脚別。つくゑなどのあしをとりかなつやうヨつくれるもの。類名（脚別案。あしわけのつくゑ）

あしわけ ソ。あしの志げみをわけてゆくをいふ。またものヨさたりのあるをいふ。頼政集（あしわけなることもやありけん久しうまからざりしかは）

あしわけをぶね ナ。ふねなり。あしの志げりたるところをこぎわくるふね。万十（湊いりのあしわけをぶねさだりおほみわがおもふきみヨあたぬころかも）

あしね ナ。蓋草。そめくさのな。かりやすヨおなト。本和

あしを ナ。銀。たかのあしヨつけたるを。かりはヨてた

かのそれぬためまくみをつくることあり。それなり。和名玉篇

あしなる ソ。ヒト。シ。蹶。あしのくじくるをいふ。源氏

（日つぶれ足なれ給へりとも）類名（蹶字をよめり）

あしなれ ナ。蹶。あしのくじけたるひと。

あす ナ。明日。けふのつぎのひ。万六（おとつひもきのふ

もけふもみつれどもあすさへみまくほしき君かも）

あす ソ。ヒト。シ。浅。みづのあさくなるをいふ。いろの

さめてうすくなるをいふ。万四（ひさかたのあめのさ

くめがいたふねのたてしたかつたあせにけるかも）

源氏 桐壺（ひとびつるところもふかきもとゆひまこきむら

さきのいろしあせずた）

あすかみそ ナ。飛鳥味噌。みそなり。やまとといふくまの

あすかといふところよりつくりいたすみそ。著聞八（奈

良なる僧のあすかみそといふものをもてきたり）

あすこ ク。彼所。あしこにおなじ。

あすはひのき ナ。羅漢柏。きのな。ひとつのひのきなり。

はたつねのよりもおほきくてあらし。枕草三（あすは

ひのきこの世ちかくもみえきこえず）

あすら ナ。阿修羅。おになり。ほとけとなりえざるおに。

空穂俊蔭（たしたなき心をなしてあすらの中まで雑りぬ）

あせ ナ。汗。ねつをうけてはだへまいづるうるほひ。落窪二（ふたりあせになりていとほしがる）枕草二（すずろ

にあせあゆるこころぞまける）明徳記（あせなにぎる）

宇治拾八（あせみづまなりて）和名（汗字をよめり）

あせ ナ。血。ちをいふ。いつきのみやのいみことば。齋宮式

あせ ナ。吾兄。あがせなり。またひとをまたしみてよぶ

ことば。古事記（ひとつまつあせを）

あせ ナ。呼。たまさをたたのさかひ。夫木五（なたしろの

みづのうきねやまかすらんかたづのこゑのあぜづた

ひゆく）和名（呼字をよめり）

あぜ ソ。何。うたがひいぶかることば。なぜまおあ。万

四十（あぜといへかさねまあたなくまひくれてよひな

むこなまあけぬまたくる）。

あぜおり ナ。呼機。おりものなり。ふときいとをほそきい

とをもてなかたかなるところとなかびくなるところ

とのみゆるやうまおりたるおりもの。

あせかく ソ。ヒト。四。汗出。あせのいづるをいふ。万九（あ

つけきまあせかき歎き木の根とりうそぶきのぼり）

あせぐむ ソ。ヒト。四。あせのいでんとまてたへのう

るふをいふ。著聞十（さむげまみたけるが御馬のかず

つかうまつりまけれはあせぐみまけり）

あぜくら ナ。校倉。こめなどをいるるくら。きをよこま

くみあげてつくれるくら。志貴山縁起（あぜくらのある

をあけて物取出すほどま）和名（校倉をよめり）

あせこ〜 サ。ヒ。あせのいでやすきをいふ。奇丹（うと

まねど雖もあせこき夏なれはま遊まぬとや心隔てん）

あせじむ ソ。ヒト。四。あせのまみつくをいふ。

あせたなごひ ナ。汗巾。あせのごひまおなし。雅裝

あぜち ナ。按察使。つかさのな。たみのありさまところの

ならそしなどを。みせしめたまふためまみちのくとい

ひたのくにとの二ところまおかれしつかさ。紀綱

あせづく ソ。ヒト。四。液。あせぐむまおなし。類名

あせてぬぐひ ナ。汗巾。あせのごひまおなし。

あせとり ナ。きものなり。あせをとるためまきるたぎ。

あせなは ナ。給縄。なたなり。あぎなへるなた。神代紀

あせのごひ ナ。汗巾。あせをのごふぬの。下學

あせばむ ソ。ヒト。四。あせぐむ。あせづくまおなし。

あせぶ ナ。馬醉木。きのな。あしびまおなし。

あせぶ ナ。熱沸騰。ほろしなり。あせもまおなし。

あせみ ナ。馬醉木。きのな。あしびまおなし。新六六（吉野川流つ岩根の白妙まあせみの花も咲まけらしも）

あせみぞ ナ。汗溝。うまのせのあせのながるるみち。和名

あぜみち ナ。呼路。たのさかひのほそきみち。為忠集（ゆ

く先たそこともわかぬ草の原心細くも通ふあぜみち）

あせみづ ナ。汗。ただのうるほひ。あせまおなじ。今書紀（いまだならねばあせみづまてふしたるま）

あせも ナ。熱沸瘡。ほろしなり。ねつをうけてただへまいでくるちひさきほろし。和名（熱沸瘡をよめり）

あせもよ ナ。あせのもよほすをいふ。またあせのもよほすはかりあつきをいふ。海人手古其集（あせもよまみだるる夏の涼しさも君のあふぎの風たやみなり）

あせゆく ワ。ヒ。ロ。過。あさくなりゆくをいふ。うとくなりゆくをいふ。源 榊（年くれていたのの水もこほりとぢ見し人かげのあせもゆくかな）とりかへ一（何ごともみなくちをしくあせゆく世のするなれど）

あせる ワ。ヒ。ロ。ころのいらだつをいふ。諸家前太平記

あそ ナ。朝臣。かはねのな。またひとなまたしみてよぶことは。神功紀（たまきそるうちのあそが）万十（佛作るまそほ足すも水溜る池田のあそが鼻の上をほれ）

あそこ、カ。彼所。あしこまおなじ。相國寺供養記（あそこここ破れてさしもみがきみがかれしところもみえぞ）

あそこ カ。汝。われとむかひゐてかたらふひとのなまかへてよぶことば。空穂 蔵明（あそこと少將と諸心ま）

あそそ ソ。うすらかまおなじ。万四（草枕旅をよろしと思ひつつ君をあらんとあそそまかつもまれども）

あそばかす ワ。ヒ。ロ。令遊。ちごなどのこころをなぐさむるをいふ。今書紀（わが君をあそばかし奉る程ま）

あそばす ワ。ヒ。ロ。令遊。あそばかすまおなじ。落窪（ひとりすみまてきんだちあそばしてさうざうしく）

あそばす ワ。ヒ。ロ。うやまひことばなり。よきひとのせさせたまふわざをうやまひていふことば。万十（松の下路ゆのぼらして國みあそばす）空穂 藤君の原（御琴あそばしなどするを）同 國讓（ひごろも御文あそばす）

あそび ナ。遊女。うかれめまおなじ。源 浮標（あそびどものつどひまゐれるま）和名（遊女をよめり）

あそび ナ。遊。こころをなぐさむるまわざ。古事記（鳥のあそび）源 桐壺（夜ふくる道あそびをそまたまひける）

あそびがたき ナ。相手。あそびのあひて。ともまあそぶとも。源 浮標（うくもなきあそびがたきまおぼいたり）

あそびぐさ ナ。あそびのてぐさ。あそびのたね。源 桐壺（いとおかしくうちとけぬあそびぐさま）

あそびごき ナ。遊伽。あそびがたきまおなじ。

あそびめ ナ。遊女。うかれめまおなじ。空穂 祭使（よるひるあそびめすゑてすきものいますかめる）

あそびもの ナ。遊女。うかれめまおなじ。住吉（河ぎりを過れはあそびものどもあまた船まのりつぎて）

あそびもの ナ。既具。もてあそびものまおなじ。狭衣三（おかしきあそびものどもたてまつらんとのたまへは）

あそびわざ ナ。遊事。こころをなぐさむるまわざ。

あそびた ナ。樂人。おんがくをするひと。保嬢女集（夕月夜ひかりなみすはあそびをの山のた近くよひそ來まける）政事要畧（あそび男二十人上下の社まを參る）

あそぶ ワ。ヒ。ロ。遊。こころをなぐさむるわざをするをいふ。伊勢（昔あかわたらひまける人の子ども非のもとまいでてあそびけるをおとなまなりまけれは）

あそびあかす あそびてよをあかすをいふ。空穂 祭使（もののねいたしてあそびあかして）

あそびありく あそびめぐるをいふ。空穂 陰後（この子いでいりあそびありきて）

あそびあるく あそびめぐるをいふ。万五（あかこまま山づくらうちおきたひのりてあそびあるきし）

あそびく あそびつつくるをいふ。武烈紀（あそびくる山びがたてまつまたてりみゆ）

あそびくらす あそびてひをくらすをいふ。万五（梅の花咲たる園の青柳を髮とまつつあそびくらさな）

あそびたはぶる たはぶれごとをまて あそぶをいふ。源 東屋（かんたちめあまたまゐりたまふ日まて あそびた

はぶれたまひてとれいもかかるときも）

あそびなぐ　あそび　て　なぐさむる　を　いふ。万八十（さかみづきあそびなぐれど）

あそびののしる　あそびさわぐを　いふ。空穂藏開（かくていとおもきろくあそび　ののしる）

あそびひろぐ　あそびわざを　ひろぐるを　いふ。源紅葉の賀（ちひさき屏ぐるつくりあつめてたてまつりたまへるをところせきまであそび　ひろげたまへり）

あそびまさる　あそびわざの　さかりゴなりゆくを　いふ。空穂俊蔭（人々いとどあそびまさるほどゴ）

あそぶいと　ナ。遊絲。かげろひ　ゴ　おなじ。夫木三（そらゴ知れ春ののきはゴあそぶいとのおもふすぢなき身のゆくへかな）また（津のくにのこやのわたりのながめまもあそぶいとさへひまなかりけり）

あそみ　ナ。朝臣。かばねのな。あそゴ　おなじ。紀懷

あそん　ナ。朝臣。かばねのな。またひとをたしみてよぶことば。空穂俊蔭（あやしくうせぬるあそんたちかな）

あた　ナ。仇。かたきなり。われゴむかひ　あたるものをいふ。万十二（筑紫の國をあた守るおさへの城ぞ）古今（かたみこそ今ハあたなれこれなくはわするるときもあらましものを）伊勢（なにのあたゴかおもひけん）

あた　ナ。思。もののながさ　みじかさ　をたかることば。釋日本紀（一あたを四すんなりとあり）

あた　ナ。もののもろくたかなきをいふ。またことのうきたるをいふ。新万（女郎花匂へるのべゴ宿りせばあやなくあだの名をやたちなん）古今（花よりもひとこそあだゴなりゴけれいづれをさきゴこひんとかみし）

あだあだ〜　サ。ン。ものの　うつろひ　やすきを　いふ。かたりやすきを　いふ。和泉式部日記（いろめかしくあだあだしけれど）源夕霧（あだあだしき御こころづかひをは）

あたうち　ナ。復讐。かたきうちゴ　おなじ。

あたがたき　ナ。讎敵。かたきなり。あたゴ　おなじ。源蜻蛉

（いみじきもののふ　あたがたきなりとも）

あたかも　ソ。恰。ぐたひのよきを　いふ。かれとこれとのくらべのうへを　いふことば。万九十（わがせこがささげてもたるほほがしは　あたかも似るかあをききぬがさ）

あたく　ソ。ヒ。シ。よごろを　ふれるさまゴ　みゆるを　いふ。源少女（今さへかかるあたけごとそといひあて）

あたくらべ　ナ。たがひゴ　あだごとをするを　いふ。伊勢（あたくらべかたみゴ　ふける男女のふるのびありき）

あたけ〜　サ。ヒ。もろくたかなきを　いふ。夫木廿一（山里の柴の片戸のかたびさし　あたげゴ　みゆる　假の宿かな）

あたごころ　ナ。ものゴ　うつろひ　やすきこころ。風俗歌（ひたちまも田をこそつくれ　あたごころかぬとやきみがやまなこえ野をこえあさよきませる）

あたごと　ナ。たかなきふわざ。うきたるふわざ。源帝木（たかなきあたごとなりまことの大非をも）

あたし〜　サ。ン。ことのなみゴ　かえりて　みゆるを　いふ。

續紀（政の趣異しまゴ　ある　ゴ　あたふき事　まじへは）榮花玉蟲（御聲あまたゴ雜らせ給へず　あたしう聞えたり）

あたしごころ　ナ。あたごころゴ　おなじ。古今（君をおきてあたしごころをわがもたは末の松山浪もこえなん）

あたしちぎり　ナ。かたりやすきちぎり。風雅（人をいさあたし契のことのたなまことがほゴや待ふけぬらん）

あたしの　ナ。ものたかなきのべ。またひとをたうむるのべ。徒然草（あたしののつゆきゆるときなく。鳥部山のけぶりたたざらでのみすみたつるならひならは）

あたしびと　ナ。他人。ことなるひと。ほかのひと。允恭紀

あたしよ　ナ。ものごとのたかなくたのみなきよのなか。千載雜（ねなしぐさなにあたしよゴおひそめゴけん）

あたる　ワ。イ。ヒ。つよくあたるを　いふ。万九十（天雲をほろゴふみあたしなる神も）散木（まきの板をほろゴあたしてかよひこん忍びもあへぬいもがふなひゴ）

あたたか　ソ。溫。あつさを　ほどよくおぼゆるを　いふ。万三

（さら貝ひのつくしのわたも身ヨつけていまだもきねどあたたかヨみゆ）

あたたか〜 サ。ヒ。温。あたたかなるをいふ。源 末摘花（松の雪のみあたたかげヨ降りつめる山里のこちきて）

あたたけ〜 サ。ヒ。温。あたたかしヨおなト。夫木 四（あたたけき春の山べヨ花のみぞ所もわかず咲渡りける）

あたたまる ワ。ヒト。日。煖。あたたかヨなるをいふ。大鏡 八（こよなくあたたまりてさむさもわすれたべりき）

あたたむ ワ。イヒ。シ。煖。あたたかヨするをいふ。字鏡

あたたむち ナ。賜蔬。あたのたむちをいふ。皇極紀

あたつ ワ。イヒ。シ。當。ものをひとところヨゆきあたるをいふ。あつヨおなト。類名（當字をよめり）

あたな ナ。あたあたしきな。うきなヨおなト。源 夕顔（當世すまヨ又もあたなたちぬべき御心のすさびなめり）

あだな ナ。糠雨。あざなヨおなト。

あだなぐさ ナ。根。さくらヨおなト。藻鏡 九（あだなぐさいかなる人の植置てかかる盛世ヨ散るをみるらん）

あたなふ ワ。ヒト。日。敵。あたをするをいふ。神代紀

あだなみ ナ。なみなり。さだまれるときもなくたつなみ。むかなくたつなみ。またひとのこころのさだまらぬヨたとへていふ。古今（そこひなきふちやたさわぐやまがはのあさき瀬ヨこそあだなみたて）

あたね ナ。酒。くさのな。あかねヨおなト。古事記（あたねつきそめきがきるヨきめころも）

あだね ナ。あだぶしヨおなト。夫木 六（ゆふすずみあだねの床の明方ヨすだれうごかし秋を來ヨけり）

あたのかぜ ナ。あたとなるかぜ。むかひよりふくかぜ。空穂 俊蔭（あたのかぜ吹て三ある舟二ヲそこなれぬ）

あたはす ワ。イヒ。日。與。婚。ものをあたへたまふをいふ。またをとこをみなのまじわりをせさせたまふをいふ。古非記（一夜みとあたはしつ）雄略紀（與字をよめり）

あたばな ナ。華。ななりみをむすはぬなな。和名

あたはら ナ。痴。さらのひきつりていたむやまひ。和名

あたひ ナ。價。こヨあるうりもののくらゐヨのかしこヨあるうりもののくらゐヨあたりあふくらゐをいふ。うりかひヨいふことば。万三（あたひなきたからといふともひとつきのにどれるさけヨあにまさらめや）空穂 忠公（賤人所ヨもてゆきてうるものなりとていたせ。あたひとれは千五百といらへよ）

あたひえ ナ。直。かはねなり。あたへヨおなト。皇極紀

あたびと ナ。落出。うかれてすずろありきをするひと。古今 戀（あきといへはよそヨまぞききしあたびとのわれをふるせる名ヨこそありけれ）

あたふ ワ。イヒ。日。與。もののよくひとつヨよりあふをいふ。またみヨおひうるをいふ。またことヨたふるをいふ。またものをわたしやるをいふ。竹取（翁ヨなげく。あたえ如亦なり）夫木 六（いづれをかまづうれへまし心ヨまあたえ如ものの多くもある哉）万二（みどりごのこひなくごとヨとりあたふ物しなけれは）

あたふ ワ。イヒ。シ。與。わがものをひとヨわたしやるをいふ。唐物語（たちまちこがね千りやうをあたへつ）

あだふ ワ。ヒト。シ。戯。あざれたたぶるるをいふ。狹衣 一（まろが顔をこよなくよきそみたまへみたまへをあだへあたへきぬをせちヨひきあげんとす）源 夕顔（すずろヨかくあだへかくしていでやわがならましそやと）

あだぶ〜 ナ。ひとりねヨおなト。夫木 六（行とまる草のかりほのあだぶしを月ヨもられてあかすなりけり）

あたへ ナ。直。かはねのな。姓氏錄

あたま ナ。天窓。かしらのうへ。いたきヨおなト。和名

あたまわり ナ。ものをひとかずヨあませてわくるわざ。

あたむ ワ。イヒ。日。慰。あたがたきヨみるをいふ。源 玉鬘（この監ヨあたまれていささかのみじろきせんもところせくなんあるべき）字鏡（慰字をよめり）

あためく ワ。ヒト。日。いろめくヨおなト。拾遺（花の色

を現たまめでたあためきぬいざ黒闇と成て挿さん)

あたもの ナ。もろくもかなきもの。古今 戀(命やた何ぞ"た器のあたものをあふましかへは惜からなくま)

あたや ナ。やなり。いてあたらぬや。

あたら ソ。可惜。をしむべくあるをいふ。古事記(あたらすがたら)源 帚木(あたら御身をなどいふま)

あたら〜 サ。ラ。可惜。新。をしむべくあるをいふ。またもののあらたなるをいふ。万三十(あたらしき山の荒ま"くをしも)同七十(新しき年の始めま豐の年志るすとならし器のふれるも)落窪二(御車あたらしく調ト〜)

あたらしむ ワ。イ。ヒ。惜。をしむまおなト。雄略紀

あたらみ ナ。をしむべきみ。万九十(秋の葉の匂ひまてれ"るあたらみの盛りをすらま壯士の群いとほしみ)

あたらもの ナ。をしむべきもの。和泉式部集(みる毎まあ"たらものをと覺ゆるも鹿たつ野べの萩のたな哉)

あたらよ ナ。をしむべきよる。万九(玉くしげあけまくを"しきあたらよを衣手かれてひとりかもねん)

あたり ナ。邊。もののめぐり。またほとり。古事記(かづら"きたかみやわぎへのあたり)源 帚木(やんごとなきあたりのうちうちのもてなしけちひ)散木(もぎたつるこずゑをみれはいとどしくあたりを拂ふ八重櫻かな)

あたりぐる〜 サ。ラ。もののくらべがたきをいふ。狹衣二(あたりぐるしくときめきたまふ)

あたりさはり ナ。ものまふれあたるをいふ。

あたりな〜 サ。ヒ。くらぶべきものなきをいふ。大鏡七(南京のそこはくのおほかる寺ども猶あたりな〜)

あたりまへ ナ。ことわりのさやうまあるべきをいふ。

あたる ワ。ヒ。ヒ。當もののひとところまゆきあふをいふ。またもののそのかたまむきてあるをいふ。古事記(風のふくまあたりて高山のなのへまに伏して)紫式部日記(此對のたつみまあたりたるらうまさぶらふ)

あたわざ ナ。むかなきまわざ。源 手習(念佛よりほかのあたわざなせそともしたなめられしかは)

あち カ。彼方。あなたまおなじ。能因樂(あちの山)

あち ナ。邊。うをのな。かたちさはまにて。すこしあかはみてたらのわたりまろし。またあぎとよりまりをのすゑまかけてかたきうろこあり。草庵集(あめふりてかもみづますあちこちまふなびとこひしこさはさたらじ)和名(鯉字をよめり)内膳式(鱸字をよめり)

あぢ ナ。とりのな。みづとりなり。かたちかもまにてちひさく。かしらとあをみどりまてあかくきはみたり。つはさとちいろまてむねとあかくきはみ。ちひさきくろはしあり。つねまむらがりてとぶ。万十(あぢのすむすさの入江のありそ松我をまつ兒らとただ一人のみ)

あぢ ナ。味。あぢとひまおなト。三五記

あぢがも ナ。とりのな。あぢまおなト。

あぢきな〜 サ。ヒ。こころのおもしろくなきをいふ。たのしくなきをいふ。見宴歌(あみとれるあびとまあひてあぢきなくよとせのあひだとくるよしな〜)

あちこち カ。彼方此方。あなたとこなたとをいふ。中務内侍日記(こしはあちこち結ひまそして)

あぢさけ ナ。味酒。さけなり。あぢとひよきさけ。うまざけまおなト。七一職人歌合(あぢさけのかすみしそらまに似たるかなあまけのつきのきぼりいでつつ)

あぢさゐ ナ。紫陽花。くさのな。はとながきいびつまて。めぐりまのこはのごときぎざみあり。なつのむじめ。くきのすゑまみどりいろなる四ひらのとなむらがりさきてとまりのごとし。万十二(あぢさゐのやへさくごとくやつよまをいませ我がせこみつつ志のはん)

あぢなむ ワ。イ。シ。味。あぢをところむるをいふ。三五記

あぢはひ ナ。味。くちまいれまたまうけておぼゆるものをいふ。あまし。からし。のたぐひ。字鏡(味字をよめり)

あぢはふ ワ。イ。ヒ。味。あぢをところむるをいふ。雜憲記(日まあぢはふところを)伊勢(腹まあぢはひて)

あちはふ ワ。イヒ。シ。味。あぢ をこころむるをいふ。言塵集序（風味をあさなゆふなあぢをふるほどの）

あちまさ ナ。蒲桃。きのな。かたちすろまにてながくおほきやかなり。ぱのながさも五六ばやくなるあり。されどもすろのごとくさけわかれぞ。古事記

あちまめ ナ。菽豆。まめのな。ふぢまめのたぐひのまめをすべてよぶ。和名（菽豆をよめり）

あちむら ナ。あぢがものむれをるをいふ。万三（つづまるあぢむら騒ぎ）同十二（あぢむらの騒ぎ競ひて）

あちやらづけ ナ。つけものなり。あさな。おほねのたぐひなこまやかまきざみてず。さけ。しやういうをあたせたるまるまつけたるつけものをいふ。

あちらこちら 次。彼方此方。あちこちまおなじ。

あつ ワ。イヒ。シ。熱。ものをひとところまゆきあたずるをいふ。またこのものをかのものまむくるをいふ。源少（独を御かほまおしあてなきたまふ）また（いとよくおもひあてられたまふる御そはめを）

あついた ナ。おりもののな。あつくおりたるおりもののおもんをおりいだせるもの。にしきのたぐひなり。

あついもの ナ。熱。あつものまおなじ。空穂嵯峨の院（くちぶ木まおひたるくさびらどもあついものまさせ）

あつえびと ナ。篤癧。あつしきやまひをうけたるひと。またやまひをうけてかたたまなれるひと。持統記

あつか ナ。束草。あなくさをつかねたるもの。まつりなどのときのまきものまするもの。神祇式

あつかはー サ。フ。煩。なやましきをいふ。わづらはしきをいふ。源角（ひとまれずあつかはしうおほせ侍れば）

あつかはー サ。フ。熱。あつくくるしきをいふ。空穂上（居給へる人々狭くて人げまあつかはしく覚え給へる）

あつかひ ナ。扱。ところをものまくばるをいふ。またそのわざをするをいふ。またそのあつかひをするひと。狭衣二（御まへの御あつかひもいかでかたまたべらん）

あつかひぐさ ナ。扱種。あつかひのくさたひ。狭衣三（このところのあつかひぐさまこそいひののしりけれ）

あつかひびと ナ。扱人。とりあつかひをするひと。

あつかふ ワ。イヒ。ヒ。ところをものまくばるをいふ。またそのわざをするをいふ。源帚木（まことまおやめきてあつかひ給ふ）同榊（人まもどきあつかされぬ）

あつかふ ワ。ヒ。ヒ。悶熱。ねつまなやむをいふ。またわづらふをいふ。神代紀（あつかひなやむ）

あつかみー サ。フ。ぢをたぢともせざるをいふ。

あつがみ ナ。厚紙。かみなり。あつくあたせたるかみ。著聞五（あつがみを黒物まつまれたりけるま）

あつかり ナ。頂。ひとのまわざまかかりあふをいふ。またひとまかたりてそのものをまもるをいふ。またあつかりのきりて。またあつかりびとまおなじ。源顔少（あつかりいみじくけいめいまてありくけしきま）

あつかりびと ナ。頂人。ひとのものをあつかれるひと。またひとのことまあつかれるひと。

あつかる ワ。ヒ。ヒ。與。ひとのまわざまかかりあふをいふ。今昔一（佛の御名を唱へて利生まあつからん）

あつかる ワ。イヒ。ヒ。頂。ひとまかたりてそのものをまもるをいふ。大和（よるひるこれをあつかりてとりあつかひたまふ程まいかがまたまひけんそらし給ひて）

あつき ナ。厚著。きものをあつくきるをいふ。

あつき ナ。小豆。まめのな。えだもはもささげまにてちひさく。まめたあかー。古事記（鼻まあつきなり）

あつきがゆ ナ。小豆粥。かゆなり。あづきをまぜてにたるかゆ。土佐（十五日けふあつきがゆにず）

あつきぬ ナ。おりもののな。あついたまおなじ。盛衰

あつく ワ。イヒ。シ。頂。われまかたりてそのものをまもりをひとまあつらふるをいふ。竹取（翁のおうなまあつけてやしなたす）土佐（家をあつけたりつる人）

あつぐるー サ。フ。熱。あつくくるしきをいふ。枕草（たち

あがりなどあつくるしうまちこうするほどまで)

あつけ　ナ。熱氣。なつのころのあつきいきぶり。またあつさまあたれるやまひ。爲忠集(涼しくも衣手輕し御祓川あつけ拂ひて歸るさのもり)狹衣四(夏方より毋上惱しげまを給ふを例もあつけまたさのみこそと)

あつけ〜　サ。ヒ。熱。ひまちかづきておぼゆるころもちなり。あつしまおなじ。万九(あつけきまを汗かき吹き)

あつこゆ　ワ。ヒ。シ二。厚肥。かさなりてあつらかなるをいふ。枕草七(紙のあつこえたるをあやしとみて)

あつざ　ナ。梓。きのな。はまを三つのとがりあり。おぼきなるはを五六すんもあるべし。わかはのときをくれなゐまて。なつのをじめ。をろくきはみたるをなさく。和名

あつさのき　ナ。梓。きのな。あつさまおなじ。本和

あつさみこ　ナ。梓巫。かんなぎなり。あつさゆみをひき。かみおろしをして。かみのをしへをこふかんなぎをいふ。

あつさゆみ　ナ。梓弓。ゆみ。あつさをもてつくれるゆみ。

あつちもん　ナ。上土門。あげつちもんまおなじ。

あつちや　ナ。棚屋。あつちをおぼひたるかりや。江次第

あつつかへ　ナ。倍。ひとまつかへたるひとまたひとのつかふるをいふ。類名(倍字をよめり)

あつととゆ　ワ。ヒ。シ二。跨。ああとよびてとびこゆるをいふ。文選(跨字をよめり)

あつなひのつみ　ナ。ふたりをひとつところまたぶりたるつみ。神功紀(あつなひのつみといふ)

あつぱひ　ナ。煖。をひなり。あつくあたたまれるをひ。字鏡

あつびたひ　ナ。厚頷。かんむりのいそのあつきもの。四三條製束抄(臣下冠少年頷額。中年の後あつびたひ)

あつぶさ　ナ。厚鬣。ふさなり。いとのあつきふさ。盛衰

あつぶすま　ナ。厚衾。ふすまなり。わたのあつきふすま。六帖五(あつぶすまなごやがをたまねたれどもいもとしねねはをたへさむしも)

あつま　ナ。東國。ひがしのかたのくにぐに。就行紀

あつまあそび　ナ。東遊。かぐらうたのふしのな。源若菜(あづまあそびの耳なれたるをなつかしくおもしろく)

あつまうた　ナ。東歌。うたなり。あづまぐのよめるうた。万葉

あつまうど　ナ。東人。ひがしのかたのくにのひと。以字

あつまからげ　ナ。ころものまへのすそをからぐるをいふ。新六五(あつのをがあつまからげのあさごろもふたまたがををさそわたるらん)

あつまきぬ　ナ。東絁。きぬなり。あつまよりおりいだすきぬ。源東屋(ただあたたかなるあつまきぬどもを)

あつまこと　ナ。和琴。ことなり。やまとことまおなじ。紫抄源

あつまこゑ　ナ。東聲。あづまうどのこゑ。源東屋(いやしきあつまごゑまたるものどもはかりいでけり)

あつまぢ　ナ。東路。ひがしのくにぐにのうまやぢ。またひがしのくに。六帖二(あつまぢのうまやうまやとかぞ

へつつあふみのちかくなるぞうれしき)

あつまつ ナ。遠路。ひがしのかたのくにぐに。またみやとまとほきところ。またゐなかまおなじ。和名

あつまど ナ。東人。あづまびとまおなじ。万二(あづまどのざきの國の衙の繁まも妹が心まに乘まけるかも)

あつまなまり ナ。東詞。あづまびとのことばのなまり。

あつまのかた ナ。東方。ひがしのくにのかた。伊勢

あつまのくに ナ。東國。ひがしのかたのくにぐに。万二(鳥がなくあづまのくにの御いくさをめしたまひて)

あつまのこと ナ。和琴。ことなり。やまとことまおなじ。後拾雜(あふさかのせきのあなたもまたみねはあづまのことも知られざりけり)

あつまびと ナ。東人。ひがしのくにのひと。源宿木(わりどや何やとこなたまも入たるを東びとまもくたせ)

あつまめ ナ。東女。ひがしのくにのをんな。頼政集(あづまめと聚覽てきけは下野やあその河原まに千鳥鳴也)

あつまや ナ。四阿。いへのつくりさまなり。やねをよもまふきおろしたるいへ。梁塵愚按抄(あづまやのまやのあまりのあまそそぎ)和名(四阿をよめり)

あつまりぜい ナ。烏合勢。ここかしこよりあつまりたるつはもの。かけひきのならしをせざるつはもの。

あつまる ワ。ヒト。四。集。もののあまたひとところまよるをいふ。落窪三(わかうどども參りあつまりたる)

あつまわらは ナ。東堅子。にようくわんのな。公事根源(あづまわらはといふは。内侍司の被官まある者まて。行幸の時。姫松とておかしき馬まのりて供奉するこれが事なり。これは三つ子をもちひちるるまや)

あつまをとこ ナ。東男。ひがしのくにのをとこ。

あつまをとめ ナ。東女。ひがしのくにのをとめ。木夫

あつまをみな ナ。東女。ひがしのくにのをみな。万葉

あつむ ワ。イヒ。シ。集。ものをひとところまあまたよするをいふ。源給合(紙どもまかきあつめさせたまふ)

あつむぎ ナ。温飩。あたためたるうどん。七一職人歌合(あつひきのひしあげのせとの月わたるみゆ)

あつもの ナ。羹。くひものなり。うをとりなどをまるまいれてにたるもの。源若菜(御かたらけくだりわか菜の御あつものまゐる)和名(羹字をよめり)

あつやう ナ。厚綿。かみなり。あつくすきたるかみ。

あつゆ ワ。ヒト。シ。篤經。やまひのあつしくなるをいふ。源沙標(おとどうせたまひて大宮もたのもしげなくあつえたまへるまま)拾統紀(篤經をよめり)

あつらか ソ。厚。かさなりのおほくあるをいふ。宇拾一(たたみあつらかまきてくだものくひものまゐうけ)

あつらふ ワ。イヒ。シ。誂。まわざをたのむをいふ。古今雜(ふくかぜまあつらへつくるものならは)

あつる ワ。ヒト。シ。あつさまわづらひなやむをいふ。和泉式部集(床夏まおきふす露ハ何なれやあつれてせこがまどほなるらん)永久百首(秋きても風ひやかなる暮もあるをあつれまめらひむつかしのよや)

あて ナ。高貴。たふときひと。榮花木綿しで(これいかであての御もとまたてまつらんとのたまはするまま)

あて ソ。貴。みのほどのたふときをいふ。またみやびやかなるをいふ。竹取(あてなるもいやしきもこのかぐや姫をえてしがなとおとまききめでまどふ)空穂國讃(みれむいとあてまなまめきたるひとの)

あて ナ。當。賀。くはりあつるをいふ。まためあてのもの。またものをうつときのまたのまき。空穂藤原君(供人も十五人つけ豆を一さやあてまは出す)山家集(五月雨も行べき道のあてもなし小笹が原もうきまは流れて)雄略紀(石をもてあてを去て弃をふりて材をけづる)

あておこなふ ワ。イヒ。四。充行。ものをくはりあてておこなふをいふ。落窪三(とかくすべき事あておこなふ)

あてがひ ナ。充行。ものをさためてあておこなふをいふ。

あてがふ ワ。イヒ。四。充行。あておこなふまおなじ。榮花玉飾

（おぼしあてがふ殿の御前も例ともおもしまさぬ）
あてこする　ワ。イヒ。ロ。侮誚。ことゝよせてそしるをいふ。
あてずゐりやう　ナ。推量。おしはかりゝおなじ。
あてつく　ワ。イヒ。シ。充行。あてがひなふゝおなじ。著聞十
（田ゝ水をまかするころ。村人水を論じてとかく爭ひて）おほいこが田ゝをあてつけざりける時）
あてつく　ワ。イヒ。シ。侮誚。ことゝよせてそしるをいふ。
あてはか　ン。貶。たふときをいふ。あてやかゝおなじ。
あてはかる　ワ。イヒ。ロ。擬。おしはかるゝおなじ。類名
あてはむ　ワ。ヒト。ロ。貶。みやびやかゝみゆるをいふ。源松一（やまのふもとなる家のくちをしからぬあてはみたるさまにて。つくりさしたるけしきなり）
あてびと　ナ。貶人。みのほどのたふときひと。源帚木（なまめきたるさまにてあてびととみえたり）
あてぶ　ワ。ヒト。ロ。貶。賦。あてはむ。また いろめくゝおなじ。類東風（すきすきしくあてびてもおもしまさぬ）
あてぶみ　ナ。充文。そのひとゝあてあたふるふみ。朝野群載
あてまうく　ワ。イヒ。シ。擬。あてあてまうくるをいふ。類名
あてみ　ナ。こゝろをもてつくわざ。やもらゝいふことは。
あてもの　ナ。的。めあてとするもの。まとゝおなじ。今昔五十
（此やうのあてものなども今は箭のおつる所も）
あてもの　ナ。ものをかくしてうらなひあつるわざ。
あてやか　ン。貶。たふときをいふ。またみやびやかなるをいふ。枕草六（さしぬきのすそもあてやかゝ）
あと　ナ。後。跡。痕。あしのあるかた。またあしのふみつけたるかた。またあとゝ。またつぎ。またのちゝおなじ。古事記（みまくらべゝまたらぢひ。みあとべゝまたらはひて）万七（ももしきの大宮人のふみしあとどころ）源末摘花（あとゝつきてうかがひけり）太平三（此人朝ゝつかへて西園寺のあとをつぎ給ひ）今昔九（あるゝ山へいれはおのおのよろこびてあとさきゝたちてぞゆきげる）
あとあゝ　ナ。後尾。つぎゝまたぶあし。うしろのあし。

あとうがたり　ナ。後言。なぞ。またまりうごとゝおなじ。後撰（あとうがたりの心をとりてかくなん申しける）空穂藤原（知れるどちこそあとうがたりもすれ）
あどうつ　ワ。ヒト。ロ。ものがたりのひやうしをとるをいふ。拾玉一（さぞといたはまことゝさぞとあどうちてなやうやといふ人だにもなゝ）大鏡一（このさぶらひぞよくきかんとあどうつめりゝ）
あとおさへ　ナ。殿。あとのおさへ。ちんがりゝおなじ。
あとかた　ナ。痕跡。もののありしあとゝのこれるかた。源松三（住みたまひし家などのあとかたなくなり）
あとかはね　ナ。後裔。そのいへのすぢのひと。大鏡八（幸相もいまはあとかはねたゝおもせず）
あどきよめ　ナ。跡淨。ひつぎをいだしあとのきよめ。
あどけなゝ　サ。ヒ。稚。あどなゝおなじ。
あとこゆ　ワ。イヒ。シ。跨。あつとこゆゝおなじ。顯宗紀
あとさき　ナ。先後。あとゝさきと。今昔九（あるゝ山へいれはあよろこびてあとさきゝたちてぞゆきける）
あとしき　ナ。跡式。おやのいへのあと。
あとしざり　ナ。後退。あとのかたゝさりそくをいふ。
あとそなへ　ナ。後備。あとのそなへ。さりへのそなへ。
あとたる　ワ。ヒト。シ。垂跡。かみほとけのみたまのよゝとどまりのこるをいふ。新千（わけてなほたのむこころもふかきかなあとたれそめしゆきのさらやま）
あとつぎ　ナ。嗣子。ひとのあとをつぐべきひと。
あとつく　ワ。ヒト。シ。印。記。ものゝそのあとをつくるをいふ。新古冬（庭のゆきゝわがあとつけていでつるをとれゝけりとひとやみるらん）新千雜（わかの浦やおもひしよりもたまちどりあとつけそふるたびぞかさなる）
あとどころ　ナ。蹤跡。ふるきあと。ふるきなどころ。万七（ももしきのおほみやびとのふみしあとどころ）
あとどふ　ワ。イヒ。ロ。弔。祭。なきひとのあとをとぶらふ

ないふ。たままつりをするをいふ。新千載（天がけりさ
こそあとれと思ひけめあととふ宿の法のむしろま）

あとこむ ワ。ヒ。シ。留跡。歴跡。あとなのこすをいふ。また
たあとをたづねるをいふ。源慎柱（この世まあとこむべ
きさもあらぬ）山家集（ゆき去のぐいほりのつきをさ
しそへてあととめてこんひとをとどめん）

あとごり ナ。留子。いへのあとをつぐべきひと。

あとこな〜 サ。ヒ。無跡。そのあとのなきをいふ。また ゆ
くへのなきをいふ。月清集（すみすてて人をあとなき
岩の戸ま今も松風庭ならふなり）金葉夏（時鳥あか
で過ぬる程まよりあとなきそらをながめつるかな）

あどな〜 サ。ヒ。約。いわけなしまおなじ。諸國物語集（
あどなきもまことのなぞもとりどりま）

あどなしごと ナ。あとかたなきこと。またまことならぬこ
と。いつたりまおなじ。天武紀（無端事をよめり）

あとのまつり ナ。失期。むゆかのあやめまおなじ。

あとばらひ ナ。跡拂。ひつぎをいたせるあとのきよめ。

あとふ ワ。イ。シ。聘。つまをめとるをいふ。履中紀 安康紀

あとふ ワ。イ。シ。跳。あつらふまおなじ。六帖日（ひと
のこころをいかがたのまんほととぎすをるをなげき
あとふとも）字鏡（跳字をよめり）

あとべ ナ。後方。あしのところ。すそのところ。古事記（み
あとべまたらはひてなきたまふときま）

あとまくら ナ。頭脚。あとべとまくらべと。また あとさき。
狭衣三（あとまくらもまらず）雄略記（頭脚をよめり）

あとめ ナ。名跡。後。おやのあと。おやのなりそひのあ
と。また まりへ。盛衰記（多くあとめまつきてきたり）

あともどり ナ。後退。あとのかたまもどるをいふ。

あともふ ワ。イ。日。牽。ひとをともなふをいふ。いざな
ふをいふ。万二（弓とりもたし御軍をあともひたまひ）

あとらふ ワ。イ。シ。跳。あつらふまおなじ。神功紀

あとり ナ。猶子。とりのな。かたちすがりまにておほ

きく。かしらとくひとも。たひいろまてあをはみ。おとが
ひとくちはしとそきいろまあかはみたり。またくろく
まだらなるほしあり。せなかもあをくろく。むねとも
らともあかぐろく。つはさとなをともくろく。あしもき
はみたるあかいろなり。つねまおほくむれてとぶ。天武紀

あな ナ。穴。うちのむなしくなれるところ。なかのくぼみ
たるところ。古事記（其矢をとらしてその矢のあなよ
りつき返したまひしかは）夫木二（世の中をうきひ
とふしまは吹く笛のあなむつかしやねこそたえせぬ）

あな デ。ナ。こゑなり。なげくときのこゑ。古拾（あたれ
あなおもしろ）万十（あぢのすむすさのいりえのこも
りぬのあないきづかしみずひさままて）

あない ナ。案内。まるぞ。またおとづれまおなじ。狭衣三（
ここかしこさしのぞきつつあないするとみれは）

あないち ナ。撰錢。たたぶれあそび。つちまあなをほり。そ
のあなまぜになげいれて。かちまけをするたたぶれ。

あなうら ナ。蹠。あしくびのうらをいふ。和名

あなおと ナ。足音。あしのおと。ふみあるくひびき。また
ただしまおなじ。字鏡（跳字をよめり）

あなかしこ デ。ナ。いらへをするとき。まづそのつつしみ
のこころをあらはすためまいふことば。また せうそこの
をりまかきそふることば。空穂俊蔭（俊蔭なみだを流し
て答ふ。あなかしこ。此山を尋ねること。をげしきいとほ。
ほむらいづるまで。けだものをげしきなかをわけ）住
吉（高をすてて夜をひるまあり たまへあなかしこ）
源宿木（うらめしうおもうたまへらるれ。よろづをいまさ
ぶらひてなん。あなかしこ。すぐよかまあるき まきしの
こさそしきまて）同行幸（あなかしこあなかしこ）

あながち ソ。強。ものどをするま。そのほどますぎて
するをいふ。きひて。おして。のこころ。詞花（たりまなる
恋かまそむるあながちまひとをこひしとおもふころ
かな）狭行紀（強字をよめり）

あなぐも　ナ。蠦蟧。くもなり。つちぐもゝおなじ。

あなぐら　ナ。穴蔵。くらなり。つちゝあなをほりうがちてつくれるくら。親長記（穴蔵といふものあり）

あなぐる　ワ。イ。四。探。さぐりもとむるをいふ。たづねもとむるをいふ。清田十（いよいよあなぐりていたじきをあげてみるゝ）舒明紀また霊異記（探字をよめり）

あなご　ナ。うなのな。かたちはもゝにて。ちひさく。いろうすし。かしらよりなゝいたるまで。まろきほしあり。

あなゝ　ナ。かぜなり。にしきたよりふくかぜ。散木（あなしふく小島が崎の潮千鳥いたうつ波ゝ立隠ぐなり）

あなすゑ　ナ。足端。あしのすゑ。あしのさき。神武紀（あなすゑのあしきらひもの）空穂忠乞（かしらよりあなすゑまで。ただあやにしきをたちきりて。みたまたん草木まで。きせかざり。このおとどゝつかまつらん）

あなすゑ　ナ。後裔。そのいへのちすぢのひと。顕宗紀（押磐のあなすゑやつこらまゝ）空穂嵯峨院（やんごとなきひとのみな御あなすゑゝまてあんめるを）

あなた　カ。彼方。とほくなれたるかたをゆびさしていふときのことは。古今冬（ふゆながらそらよりたなのちりくるをものあなたたるゝやあるらん）源氏生（ありつきたりしあなたのとしごろを）

あなづらはゝ　サ。フ。侮。あなづりつべくあるをいふ。またあさをかゝかろがろしくみゆるをいふ。空穂俊陰（わらたまもあれはすこしあなづらはしくやおぼえけん）

あなづる　ワ。イ。四。侮。おもしとみざるをいふ。おもひかろむるをいふ。源夕顔（これこそかの人のさだめあなづりしまものまなのならめ）落窪二（あなづりやをくていとわびしけれは）枕草二（あなづらるるもの。ひとのいへのきたおもて）霊異記（蔑字をよめり）

あなどる　ワ。イ。四。侮。あなづるゝおなじ。太平三（楠が武略あなどりにくしとや）字鏡（侮字をよめり）

あなひ　ナ。麻柱。たしごのたぐひなり。あしをかけて。たかきゝのぼるれうゝきをくみあたせて。たかくつくれるもの。竹取（燕の巣のなかのこやすがひをとらんとて人をあなひゝのぼせて）和名（麻柱をよめり）

あなふ　ワ。イ。四。助。たすけをするをいふ。継紀四（いやつとめゝいやまさりゝあなひ奉り。たすけ奉らん）

あなぬずみ　ナ。穴鼠。ねずみなり。あなゝすめるねずみをいふ。土御門院御集（世なまのぶころのうちのあなねずみやすくいづべきみちもあるらし）

あなはじかみ　ナ。生薑。くれのもじかみゝおなじ。和名

あなひら　ナ。田。あしくびのおもてのところ。和名

あなや　テ。ナ。こゑなり。おどろきあやぶむこゑ。伊勢（あなやといひけれど田なるさわぎゝえきかざりけり）

あなゆむ　ワ。ヒ。四。足憊。あしのなやむをいふ。あるきなやむなり。万四（あなゆむのこまをしけくもなゝ）

あに　ナ。兄。われよりさきゝうまれたる。ちからのをのこ。また ひとをまたしみてよぶことは。古事記仁賢紀

あに　ソ。豈。ことのこころをかへさまゝするときゝもちふることはまてまかあるゝまたあらぬをいふことはなり。万三（あたひなきたからといふともひとつきのにこれるさけゝあにまさらめや）

あにたと　ナ。兄弟。あにとおととをいふ。古事記

あにたとと　ナ。兄弟。あにおとゝおなじ。仁賢紀

あにくさ　ナ。丹参。くさのな。さだかならず。康本

あにこ　ナ。兄。あにをよぶことは。またあにゝおなじ。

あにず　ナ。季兄。あになり。すゑのあにをいふ。大鏡六（いまひとりの男をそのおなじみかどの母。きさいの御あにずゑまてつかさおくれたりけり）

あによめ　ナ。嫂。あにのよめ。あにのつま。古節

あぬらす　ワ。イ。四。足漬。あしをぬらすをいふ。万十（あぬらしこしを）同十（あまのがをあぬらしわたり）

あね　ナ。姉。われよりさきゝうまれたる。ちからのめのこ。またひとをまたしみてよぶことは。和名

あねご　ナ。姉。女。あねなどよぶことば。また あねゝ おなじ。
また なんなど また しみて よぶことば。熱田縁起（あゆち
がた ひかみ あねご と われ こんと）

あねむと　ナ。姉聟。あねのむと。あねのをうと。

あの　次。彼。とほくを なれたる かたの ものを ゆびさ
していふことば。あといふかへことばの二のくらゐゝ
なるものなり。竹取（あのかき おきし ふみを よみて）源
氏（あの 女御の 御方 ゝも おほく まゐる）

あのごと　ソ。如案。おもひしごとく。源 螢（おかしかりつ
るを あかず おぼして げゝ あのごと 御心 ゝ ゝみ けり）

あは　ナ。粟。くさのなを たつものなり。きびゝにて。一つ
のくきゝ一つのほいづみを きいろゝて こまやかなり。和名
あは　ナ。淡。うすきを いふ。かろきを いふ。また もろきを
いふ。源 竹川（待つけ 奉りたる かひも なく。あを の御理りや）

あは　次。彼。とほくを なれたる かたの ものを ゆびさし
ていふことば。あといふかへことばゝ ゝを ゝといふてにをは

のつきたるなり。源 明石（あを とみる あを ぢの まゝの
あれ さへ のこる くまなく すめる 夜の月）

あは　ソ。かずの おほく あるを いふ。あまた。おほく。のこ
ころ。さを。ふさ。ゝ おなじ。万二（ふる ゆきを あを さなふ
りそよなはりの あかひの をかの せき ならなくゝ）

あはあは〜　サ。フ。淡。かろくうすきを いふ。また もの
ゝ あぢを ひなきを いふ。また おもひやりなきを いふ。紫
式部日記（いろめかしきをば いと あを あを し と おぼしゆ
いたれば）狩衣二（いと かう あを あを しくゝ とび かふむし
とりの やうゝ ゆきずり の すくせ ある人や あらん）

あはう　ナ。阿房。おろかなる ひと。かしこからぬ ひと。

あはうら〜　サ。フ。阿房。おろかめきて みゆるを いふ。

あはたこ〜　ナ。粟柜枚。くわしの な。あを の おこしこめ。

あはがら　ナ。梳蘭魚。うをの な。さだかならず。和名

あはがら　ナ。粟殼。あを の から。あを の くき。神代紀

あはぎ　ナ。檍。きの な。さだかならず。古事記 神代紀

あはく　ワ。ヒ。日。暉。うゝ のつかれて あへぐを いふ。字鏡

あはく　ワ。ヒ。シ。荒。すさまじく あれたるを いふ。と
りしきりなく あるを いふ。盛衰記（うち とけ あを けたら
んと ところへ すらりと わたりてこそ 献をば 謡すれ）遊仙窟
また 麿 義経抄（荒涼を よめり）

あはく　ワ。ヒ。日。疫。ものを うがちいたすを いふ。また
きりきざむを いふ。紙紙四（ほり あはかる）醍醐寺（塚を
あはく）諸国七（御なぬきて あしを あはくゝ かつらみ
なきられて のきゝ けり）類名（計字を よめり）

あはくさ　ナ。粟麻。くさのな。かたちほぼづきゝにて。み
こあを のつぶの ごとき くさなり とぞ。字鏡

あはゝ〜　サ。ヒ。淡。うすきを いふ。かろきを いふ。また も
ろきを いふ。深密（すこし あを きかたゝ より 見るを 心
とどむる たより もなきものを と）狭衣（深字を よめり）

あはゝす　ワ。ヒ。合。あふやうゝ するを いふ。古事記（
いざたら あを さん と あとらへ たまふ）十訓（ふゝ ふき

をも その音を ふき あを す ひと なかりけり）落窪二（の
ちゝも おもひ あを さん）

あはせ　ナ。袷衣。ころも なり。おもて と うら と を あを せ
縫へる ころも。宗鑑（袷衣を あを せ の ころも と よめり）

あはせ　ナ。楽肉。くひもの。いひゝ を そへて くふべきもの。
また くひもの の かたへ ゝ そへ たる くひもの。枕草二（次
ゝ あを せ を みな くひ つれば。おもの を ふ ようなり）

あはせいと　ナ。綜糸。より あを せ たる いと。堀川百首（水
引の あを せ の いと の一筋 ゝ わけず よ 君を 思ふ 心を）

あはせかがみ　ナ。合鏡。ふたつの かがみ を てらし あを せ
てみるを いふ。わが うしろかげを みる ため ゝ を る わざ。

あはせぎぬ　ナ。袷衣。ころも なり。あを せ ゝ おなじ。

あはせたきもの　ナ。煉香。たきもの。くさぐさの たきものを
ねり あを せて。つくれる もの。空穂 吹上（みや より たねゝ
つが 女君 あを せたきものを 山の かた ゝ つくりて）

あはせど　ナ。砥。いしなり。かたなの たぐひ を とぐ と い

し。またといしのおもてをたひらかにするいし。永正何　甘合　和

あはせのそめ　ナ。袷衣。ころもなり。あをせにおなじ。名　和

あはせのころも　ナ。袷衣。ころもなり。あをせにおなじ。字鏡

あはせもり　ナ。合盛。うをかひなどくさとさのくひものを。つみあをせてひとつにもるをいふ。四時祭式

あはそか　ソ。淡。あをあをしきをいふ。あさそかなるをいふ。大鏡八（あをそかにまうすべきにもたらず）

あはた　ナ。頬。あをたこにおなじ。和　名

あはた　ナ。痘瘡。かほにつけるものがさのあと。

あはたこ　ナ。頬。ひざのほね。ひざのかをら。和　名

あはたす　ワ。イ。四。このことばのこころさだかならず。あをたすとおなじこころにもきこゆることなり。祝詞式（みあたしたまひつとまをしたまひて）

あはたつ　ワ。ヒ。四。蔵。たたへにあをのつぶのごときけものにおびゆるときいでくるものなり。字鏡　集

あはたつ　ワ。ヒ。四。くものかさなりたつをいふ。くものやうやうにかさなるをいふ。古今（うきめをはよそめとのみぞのがれゆく雲のあをたつ山のふもとに）

あはつ　ワ。ヒ。三。惶急。あわつにおなじ。このかな。類名

あをたつとあれども。字鏡にあわつとかけり。

あはつか　ソ。淡。あをそかにおなじ。堀川院書合（あをつかにそはそはしきかいまみをならはぬ身まて）

あはつけ〜　サ。ヒ。淡。あをあをしにおなじ。源胡蝶（ゆくりかにあをつけきこととおぼしまどるれば）

あはつけびと　ナ。あをあをしきひと。源夕霧（ただありのあをつけびとだにねざめまぬべき空のけしきを）

あはね〜　サ。ヒ。荷。あまねしにおなじ。類　名

あはねはす　ワ。イ。四。辨髏。あまねをすにおなじ。類　名　和

あはのうるしね　ナ。漆米。あをなり。ねばりなきあを。和　名

あはのもち　ナ。漆。あをなり。ねばりあるあを。本　和

あはのよね　ナ。青粱。あをなり。あをはみたるあを。本　和

あはばた　ナ。粟畑。をたなり。あををうゑたるをた。七一職人歌合（ひとりねのかずもおられぬあをばたのうちわするべきときのまもなし）

あはひ　ナ。間。ものとものとのなか。またまじをりにおなじ。伊勢（伊勢尾張のあをひのうみづらをゆくに）源蜻蛉（あらまほしき御あをひどもにはなん）

あはび　ナ。蚫。かひのな。かひのかたちかたひらにて。ひらたし。からのをしにちぶさのごときかたちのもの。十はかりならびつきてあなあきたり。みのいろのあをきも。なにて。あかはみたるもめなりとぞ。和　名

あはびしらたま　ナ。蚫玉。たまなり。あをびのなかよりいづるたま。武烈紀（あがほるたまのあをびしらたま）

あはびだま　ナ。蚫玉。たまなり。あをびしらたまにおなじ。万十八（あきつしまいゆきわたりてかづくてふあをびだまもがつつみてやらん）

あはふ　ナ。粟畑。あをのもえたるところ。古事記

あはふ　ワ。イ。四。おひくるものをささへて。おそるるものをたすくるをいふ。おほひかくしてたすくるをいふ。撰集抄（むらがれるとらのあひてくひたてまつらんとにけるに三云錫杖にてあはへりければ）

あはむ　ワ。イ。三。疎。うとみにくむをいふ。源空蟬（なさけなかりけりとあをめたまひて）同帚木（いをんかたなしと式部をあをめにくみたまひて）

あはめし　ナ。粟飯。あをとこめとをまぜて。にたるめし。

あはもち　ナ。粟餅。もちあををもてつけるもちひ。

あはもり　ナ。粟盛。さけなり。あをよりとれるせうちう。

あはや　テ。ナ。こゑなり。おどろきあやぶむこゑ。平家三（あをや。法皇のながされたまふそやとて。ところなきあやしのさづのめにいたるまで）

あばら　ナ。脇。をらのよこ。わきばらにおなじ。

あばら　ナ。亭。いへなり。たびびとなどのいこふかりや。和　名

あばら　ナ。荒。いへなどのあれをてたるをいふ。伊勢（あ

はらなるくらのありけるを女なは奥をおしいれて）

あはらほね　ナ。助性。かたたらほねをおなし。

あはらや　ナ。荒風。あはれたるいへ。夫木（峰渡る風なか〻りせはあはらやの紅をこのさをたれかふかまし）

あはらや　ナ。孚。いへ。たびびとなどのいこふかりや。和名

あはる　ワ。ヒ。三。荒。あれもつるをいふ。空穂俊陸（くさのおひたちていへのあはるるままを）堤中納言物語（あはれたるいへをたづひとりながめて）

あはれ　ナ。怜。ものごとのこころをみておぼゆるをいふ。源氏（君もさもあれをかなせ人されずわが身をまもる秋の夕風）金葉（あれを添るさをしかの聲）

あはれ　ソ。怜。ものごとのこころをみておぼゆるをいふ。大和（かくて心のへだてもなくあれなれはいとあれと）拾玉集（あれをくもる旅の空かな）

あはれ　テ。ナ。怜。感なり。ものごとのこころをみておぼゆるときをいづるこえ。催馬樂（あれそよしやけふのたふとさ）新古（憐れいづれの日までなげかん）

あはれがる　ワ。イ。ヒ。四。怜。あれをおもふをいふ。大和（男ももとの女もいとあれがりなきけり）

あはれ〜　サ。ン。怜。あれをみゆるをいふ。堀川次郎（あれしや燒野をもれしみぬのわのむらぎさがくれきぎすなくなり）後三年記（あれしくもたべるかな）

あはれぶ　ワ。イ。ヒ。怜。あれむをおなじ。金葉（あれはんとおもふ心をひろけれどをくむそでのせばくもあるかな）發心集三（みなおどろきあれぶ）

あはれぶ　ワ。イ。ヒ。怜。あれむをおなし。加茂保憲女集（ひかりをあれびんとおもへど）大鏡八（おのれらまでもめぐみあれびられてたべる）

あはれむ　ワ。イ。ヒ。怜。あれをこころをまむるをいふ。またあれをおもふをいふ。源若菜（女を春を憐むとふるき人のいひおき侍りけるげさなん侍りける）

あひ　ナ。株壑。あひづちをするをいふ。和名

あひ　ナ。同。あそひをおなし。夫木一（紫山のそがひのみちのたにあひを夏とてかぜのふかぬまもなし）

あひ　テ。ツ。相。たがひをし。ともをすることをつけていふことは。万九（古のますら男のあひきそひつまどひ出けん）説嗣式（あひまじりあひくちあふことなく）

あひあふ　ソ。ヒ。四。相合。たがひをあふをいふ。またにつかもしくあるをいふ。源東屋（あさましくあひあひたる世の人のありさまを云々くちいれじとおもふ）

あひたひ　ナ。相道。たがひをおひゆくをいふ。たがひをおひみおもれみするをいふ。古今序（たかさごすみのえのまつもあひおひのやうをおぼえ）

あひたもふ　ワ。イ。ヒ。相思。たがひをおもふをいふ。靖蛉

あひかがらふ　ワ。ヒ。四。相語。たがひをかがらふをいふ。万九（わたつみの神のをとめをたまさかをいこぎむかひて。あひかがらひことなりしかは）

あひかたらふ　ワ。ヒ。四。相語。たがひをかたらふをいふ。調花（をんなをあひかたらひけるころ云々）

あひがも　ナ。とりのな。あきさをおなし。

あひき　ナ。網引。漁子。すなどりをするをあみをひきてするをいふ。またすなどりをするひと。職員令

あひきそふ　ワ。ヒ。四。相競。たがひをきそふをいふ。万九（古のますら男のあひきそひつまどひ出けん）

あひく　ワ。ヒ。四。網引。すなどりをするをあみをひきてするをいふ。神樂歌（あさくらや。おのみなとをあひきなれはたまのめざしをあひきあひをけり）

あひくぎ　ナ。合釘。くぎなり。あひをつぐをもちふるくぎ。

あひくち　ナ。鼠壁。やまひ。くちのひとつのやまひ。和名

あひくち　ナ。短刀。かたな。つはなきみじかきかたな。

あひくち　ナ。なかよきひと。こころのよくあへるともだち。

あひくちあふ　ワ。ヒ。四。ともをひとつこころをなるをいふ。祝詞式（相まじこり。あひくちあふことなく）

あひくちあふ　ワ。イ。ヒ。三。ともをひとつこころをするを

いふ。祝詞式（あひくちあへたまふことなく）

あひごと ナ。交接。をとこをんなのともねをするをいふ。伊勢（夜ひと夜さけのみまければもたらあひごともえせであけは尼張の國へたちなんとすれば）

あひさかゆ ワ。ヒ。シ。相榮。たがひにさかゆるをいふ。万九十（天地とあひさかえんと大宮を仕へ奉れば）

あひしらふ ワ。ヒ。四。應接。もののあひてになるをいふ。源若紫（ことずくなにいひてをさをさあひしらはず）狭衣二（いたくもあひしらひたまへれば）

あひしる ワ。ヒ。四。相知。たがひにまりあへるをいふ。道濟集（あひまりたるひとのむさしにくたるに）

あひすむ ワ。ヒ。四。相住。をとこをんなのひとつところにすむをいふ。後拾雜（をはなりけるひとのあひすみけるかたより）源玉葛（あひすみもまのびやかに）

あひそふ ワ。ヒ。四。相副。たがひにそふをいふ。

あひそふ ワ。イヒ。シ。ものをそふるをいふ。古今（たちちねの親の守と相そふる心はかりをせきなとどめそ）

あひだ ナ。間。かれとこれとのなかのところ。またそのわざのたえたるほど。またそのことのあるとき。空穗上樓（一生のあひだ歌なもよみ給ふ）万十（あひだあけつつぬける緒もくくりよすれはのちあふものを）古事記（えびかづらのみなりき。こをひりひたむあひだに）

あひたい ナ。相對。ふたりにてするをいふ。ふたりにてたかりて。そのあひだにひとをおかぬをいふ。

あひだがら ナ。親族。おなじちすぢ。まぞくにおなじ。

あひたたかふ ワ。ヒ。四。合戰。たがひにたたかふをいふ。

あひだな〜 サ。ヒ。無間。たえまなきをいふ。万四（間なくこふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にしみゆる）

あひたのむ ワ。ヒ。四。相恃。たがひにたのむをいふ。

あひづ ナ。相圖。まらせをいふ。またのろしにおなじ。下學集

あひつくり ナ。客作兒。まわざのたすけをするひと。てつたひをするひと。類聚國史百（客作兒をよめり）

あひづち ナ。相槌。たがひにうちあむするつち。ふたつのつちをもてたがひにうつをいふ。またものがたりのてうしをあむするをいふ。東北院職人歌合（つきにねぬ宿とや人の思ふらんいつもたえせぬあひづちのおと）

あひて ナ。相手。むかひゐてともにそのわざをするひと。大平二十（雜退し給をず番のあひてにたちあひて）

あひどの ナ。相殿。ひとつのかみをまつれるやしろのとのうちにほかのかみをそへてまつるをいふ。神名式

あひどふ ワ。イヒ。四。相問。たがひにとふをいふ。万十（事繁く相とはざるに梅の花雪にまがへて折りてしをれん）

あひどぶらふ ワ。イヒ。四。相訪。たがひにとぶらふをいふ。

あひともなふ ワ。イヒ。四。相伴。たがひにともなふをいふ。

あひなめまつり ナ。相嘗祭。あひむべのまつりにおなじ。

あひなる ワ。ヒ。シ。相馴。たがひになるるをいふ。伊勢（としごろあひなれたる女やうやうとをなれて）

あひぬ ワ。ヒ。シ。逢寢。つまにあひてともねをするをいふ。万三（たまあをはあひねむものをやまたの）

あひのしゆく ナ。問宿。うまやぢのあひだのひとざと。

あひのむ ワ。イヒ。四。逢飲。ひとにあひてさけをのむをいふ。万六（歸らん日あひのまむきそこの豐御酒を）

あひのり ナ。相乘。くるまなどにともにのるをいふ。

あひのる ワ。ヒ。四。相乘。くるまなどにともにのるをいふ。源蜻（人とあひのりて簾をだにあげ給をぬを）

あひはなる ワ。ヒ。シ。相離。たがひにはなるるをいふ。伊勢（男も女もあひはなれぬ宮仕になん出にける）

あひび ナ。相火。ひをいまざるをいふ。ひとつかまどのひとつひをもて。にたきせしものをのみくひするわざ。

あひびき ナ。相退。たがひにひきまりぞくをいふ。太平十二（三百餘騎あひびきに左右へさつとひく）

あひぼれ ナ。相戀。たがひにこひまたふをいふ。

あひまくら ワ。イヒ。四。逢枕。あひぬにおなじ。万七（こもまくらあひまきしこもあらばこそ）

あひまじとる ワ。ヒ。ロ。相雜。たがひゝまじこるをいふ。

あひみる ワ。イ。カ。相見。たがひゝみるをいふ。万葉

あひむかふ ワ。イ。ロ。相對。たがひゝむかふをいふ。唐物語（幼ゝあひむかひてさはしを音ゝ出し給をず）

あひむく ワ。イ。ロ。相向。たがひゝむくをいふ。古事記（あひむきたたしてことどをわたすときゝ）

あひむと ナ。姪。つまのあねのむと。つまのいもうとのむこ。あねいもうとのむこのたがひゝよぶことば。落窪（いときよげなるあひむことりたゝひてけるかなあなたたし ひとのみきかんも）和名（姪字をよめり）

あひむべのまつり ナ。相嘗祭。まつりのな。神名式ゝ相嘗とかけるやしろやしろゝまもつきはかりゝ神祇官より みてぐらをたてまつらるるまつり。神祇令。公事根源

あひやけ ナ。相見。めのおやをうとのおやをうとことなるひとのたがひゝよぶことば。東森記（なりまさ あひやけ神保安藝守）東鑑（相見をよめり）

あひやど ナ。相宿。ともゝひとつやどりゝやどるをいふ。

あひやどり ナ。相宿。ともゝひとつやどりゝやどるをいふ。後撰雜（わがやどゝあひやどりまてすむかちつ）

あひよばふ ワ。ヒ。ロ。相聘。たがひゝよばふをいふ。万九（ちぬをとこうなひをとこのふせやたきすすし きほひてあひよばひまける ときゝ）

あひよめ ナ。姻。をうとのあにのよめ。をうとのおとゝとのよめ。あにをととのよめのたがひゝよぶことば。和名

あひる ナ。鶩。とりのな。みづとりなり。かたちかもゝにてはなきく。あしゝひろきみづかきあり。

あひわたる ワ。ヒ。ロ。あひあひてとしつきをわたるをいふ。大和（ひとゝまのびてあひわたりけるを）

あひゑむ ワ。ヒ。ロ。たがひゝゑむをいふ。万廿（むつきたつ春のはじめゝかく志つつあひしゑみてば）

あふ ワ。ヒ。ロ。合。かれとこれとのひとつゝむかひよるをいふ。またまじるをいふ。枕草七（水の流るるお

と笛の音などのあひたる）万廿（とねがとの かをせもまらすたたわたりなみゝあふのすあへる君かも）後三年記（みちの國へくだりし時たびのかりやの内ゝてかの女ゝあひけり）源語合（竹取の翁ゝうつぼのとしかげをあをせて）寶物集（このうたおもひあをせられていとあをれゝかなしかりき）

あふ ワ。イ。ヒ。合。かれとこれとをひとつゝむかひよらするをいふ。またまじふるをいふ。仁德紀（ことゝのまらうどなみかごゝあふ）

あふ ワ。ヒ。ヒ。政。ことゝたふるをいふ。万九（ゆらのさきまほひゝけらしまら神の磯のうらみをあへてこぎとよむ）源浮井（ひとめもえ慳りあふまじくなん）

あふ ワ。ヒ。ヒ。繰。くひものをとのへゝ。かれとこれとのものをまじふるをいふ。今昔三（物をすしあゆゝをこあへたりけれ）後撰（鹽といへはなくてもからきよのなかゝいかにあへさるたたみなるらん）

あふ ワ。ヒ。ヒ。鍛。くひものをもてもてなすをいふ。

あぶ ナ。虻。むしのな。かたちをゝまにておほきく。つねはうしうまのまりをゝあつまり。とゝすれはひとをもさす。このむしたぐひきこめておほし。和名

あぶ ワ。イ。カ。浴。みづをかぶるをいふ。またゆみづをもてをたへをあらふをいふ。枕草二（ねおきてあぶる湯もまらたたしうさへこそおぼゆれ）

あふぎ ナ。扇。うちふりてかぜをとるものだけのほねゝかみをなりてをりたたむやうゝまたるものゝて。かたちかたほりのつはさのごとし。和名（扇字をよめり）

あふぎのかぜ 永久四年百首（てなれけるぬしもまらねどむらさきのあふぎのかぜのなつかしきかな）

あふぎのかなめ 平家十（弓強かりけれはうら響く程ゝなり渡りて扇のかなめより上一すゝかりを射て）

あふぎのつま 散木中（あふぎのつまゝかきけり）

あふぎのてかぜ 壺慶集（あかねさす あをみなづきの日を

いたみあふぎのてかぜぬるくもあるかな)

あふぎあはせ ナ。扇合。たもとれあそびなり。あふぎまき。いかなどをかき。それをとりあはせてかちまけをさだむるわざ。金葉(太皇太后の扇合ヨ月の心をよめる)

あふぎかけ ナ。扇掛。あふぎをもたせかくるもの。

あふぎがみ ナ。扇紙。あふぎヨもるれうのかみ。千載雜(三條の女御遅世の後あふぎがみヨ月いたして)

あふぎばこ ナ。扇箱。ものなり。あふぎをいるるもの。

あふぎびやう〜 ナ。扇拍子。あふぎをうちならしてとる ひやう〜。空穂藏開(彼あふぎびやうしをとて)

あふぐ ク。イ。四。仰。かみのかたヨむくをいふ。うへのものをみるをいふ。またうやまふをいふ。寵愛抄一(あふぎて山の峰をみれば)古今序(いにしへをあふぎて今をこひざらめかも)今昔三(おきゐてあふぎみる)根古序(あさゆふヨあふぎたふとびたてまつる)

あふぐ ソ。イ。四。扇。あふぎをつかふをいふ。中務集(とよなくもけふを涼しき秋ゆゑあふぐ風さへ秋ヨなりつつ)源東屋(めのとうちあふぎなどまて)狹衣二(火をあふぎけちて陸子どちまでよりたまへば)

あふぐ ソ。ヒ。四。掉。きざしのたちのぼるをいふ。神代紀

あふこ ナ。枕。ものをになふつゑ。和名

あふご ナ。逢期。ひとヨあふとき。またひとヨあをんとちぎりたるとき。伊勢(などてかくあふごかたみヨなりヨけんみづもらさじとむすびしものを)

あふさきるさ ソ。ゆきかへり。あれこれ。またをするもかくするも。古今(そへヨとてとすれはかかりかくすれはあないひもらずあふさきるさヨ)

あふさふ ソ。イ。四。たぶらかすをいふ。とりのこすをいふ。万九十(よもの人をもあふさふずめぐみたまへば)

あふさわ ソ。まふるをいふ。あながちなるをいふ。万八(さをしかのたきヨぬきおけるつゆのまらたまあふさわヨたれのひとかもてヨまかんちふ)

あふじやう ナ。壓狀。まひてかかするかきもの。盛衰三(思ふ樣の文をかかせんと仕るなは名案壓狀と申す)

あふす ソ。イ。四。遣。たぶらかすをいふ。とりのこすをいふ。源玉葛(おとしあふさす)類名(遣字をよめり)

あふす ソ。イ。シ。令沿。みづをかぶらするをいふ。公事根源(天龍下て水をそそぎて驛尊ヨあふせ奉り)

あふち ナ。楝。きのな。はもなんてんヨにて。のこはのごときぎあり。あつのころ。うすむらさきある五ひらのもな。あつまりさく。和名(楝字をよめり)

あふちばら ナ。楝林。あふちのあまたもえたるところ。嘉祿四年百首(たちやどるみちのあたりのあふちばら日かげもうすしせみのもごろも)

あふとく ソ。ヒ。カ。蹐跨。またがりくるをいふ。またあつどこゆヨおなじ。字鏡(蹐跨をよめり)

あふなー サ。ヒ。危。あやふしヨおなじ。無名抄下(勝負きかざりしほどもあふなー)砂石集三(あふなかりけるいのちかな)清開九(あふなくもおもするものかな)

あふぬく ソ。ヒ。四。仰。うへのかたヨむくをいふ。うへのものをみるをいふ。十訓四(わらはべの云々一つふして三つあふぬきけるを月よといふなり)

あふのく ソ。ヒ。四。仰。あふぬくヨおなじ。宇治三(あふのきヨねあがらよく引て射たり)曾我物語一(あふのきざまヨうちたふす)承久軍物語二(底もみえざる所へ馬のまり足蹈をづしあふのきヨたふれけり)

あふひ ナ。葵。くさのな。たかさ三四まやくはヨ五つのとがりありて。めぐりヨのこはのごときぎあり。をなもまろくてすこしきはみ。またむらさきはめり。和名

あふひ ナ。向日草。くさのな。からあふひヨおなじ。

あふひ ナ。兩葉草。くさなり。かものまつりのひヨ。かつらヨかけ。あるをみすなどヨかくるものまて。ひきのひたひぐさといふくさのふたはのときのななり。空穗樓上(四月まつりの日ヨあふひかつらいといつくしう)

枕草四（あふひいとおかし。まつりのなり。神代よりして。かざしとなりけん いみじうめでたし）

あふひ ナ。鯉。かひのな。あそびヨおなじ。大草相傳四季物語

あふひかつら ナ。あふひをかけたるかつら。

あふひぐさ ナ。雨葉草。くさのな。ふたばぐさヨおなじ。夫木七（あふひぐさとるやみかげのやまぶきはつきのかつらもことヨみえたり）

あふひつば ナ。葵鐔。つばなり。あふひのはなのかたちヨつくれるかたなのつば。夫木二十（かつたまはたさすさやぐちヨあふひつばころありけるかなづくりかな）

あふひまつり ナ。葵祭。かもといふやしろのまつり。

あふへい ナ。押柄。いかめしくたかぶるをいふ。

あぶみ ナ。鐙。うまヨのるときあしをかくるもの。和名

あぶみがしら ナ。鐙頭。あたまのうしろのさしいでたるをいふ。うしろあたまのおほきなるをいふ。宇拾十（頭のあぶみがしらなりけれは縁もせなかヨもつかず）

あぶみすり ナ。承鐙肉。うまのわきばら。和名

あふむく ワ。ヒ。ト。四。仰。あふぬくヨおなじ。

あぶら ナ。油。ねばくなめらかなるやにまる。和名

あぶらあげ ナ。あぶらをもてにたるもの。

あぶらいひ ナ。油飯。くひものなり。あさのみのあぶらをませてかしきたるいひ。和名（油飯をよめり）

あぶらがみ ナ。油紙。あぶらをぬりたるかみ。

あぶらがめ ナ。油瓶。あぶらをいるるかめ。和名

あぶらきぬ ナ。油絹。あぶらをぬりたるきぬ。類聚雑要

あぶらげ ナ。あぶらあげヨおなじ。

あぶらこ〜 サ。ヒ。油濃。あぶらのこきをいふ。あぶらづきたるをいふ。醫心方（賦字をよめり）

あぶらざら ナ。燈盞。あぶらつきヨおなじ。

あぶらじり ナ。膵。とりのきりをのきしぶら。和名

あぶらつき ナ。燈盞。あぶらをもりて。ひをともすさら。太平五（山鳩一つがひとび來てきんぞやうとうのあぶ

らつきのなかヨとびいりて）和名（燈盞をよめり）

あぶらづく ワ。ヒ。ト。四。賦。またヘヨあぶらのあるをいふ。またこえてつややかなるをいふ。徒然草（手足肌など清らかヨこえあぶらづき）醫心方（賦字をよめり）

あぶらで ナ。あぶらづきたるて。あぶらのつきたるて。

あぶらび ナ。燈火。ともしびヨおなじ。万八十（油火の光りヨみゆるわかかづらさゆりの花のゑまたしきかも）

あぶらみ ナ。脂肉。うをなどのみのあぶらのあるところ。

あぶらむし ナ。油虫。むしのな。ありまきヨおなじ。

あぶらもち ナ。油持。くるまのくるるヨさすれらのあぶらをもつともびと。うへびとのともびとなり。

あぶらもり ナ。油守。つかさびとなり。ともしびのことをつかさどるによりてなり。中務式

あぶらわた ナ。脂綿。かみのけをうるほすあぶら。和名

あぶらゑ ナ。油繪。ゑなり。あぶらをもてゑのぐをときてかけるゑ。またごふんをぬりてかけるゑ。油糟

あふり ナ。陸泥。うまのわきばらをおほふもの。和名

あぶりころす ワ。イ。ヒ。四。焚殺。ひヨあぶりてころすをいふ。宇拾十（あぶり殺さんずるぞとて火を山の如く）

あぶりど ナ。源戸。となり。うすきいたのと。ゆらゆらとゆらめくと。神樂歌（あふりどや。ひたりど）

あぶりほす ワ。イ。ヒ。四。焙乾。あぶりかわかすをいふ。万九（あぶりほすひともあれやもぬれぎぬを）

あぶりもの ナ。炙。うをなどをあぶりやきたるもの。和名

あぶりやうし ナ。押領使。つかさのな。くはしくはところどころのわろものをおさむるためヨおかれしつかさ。またくにぐにのいくさびとをめさるるときそのいくさびとをひきゐてまゐるひとをいふ。朝野群載和訓栞

あぶりやく ワ。イ。ヒ。四。炙。くひものをひヨあぶりてとのふるをいふ。沙石集十（火をもてあぶりやく時）

あぶる ワ。イ。ヒ。四。あぶみをふみゆらかしてうまのあしをさやむるをいふ。朝恒集（おそきうまもあしぶちなに

らであふれぞるところのみこそさきはたちけれ)

あふる ワ。ヒ。ヨ。淫。もののあまりいづるをいふ。字集鏡

あぶる ワ。イ。ヨ。焙。ひをもてかわかすをいふ。ものゝひのきざしをとほすをいふ。紫式部日記(この、ぬれたるあぶるこそおもふやうなることちすれ)

あぶる ワ。ヒ。ヨ。乖落。みのおちぶるるをいふ。源橘姫(ゆくすゑとほき人をおちあぶれてさすらへん)

あぶれもの ナ。流浪。よるべなくさすらふひと。またわろものゝおなじ。狭衣四(今をさやうなるあぶれものいでくまじげなる世ゝこそとうちささめくありけり)

あへ ナ。蜃。くひものをもてひとをもてなすわざ。古事記雄略紀

あべ ナ。疫疾。かほゝつけるもがさのあと。

あへぐ ワ。ヒ。ヨ。喘息。つかれていきのたげしくいづるをいふ。万三(あぎつつわがこぎゆけはまらをのたゆひが浦ゝ)枕草五(おいたるもののたちたかくてあへぎありく)類名(喘息をよめり)

あへしらふ ワ。ヒ。ヨ。應答。もてなすをいふ。またあひしらふゝおなじ。續世繼二(法文ゝあたせつつそれもあへしらひまをしけり)遊山類(應答をよめり)

あへたちばな ナ。橙。くだものゝな。ゆゝにて。かをあつ〳〵。にほひかうばしくて。あぢはひすく〳〵。またにがし。万十(吾妹子ゝあたずひさしもうましものあへたちばなのこけむすまでゝ)和名(橙字をよめり)

あへつき ナ。盥杯。つきなり。あへものをもるつき。四時祭式

あへづくり ナ。膾。にくをまぜたるあへもの。和名

あへなゝ サ。ヒ。たのみなきをいふ。たかなきをいふ。源竹川(あへなくうせにしかは)水鏡上(肩うせたまひぬる由まをししこそいとあへなくたべりしか)

あへぬく ワ。イ。ヨ。とりまぜてぬくをいふ。万八(時鳥いたくなきそ汝が聲を五月の玉ゝあへぬく迄ゝ)

あへん ナ。鴉片。けしのやに。ぞくやくゝもちふ。

あへもの ナ。盥。くひものなり。ひるのたくひをすゝまぜてあへたるもの。和名(盥字をよめり)

あほこ ナ。朽ものをにゝなふつゝ。あふこゝおなじ。字鏡

あほひ ナ。疣。くさのな。あふひゝおなじ。字鏡

あま ナ。天。おほぞらなり。あめゝおなじ。万五(ひさかたのあまのみそらゆあまがけりみわたしたまひ)

あま ナ。白水郎。すなどりをもてなりたひとするひと。古事記(ちびつくあまよ)和名(白水郎をよめり)

あまのさへづり あまのこなどのなまりたるものいひ。源松風(にもかなる御あるゝ志さわぎてうかひぞるめりしたるゝあまのさへづりおぼしいでらる)

あまのすてぐさ あまのこなどのたまぞゝすてたるもくづ。拾竹集(わがこひをあまのすてぐさいたづらゝくちまさりゆくたてをみせはや)

あまのすてぶね あまのこなどののりすてたるふね。光明峰寺家歌合(いかなりしかぜのまるべのなみのまゝおもたぬかたのあまのすてぶね)

あまのつりなは あまのこなどのつりをするなは。古今(いせのうみのあまのつりなはうちはへてくるしとのみやおもひわたらむ)

あまのつりぶね あまのこなどのつりをするふね。万七十(いそごとゝあまのつりぶねたてにけりわがふねをてんいそのまらなく)

あまのどまや あまのこなどのすめるとまや。後撰雜(もゝのおもふとゆきてもみねはたかかたのあまのとまやたくちやまぬらむ)

あま ナ。尼。のりのし。ほとけゝつかふるをんななり。また たかみをそりたるをんな。釋日本紀(あまを梵語也)

あま ナ。かまぞのうへのけぶりのかかるところ。糟源抄六(あまといふものゝさしあげてありけれはすすはみたりけれども いささか不損なり)

あま ナ。甘。あぢはひなり。なめらかなるあぢはひ。あめまたさたうのあぢはひ。醫心方(甘字をよめり)

あまうけばな ナ。祝。むなのあふのけるをいふ。以字

あまうへ ナ。尼上。あまなうやまひてよぶことば。源若菜（あまうへさもてなれたりし御けしきの）

あまうり ナ。甘瓜。うりなり。あぢもひよきうり。江次第

あまえいた〜 サ。ヒ。あまゆることのもなもたしきをいふ。蜻蛉中（今もあまえいたくてまかり歸らんことも）

あまおほひ ナ。雨覆。ものゝおほひてあめをふせぐもの。

あまがける ワ。ヒ。四。天翔。そらをかけるをいふ。祝詞式（あまがけりくにがけりて）万五（ひさかたのあまのみそらゆあまがけりみわたしたまひ）

あまがさ ナ。雨傘。かさなり。あめふりゝさすかさ。齋宮式

あまかす ナ。甜糟。さけのかす。あまきさけのかす。和名

あまかぜ ナ。雨風。あめをもよほすかぜ。源藤裏葉（心あわたたしきあまかぜゝ皆散々ゝきほひ歸り給ひぬ）

あまかつ ナ。天見。ひとがたなり。もののわざをひをうつすひとがたゝて。まじなひゝもちふるもの。菜花もと集

（あまがつなどのものいひうぢくともも）

あまかは ナ。このみなどのもたゝつきたるうすかた。

あまがは ナ。雨皮。ものゝおほひてあめをふせぐもの。蜻蛉下（あまがたたりたる車）齋院式（雨皮をよめり）

あまがへる ナ。蛙。むしのな。ひとつのかへるなり。かたちつねのよりもちひさくていろもうすみどりなり。またもひいろなるもあり。つねゝきのえだゝすみてあめをもよほせばなく。蜻蛉中（山籠の後をあまがへるといふなをつけられたり）和名（蛙黽をよめり）

あまがほ ナ。すがほなり。よそほひせぬかほ。無名抄下（けさうもたるひとのなかゝあまがほまてまじれる）

あまき ナ。甘草。くさのな。はをふちのもゝにて。くきもはゝもけあり。もなもまめのもなゝにて。うすむらさきなり。ねもきいろゝてあぢもひきめてあまし。つねゝくすりゝもちふるものなり。和名

あまきぬ ナ。雨衣。ころもなり。あめふりゝきるころも。和名

あまぎらす ワ。ヒ。四。くもきりのかきくれてそらのくもるをいふ。万八（あまぎらし雪もふらぬか）

あまぎらふ ワ。ヒ。四。あまぎるゝおなじ。万六（あまぎらふもとれをいたみさにつらふもみぢちりつつ）

あまぎり ナ。雨霧。こさめのやうなるきり。万十二（思出る時むすべなみさほ山ゝたつ雨霧のけぬべくおもほゆ）

あまぎりふ ナ。ゆみのやゝもゝはねのな。羽形圖

あまぎる ワ。ヒ。四。あまぎらすゝおなじ。古今（梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば）

あまぎるかせ 拾遺（ふきみだるゆきのくもまをゆくつきのあまぎるかぜゝひかりそへつつ）

あまぎるくも 續後 巻（さくらはなうつろふやまのたかねより あまぎるくもゝにほふさるかぜ）

あまぎるつき 新勅 巻（梅が香もあまぎるつきゝまがへつつそれとも見えずかすむころかな）

あまぎるなみ 新勅 冬（わたのむらやそしまさろくふるゆきのあまぎるなみゝまがふつりぶね）

あまぎるはな 風雅（ふきわたるをるのあらしのひとさらひあまぎるはなゝかすむやまもと）

あまぎるほ〜 風雅（みるままゝあまぎるほしぞうきまづひあかつきやみのむらくものそら）

あまぎるゆき 古今（うめのはなそれとも見えずひさかたのあまぎるゆきのなべてふれれば）

あまぐ ナ。雨具。あめをふせぐよろづのだうぐ。

あまくこん ナ。隨。さけなり。あまざけゝおなじ。御湯殿記（まん大すけよりあまくこんまゐる）

あまくさ ナ。甘草。くさのな。あまきゝおなじ。大同類聚方

あまくだす ワ。ヒ。四。天降。あめよりくだすをいふ。祝詞式（あまくだしよさしまつりき）

あまくだりびと ナ。天降人。あめよりくだれるひと。枕草五（いづこなりしあまくだりびとならんと）

あまくだる ワ。ヒ。四。天降。あめよりくだるをいふ。拾遺

（あまぐたるあらひとがみのあひおひをおもへはひさしすみのえのまつ）

あまくちねずみ ナ。鼠。ねずみなり。かたちつねのよりもちひさくて。つちあなのなかにすめり。ときとしてをひとまたをとりけたものなどをもかめどもかまれたるものすこしもいたみをおぼえずとぞ。和名

あまぐも ナ。天霧。雨霧。くもなり。そらのくも。またあめなふらするくも。万七（あまぐもに近く光りてなるかみのみれはかしこしみねは悲しも）新六一（日数へてゆきつもりぬるあまぐものかへりわづらふ五月雨のそら）

あまくもど ナ。醴。さけなり。あまざけにおなじ。御湯殿記（十五日。いよどのよりあまくもじまゐる）

あまぐり ナ。甘栗。くりなり。つきひらめたるくりまて。

たいきやうのつかひ 甘栗使。たいきやうにみかどよりあまぐりをたまふつかひ。枕草五（たいきやうのあまぐりのつかひなどにまゐりたるを）

あまけ ナ。雨氣。あめのふらんとするきざし。夫木十九（こゝちふけはあまけに集ふ浮雲の掘集めても物そ悲き）

あまごせ カ。尼御前。汝。あまうへよなんぢ。のこころ。徒然草上（あまごせなにごとをかくたのたまふ）

あまごうた ナ。天語歌。うたのひとつのすがた。うたのすがにまたことばをそへたるうたなりとぞ。古事記

あまごひ ナ。祈雨。かみにあめをこふをいふ。またあめをこふまつり。新古（社司ども貴船にまゐりてあまごひまもべりけるついでに）天武紀（雩字をよめり）

あまごひのつかひ 祈雨使。あまごひのときのつかひなり。まんぜんそんといふところにてあまごひのまつりをせさせたまふときにゆきむかふくらうどをいふ。月詣集（くらうどにて侍りけるにあまごひのつかひにて雨ふらしてまほうちにまゐりけれは）

あまごひのまつり 祈雨祭。まつりなり。かみにあめをこふ

ためのまつり。臨時祭式

あまごもり ナ。雨籠。あめのふるためにいへにこもりなるをいふ。万八（あまごもりこころいぶせみいでみれはかすがのやまもいろづきにけり）

あまころも ナ。ころもなり。てんにんのきるころも。すなどりびとのきるころも。あまほうしのきるころも。またあまぎぬにおなじ。六帖二（いかはかり久しくもあらぬあまごろも少女がなづるいそほはかりを）同三（すまの浦に玉藻かりほす あまごろも袖みつまほのひる時やなき）源手習（あまごろもかたれる身にやありし世のかたみの袖をかけてまのはん）古今雑（なにをかたまほみちくらしあまごろもたみのの島にたづなきわたる）

あまざうぞく ナ。雨裝束。あまよそひにおなじ。檜垣嵓集（さていそぎたちてあまざうぞくまさして）

あまざかる ワ。ヒ。ヒ。天離。みやこにとほくをなれてゐるをいふ。万四（あまざかるひなのくにゝ）

あまざけ ナ。醴。さけなり。あまきさけ。またひとひとよのあひだにかもせるさけ。陰陽式

あまざはり ナ。あめにささへらるるをいふ。万四（あまざはり常する君を久方のようべの雨にこりにけんかも）

あまざへ ソ。あるがうへにまたさらにくはるをいふ。落窪四（今われにかかりてこそあめれあまざへうきをちの限りこそみせつれ）方丈記（明る年をたちなほるべきかと思ふほどにあまざへえやみうちそひて）

あまざら〜 ナ。雨曝。ものをあめのかかるにまかせておくをいふ。賴政集（うのはなのかきねなりけりさみだれのあまざら〜するぬのとみつるを）

あま〜 サ。ヒ。甘。あぢはひなり。あめのあぢはひをいふ。またものやわらかなるをいひ。うすきをいひ。あまきをいひ。にぶきをいふ。人丸集（あがれあふみなとの水のうまけれはかたへも志ほをあまきなりけり）東北院職人歌合（わが戀をなましがたなのかねあまみ思ひ

きれどもきられざりけり）類異記（甜字をよめり）

あまお〜 ナ。痣肉。あまりのましむらなり。いぼうをの〃めのたぐひをいふ。和名（痣字をよめり）

あまじたく ナ。雨支度。あまよそひまおなト。

あまじたり ナ。雹。のきのあまみづのまたたり。和名

あまじほ ナ。淡塩。あぢむひ。まほのあさきをいふ。内膳式

あまじめり ナ。雨濕。あめふりのときまもののうるほふをいふ。散木上（あめもれぬ さつき来ぬらしたびごろもむつかしきまであまじめりまて）

あましやうど〜 ナ。雨障子。あぶらをぬりたるまやうど〜。

あます ワ。ヒ。四。余餘。あまりものまするをいふ。古事記（三路まつくや玉垣つきあま〜）類政集（天の原あまさゆく月のいたづらま世まを餘さるることちこそすれ）

あまぜ カ。尼御前。汝。あまぜまおなト。盛衰十（尼御前なほ略してあまぜとまをしけり）

あまそぎ ナ。かみのさまなり。ほとけのみちまいれるなんなのかみをかたのあたりまでまはてきりたるをいふ。源藻雲（御ぐしあまそぎのほどまてゆらゆらと）

あまそぎ ナ。やまのさまなり。やまのたかくそびえたるをいふ。八雲御抄（あまそぎ。峰のたかきをいふ）

あまそそぎ ナ。あまだりのそそぎ。梁塵愚案抄（東屋のまやの餘りのあまそそぎ われ立ぬれぬこの戸開かせ）

あまそそる ワ。ヒ。四。やまなどのたかくそらまそびゆるをいふ。万七十（あまそそりたかきたちやま）

あまた ナ。數多。かずのおほきをいふ。源總角（御文をあくるヨごとまあまたかへり奉らせたまふ）同宿木（女のそうぞくどもあまたくだりまきよげなるほそながどももただあるまはたがひ）古今（夜をさむみおくをつまもをたらひつつくさのまくらまあまたたびねぬ）

あまだぶり ナ。天田振。うたのひとつのふ〜。古事記（とらへられてうたひなまく。あまだむかるのをとめ云々この三の歌をあまだぶりなり）

あまたらす ワ。ヒ。四。もののみちたらひたるをいふ。万二（おほきみの御いのちをながくあまたらしたり）

あまたり ナ。雹。あまじたりまおなト。

あまたれ ナ。雹。あまじたりまおなト。

あまぢ ナ。天路。くものぼるみち。またあめまおなト。万五（ひさかたのあまぢをとほしなほなほまいへまか〃へりてなりをまささね）

あまついはさか ナ。天磐境。かみをまつるところ。またさ〃かひをまうけてかみをまつるところ。神代紀

あまつかぜ ナ。天風。そらをふくかぜ。古今雜（あまつ風雲のかよひぢふきとぢよをとめの姿まはしとどめん）

あまつかなぎ ナ。天金木。ほそくきりたるきのえだをいふ。ならへのときむらへつものをのするれうのつくゑまつくるまもちふるきのえだなり。祝詞式

あまつかみ ナ。天神。かみなり。あめまいますかみ。古事記

あまつをつね ナ。天狗。ほしなり。むかしあらそれしひと〃つのほしまてひがしよりにしまながれてかみなりのごとくひびきわたれりとそ。舒明紀（天狗をよめり）

あまつきり ナ。天霧。きりなり。そらまたてるきり。万葉

あまつくに ナ。天國。ひのかみのおむしますところ。またあめ。またあまつひまおなト。神代紀

あまつくもゐ ナ。雲居。そらのくものあるところ。またそ〃らまおなト。續千載（そらまもやひとたまるらんよとともまあまつくもゐをながめくらせは）

あまづけ ナ。淡醃。うすしほのつけもの。内膳式

あまつさへ ン。あまさへまおなト。東鏡四（あまつさへ簡をつけたなちつかをされをそんぬ）

あまつ〜 ナ。鳥梯。かきなり。あまぼしまおなト。柿本氏系圖（みる人これをあまつしとてもてそや〜）

あまつまる〜 ナ。天璽。あめのまるし。またみかどのみ〃まる〜）万十（久方のあまつまるしとさだめて〜）祝詞式（あまつまるしの鏡劍）神武紀（天裘をよめり）

あまつすがそ ナ。天菅麻。ほそくさきたるあさなり。たらへのとき。みをうちたらひきよむるもの。祝詞式

あまつそで ナ。天袖。あまつなとめのころものそで。

あまつそら ナ。虛空。おほぞらをいふ。また おほうちを おなし。万十（たちゐするたどきもまらず わが心あま つそらなり地をふめども）古今 雜（人丸 こそを 嘉しけれ身を下ながらことのをあまつそらまで聞えあげ）

あまつたふ ワ。ヒト。日。天傳。そらをつたふをいふ。そらをゆくをいふ。万三（あまつたひくるゆきまもの）

あまつつみ ナ。天卵。あまつくにまてをかせるつみ。あぜなたなち。みぞをうめ。ひをこぼち。またもきまき。くしさし。いけをき。さかをき。くそへなどせしつみ。祝詞式

あまつつみ ナ。雨籠。あまごもりを おなし。万日（久方の雨もふらぬかあまつつみ君をたぐひてこの日暮さん）

あまつひ ナ。天日。そらをいづるおほきなるひかりもの。

あまつび ナ。滴。あめのをづく。類名（滴字をよめり）

あまつひつぎ ナ。寶祚。みかどのみくらゐなり。ひのかみのみことのりをつがせたまひてみかどのみくらゐをつかせたまふをいふ。神代紀（寶祚をよめり）

あまつひと ナ。天人。あめびとを おなし。いほぬし（あまつひとのおりて供養したてまつるをおもひて）

あまつひもろぎ ナ。天神籬。ひもろぎを おなし。神代紀

あまつひれ ナ。天領巾。ひれなり。あまつなとめのころものひれ。万十（あさかぜのふきたたよはす志らくもたたなざたつめのあまつひれかも）

あまつほし ナ。天星。そらのほし。古今 秋（久方の雲のうへまてみるきくをあまつほしとぞあやまたれける）

あまつみおや ナ。天祖。みかどのとほつみおや。神武紀

あまつみづ ナ。天水。そらよりふるみづ。あめを おなし。万十（大船の思ひたのみてあまつみづ仰ぎてまつを）

あまつみや ナ。天宮。あまつかみのおたしますみや。

あまつみやこと ナ。あまつみやまてをこなたせたまふよ。

ろづのこと。祝詞式（あまつみやことも て）

あまつめ ナ。天女。あまつなとめを おなし。續後紀

あまつやしろ ナ。天社。あまつかみをまつれるやしろ。神武紀（あまつやしろくにつやしろのかみをまつる）

あまつら ナ。千歲果。くさのな。つるくさなり。きは まと。ひつきてたゆ。はのかたちいびつまてのこばのごときぎみあり。こずゑは まろくちひさきたなあつまりさきてかさのかたちのごとし。このつるをにたたらかしてのむはあぢたひあまざけのごとしといや。和名

あまづら ナ。甘葛煎。まろなり。あまづらといふくさをにたしたるまろて。いましへあまきあぢたひをつくるまもちひたるもの。枕草三（けづりひはあまづらいれてあたらしきかなまりはいれたる）主計式（甘葛煎をよめり）

あまつなとめ ナ。天女。あめびとのをんな。後撰 雜（くやしくそあまつなとめとなりにけるくもぢたづぬるひともなき世は）續古 拾（春のきるかすみやそらはかさぬらんあまつなとめのあまのたごろも）

あまてら ナ。尼寺。てらなり。あまのすむてら。舒明紀

あまてらす ワ。ヒト。日。天照。あまつひのそらをてらすをいふ。またみかどのよるをくまなくをさめたまふをいふ。三代實錄八（朕がなすくにをたひらけくやすらけくあまてらしなさめきこしめす）

あまてらすおほみかみ ナ。天照大神。おほかみなり。みかどのとほつみおやのおほかみはいます。

あまてる ワ。ヒト。日。天照。つきひのそらはてるをいふ。續古 序（あまてる星も人の道を守る）万七（久方のあまてる月は神代よりいでかへるらん年をへまつつ）

あまど ナ。雨戸。となり。にへのめどりはたつるを。

あまどうぶく ナ。雨胴服。あまぞおりを おなし。續武家閑談（木綿のあまどうぶくを秀康卿はきせたてまつる）

あまとぶ ワ。ヒト。日。天飛。そらをとぶをいふ。新六二（久方のあまとぶ雲のいかにまてる日の影をたちへ

たつらん）古事記（あまとぶとりもつかひぞ）

あまどり ナ。胡燕子。とりのな。かたちもつぞめまにて おほきく。もらのあたりもきいろまて。まだらなるほしあり。あめをもよほすときまたむれてとぶ。和名

あまな ナ。甘菜。ななり。あぢもひよきな。なつなのたぐひなりてよぶな。祝詞式（あまな。からな）

あまな ナ。白微。くさのな。みなしぐさまおなじ。和本

あまな ナ。女蘇紵。くさのな。ゑみぐさまおなじ。和名

あまなふ ワ。色。巳。諧。ころまうべなりとおもふをいふ。またうべなふまおなじ。四季物語（たれかこのたのしみをあまなたんや）遊仙窟（甘心をよめり）

あまに ナ。女薬。くさのな。ゑみくさまおなじ。和本

あまね〜 サ。匹。遍。いたらぬくまなきをいふ。孝徳紀（よるまあまねけれむ）古今序（あまねきおほんうつくしみの波やしまの外まで流れ）金葉雑（日の光りあまねき空のけしきまも我身ひとつもくもがくれつつ）

あまねはす ワ。色。巳。合遍。いたらぬくまなくするをいふ。あまねくするをいふ。類名（周字をよめり）

あまの ナ。天野。さけのな。かふちのあまのといふところよりつくりいたすさけ。宗五大草子（あまの何荷）

あまのいはくすぶね ナ。天磐樟船。ふねなり。くすをもてかたくつくりたるかみよのふね。神代紀

あまのいはくら ナ。天磐座。すめみまのみことのたかまのたらまおそせしときのおましどころ。神代紀

あまのいはたて ナ。天石楯。たてなり。かたくつくれるかみよのたて。出雲風土記（天の石楯ぬひおき給ひき）

あまのいはと ナ。天石戸。あめのいそやどまおなじ。十六夜日記（あまのいはとひらけし時よもの神たちの）

あまのいはふね ナ。天磐船。ふねなり。かたくつくりたるかみよのふね。神武紀

あまのいはゆぎ ナ。天磐杯。ゆぎなり。かたくつくりたるかみよのゆぎ。神武紀

あまのうきと〜 ナ。天浮橋。もしなり。あめとつちとのゆきかひまもちひられしかみよのもし〜。古事記

あまのおもて ナ。おもてがたなり。うたひものあまをいふきよくまもちふるものまて。かみをもてつくりたるもののやまがたのうろこがたをかけるもの。太平

あまのかきだ ナ。天垣田。たなり。だのめぐりまかぎりをつけたるかみよのた。神代紀

あまのがは ナ。天河。ほしなり。ちひさきほしのあつまりてかたのやうまみゆるものをいふ。あきのよよくたれたるそらまみゆるものなり。和名（天河をよめり）

あまのかはよりだ ナ。天川依田。たなり。かたぐまよりたるかみよのた。神代紀

あまのくちとだ ナ。天口鋭田。たなり。みづのいでくちのするどくてみづのたまらざるかみよのた。神代紀

あまのくひだ ナ。天横田。たなり。きのきりくひなどおほくあるかみよのた。神代紀

あまのこ ナ。白水郎。すなどりするひとのこまたすなどりするひと。万五（あさりするあまのこどもとひとをいへどみるまもらえぬうまびとの子と）

あまのこ ナ。遊女。うかれめまおなじ。六百番歌合（誰となき浮ねを忍ぶあまのこもおもへば浅き怨なりけり）

あまのさかで ナ。天逆手。てのうちかたなり。いましへものをまじなふときうちしうちかたなり。古事記（あまのさかでをあをふしがきまうちなして）伊勢（あまのさかでをうちてなむのろひをるなる）

あまのさかぼこ ナ。天逆桙。ほこなり。かみよのほこまてかたちなどさだかならず。釋日本紀十（息長帯日女命云々そのつちをあまのさかぼこまぬり）

あまのさぎり ナ。天霧。あまつきりまおなじ。古事記

あまのざけ ナ。天野酒。さけのな。かふちのあまのといふところよりつくりいたすさけ。雪玉集（のむ事もかたのまに近きあまのざけ川とたたへて人のたべかし）

あまのさなだ ナ。天狭田。たなり。めぐりせざきかみよのた。神代紀（あまのさなだ またながたまうう）

あまのたむさけ ナ。天甜酒。さけなり。かみよのよきさけ。神代紀（あまのたむさけをかもし）

あまのちだり ナ。かまどのうへのけぶりだし。祝詞式

あまのとね ナ。蜃長。あまのなき。すなどりするひとのなき。神樂歌（いせじまやあまのとねらがたくほのけ）

あまのながた ナ。天長田。たなり。めぐりひろきかみよのた。神代紀。（あまのさなだ またながたまうう）

あまのぬぼこ ナ。天瓊矛。ほこなり。たまをもてかざれるかみよのほこ。古事記（あまのぬぼこをたまひて）

あまのはぐるま ナ。天羽車。かみよののりもの。葬事記

あまのはごろも ナ。天羽衣。ころもなり。あめびとのきるころも。また みかどのおほんゆかたびら。またかみのみそ。拾遺（君が代をあまのはごろもまれまきてなづとも御つきぬいたほなるらん）年中行事（あまのはごろもかたびらを舟の内まぬぎすてて）年中行事秘抄（賀茂大神云々。あまのはごろもあまのもをつくり）

あまのはぶき ナ。天羽鞴。かみよのふきがま。神代紀

あまのはも ナ。天羽裝。もなり。かみのおんも。年中行事秘抄（あまのはごろもあまのもをつくり）

あまのはら ナ。天原。たかまのはら。またおほぞらまおなト。万二（あまのはらふりさけみれば おほきみのみいのちもながくあまたらしたり）

あまのひらだ ナ。天平田。たなり。たひらかなるかみよのた。神代紀（あまのやすだ あまのひらだ）

あまのまなこ ナ。天眼。かみのあめまおもしましてよのなかのよきあしきよろづのことをみそなはしたまふをいふ。源藻（あまのまなこおそろしく）

あまのみす ナ。かまどのうへのけぶりのいづるところ。古事記（ただあがすみかなむあまつ神の御子のあまつひつぎ きろしめさんとだるあまのみすなして）

あまのみそら ナ。虛空。おほぞらまおなト。万五（ひさかたのあまのみそらゆあまがけり）

あまのむらぎみ ナ。天邑君。かみよのむらぎみなり。またかみよのたたなつくるひとのなき。神代紀

あまのやすだ ナ。天安田。たなり。たがへしやすきかみよのた。神代紀（あまのやすだ あまのひらだ）

あまのよさづら ナ。天吉葛。かみよのひさご。神代紀

あまのよそづら ナ。天吉葛。かみよのひさご。神代紀

あまのり ナ。紫菜。のりのな。ふゆのころ。うみのなかのいしまつきてたゆ。なまなるときも。みどりいろまてくろむめり。ほしかわかしてたくもも。あぢもひあまし。空藏 藏閉（御前のすのこまなめするたり云々 みるあまのりなどみゆ）和名（神仙菜をよめり）

あまはおり ナ。雨羽織。もおりなり。あめふりまきるもおり。新物語（具足の上まあまはおりを着し）

あまもせづかひ ナ。もしらせやるつかひ。とくゆかするつかひ。古事記（いしたぶやあまもせづかひ）

あまもだ ナ。あまかてまおなト。

あまもれ ナ。雨晴。あめのそれたるをいふ。赤人集（あまもれの雲間またぐふ時鳥 梢をさして今なき渡る）

あまひ ナ。もののてかなくもろきをいふ。古事記（みいのちもこのそなのあまひのみましなん）

あまびこ ナ。蝿。むしのな。かたちむかでまにて。いろくろくむらさきみてあしもむかでよりもおほし。なつのころ みづけのあるところまいでく。にほひわるくさし。字鏡（蝿字をよめり）本和（馬陸をよめり）

あまびこ ナ。やまびこのごとくそらまひびくひびき。其之集（あふことのあまびこましてよそならむひとめもわれもよきずそあらまし）

あまびたひ ナ。あまそぎまきたるかみのけのひたひまかかるところ。源少女（御あまびたひ ひきつくろひ）

あまびと ナ。すなどりするひと。またあめびとまおなト。

夫木五(ぬれ衣今そたつきまかけてほすかづきまてけりよさのあまびと)狹衣(中將の笛の音まあまびとたまきき過し給とでおりおたしてさそひたまふ)

あまふ　ワ。ヒ。シ。つみをわぶるをいふ。あやまちをわぶるないふ。榮花(浦々の別(いひのしりけれど。あまへてにげまけり)大鏡八(あまへおたしましけり)

あまぶね　ナ。漁船。すなどりするふね。源榮(あまぶねまいかがと思ひ後れけん明石の浦まいさりせ〜船)

あまほう〜　ナ。尼法師。ほとけまつかふるをんな。

あまぼこり　ナ。きのこのな。かたちさだかならず。類聚往來

あまぼし　ナ。鳥梯。かきなり。かたをむきていろのくろくなるまでほしかわかしたるかき。御湯殿記(享祿五年十月八日二位殿よりあまぼしまゐる)

あまま　ナ。雨間。あめのふるあひだ。またふりやめるあひだ。万八(久方のあままもおかず雲がくりなきぞゆくなるわさだかりがね)樵後夏(みつまほのからかの島ま玉藻かるあままもみえぬさみだれのころ)

あまみづ　ナ。雨水。あめのふりてたまれるみづ。

あまんず　ワ。イ。カ。甘。あましをするをいふ。また甘のびてくるしみをうくるをいふ。類名(甘字をよめり)

あまや　ナ。尼舍。あまほうしのすむいへ。天武紀

あまやかす　ワ。イ。四。ちごなどのあまゆるまにまかせておくをいふ。十訓七(親のあまやかし乳母のもてなす)

あまやどり　ナ。雨宿。あめをさけてまもしやどるをいふ。

能馬樂(あまやどりかさやどりやどりてまからん)

あまゆ　ワ。ヒ。シ。驕。ちごなどのおやまなれてをごるをいふ。またなんなのこびをもとめてなまめくをいふ。源末摘花(契れる方まもあまえてえゆき別れたまへす)

あまよ　ナ。雨夜。よなり。あめのふるよ。

あまよけ　ナ。雨防。あめのふせぎまもちふるもの。

あまよそひ　ナ。雨衣。あめふりのよそひ。敏達紀

あまよのつき　ナ。雨夜月。あめふるよのつき。めまみえ

ぬもののたとへまいふ。玉葉釋(みだたのむひとたあまよのつきなれやくももれねどもにしまこそゆけ)

あまり　ナ。餘。もののすでまそのほどまたみちたるまなほのこりてあるをいふ。應神紀(からぬをまほまやきまがあまり琴まつくり)佛足石歌(みそぢあまりふたつのかたち八十くままそたれるひとのふみしあとどころ)新古維(さみだれたまやののきぞのあまそそぎあまりなるまでぬるるそでかな)

あまりさへ　ン。あまさへまおなじ。後撰(あまりさへありてゆくべき年たまも春まかならずあふよしもがな)

あまりもの　ナ。餘物。あまりたるもの。むようのもの。

あまる　ワ。ヒ。四。餘。もののすでまそのほどまたみちたるまなほのこりてあるをいふ。伊勢(あなかうどのうたまてたあまれりやたらずや)續古(八十まおほくあまりてなほもながらへて)

あまをとめ　ナ。海女。すなどりをもてなりたひとするをあまをとめ。万三(あまをとめまほやくけむり)

あまをとめ　ナ。天女。あめびとのをんな。あまつをとめまおなじ。謠曲羽衣(われもかずあるあまをとめ)

あまをぶね　ナ。漁船。ふねなり。あまのすなどりまもちふるこぶね。万七(あまをぶね帆かもなれるとみるまでまともものうらままなみたてるみゆ)

あみ　ナ。網。いとをむすびてつくれるふくろ。うをまたもとりなどをとらふるもの。和名(罘字をよめり)

あみ　ナ。魚。うをのな。ちひさきえび。字鏡(魚字をよめり)

あみいた　ナ。徹輿。のりものなり。たけいたなどをあみてつくれるのりものまてめしうどをのするもの。和名

あみうち　ナ。撒網。あみをもてうををとるわざ。天正日記

あみおく　ワ。ヒ。四。羅。とりあみをたりおくをいふ。類名

あみがさ　ナ。編笠。かさなり。すげなどをあみてつくれるかぶりがさ。著聞(直垂上下まあみがさきたる人らまよりありて)新六四(ますらをのすげのあみがさう

ちたれて目なもあむせずひとのなりゆく)

あみさす ワ。ヒト。四。羅。とりあみをさるをいふ。万七十(橘の匂へる園ゴ時鳥なくと人つゞあみさすましを)神樂歌(あなのふしたらあみさすわがせのきみを)

あみす ワ。イモ。三。合浴。ゆみづをかぶらするをいふ。今昔九十(湯をわかして大衆ゴあみせんとまて)

あみすき ナ。あみをすくをなりとひとするひと。空穂上吹(あみすきなどひつぎのにへたてまつる)

あみそ ナ。網麻。あさなり。あみゴすくあさ。

あみだ ナ。阿彌陀。ほとけなり。ひとつのほとけのな。宇拾十(ねぶりめまてときどきあみだぶつをまうす)

あみづな ナ。網繩。つななり。あみゴつけたるつな。

あみど ナ。編戸。となり。へぎいたまたはたけなどをあみてつくれると。拾玉四(ゆふされのながめをひとやまらざらんたけのあみどゴにたのまつかぜ)

あみどり ナ。網取。あみゴてものをとるわざ。万九十(時鳥聞ども與ずあみどりゴ取てなつけなかれずなくがね)

あみどり ナ。杜鵑。とりのな。ほとゝぎすゴおなじ。雜和集中(あみどりをいふと昔人云この鳥を網ゴかけて取置て明年初音を早く鳴せむやといべるよりなづく)

あみなと ナ。網繩。なとなり。あみゴつけたるなと。夫木五十(霞さへ柵引にけり春駒のみまきの浦の網繩)

あみのき ナ。楝。きのな。あふちゴおなじ。康本

あみのめ ナ。網目。あみのあな。散木中(おもたんとたのめ〜事なあみのめゴたまらぬ風のころなりけり)

あみひき ナ。網引。あみうちゴおなじ。

あみひく ワ。ヒト。四。網引。あびくゴおなじ。類名

あみめ ナ。ものをあみたるくちのところ。万十(あらたまのきへがたかがきあみめゆもいもしみえなむわれこひめやも)後撰雜(たまたれのあみめのまより)

かぜのさびくむそへていれんおもひを)

あみを ナ。網。をなり。あみたるを。くみたるを。字鏡集

あむ ナ。虻。むしのな。あぶゴおなじ。古事記

あむ ワ。イモ。四。編。いとをくみあたせてゆくをいふ。字鏡

あむ ワ。ヒト。五。浴。ゆみづをかぶるなり。あぶゴおなじ。

あむしろ ナ。簾。むしろなり。たけをあみたるむしろ。和名

あむす ワ。イモ。四。合浴。ゆみづをかぶらするをいふ。反正紀(太子ゴあむしまつる)万六十(さしなべゴ湯わかせこどもいちひ沢の檜橋よりこんきつにあむさむ)

あむづち ナ。射場。いとのまとをかくるところ。和名

あん ナ。餡。くひもの。にたるあづきをすりつぶしてさたうをまぜたるもの。もちまたはまんぢうなどゴもちふ。

あん ナ。案。もののかんがへ。またまたがきゴおなじ。源藤袴(かく人のおしたかるあんゴおつることも)伊勢(あるじなる人あんをかきてかかせやりけり)

あんおん ナ。安穩。やすらかなるをいふ。著聞二十(我その用途を取んと思むや汝一人あんおんゴあらせてんや)

あんか ナ。火燵。ひなけなり。こたつゴおなじ。

あんが ナ。發願。みかどのかくれたまふをいふ。文德實錄

あんかけ ナ。くひものなり。くずかけゴおなじ。

あんがふ ナ。暗合。かれとこれとのおもひのおのづからゴあひあふをいふ。またあらましごとのあふをいふ。

あんかん ナ。安閑。なにごともせずしてゐるをいふ。

あんき ナ。安危。安氣。諳記。やすきこととあやふきことと。またこころのやすらかなること。またものをそらんずるをいふ。太平六(百王治天のあんきをかんがへて)

あんきう〜 ナ。安弓子。うたひもののな。和名

あんぎや ナ。行脚。ほうしのくにぐにをめぐりてさゆぎやうをするをいふ。下學(行脚をよめり)

あんぐう ナ。行宮。みかどのみやとのほかゴいでませるときそのところどころゴまうくるかりみや。持統紀

あんぐわい ナ。案外。おもひのほかゴおなじ。

あんご ナ。安居。ほうしのおこなひなり。ひとところゴ志途を取んと思むや汝一人あんおんゴあらせてんや)

つかさおてみちをまなぶまゆぎやうをいふ。天武紀

あんこう　ナ。鮟鱇。うなのな。かたちびものことまにて。ひらたくまろし。料理物語（鮟鱇をさしみすひもの）

あんころ　ナ。もちなり。あんころもちまおなじ。

あんころもち　ナ。もちなり。あんをぬりたるもちひ。

あんざ　ナ。安座。あしをくみてすわるをいふ。

あんざいしよ　ナ。行在所。あんどうまおなじ。

あんさつ　ナ。暗殺。やみうちまおなじ。

あんざん　ナ。安産。やすらかまこなりむをいふ。

あんし　ナ。案紙。かみなり。またがきれうのかみ。

あんじち　ナ。雅宝。さざやかなるいほり。いほぬし（ことかじとめどりてみれむあんじちども二三百むかりおのがおもひおもひまたるさまもいとおかし）

あんしつ　ナ。雅宝。いほりなり。あんじちまおなじ。

あんしん　ナ。安心。こころをやすむるをいふ。

あんじゆ　ナ。庵主。あんじちのあるじ。いほりのぬし。

あんしようナ。諸鼎。ものをそらまよむわざをいふ。

あんず　ナ。杏子。このみのな。からもまおなじ。御湯殿記（あんらく光院よりいつものあんずまゐる）

あんず　ワ。イ。カ。察。ものをかんがふるをいふ。またものおもひをするをいふ。竹取（これをこのごろあんずるまに）中務内侍日記（つづかぬことのみあんぜらるるも）

あんせう　ナ。暗礁。うみのそこまいでたるいはほ。

あんぜん　ナ。安全。やすらかなるをいふ。

あんた　ナ。筯與。のりものなり。あみいたまおなじ。以字

あんたい　ナ。安泰。やすらかなるをいふ。

あんち　ナ。安置。ほとけなどをそこまうるをいふ。今昔（御聖體をとりて本宮まあんちしたてまつる）

あんど　ナ。安堵。ころのおちゐやすまるをいふ。小島日記（誰もあんどまたるやうまゐりし）盛衰記（向後のあんどを存ずべし）續紀（安堵の文字あり）

あんどう　ナ。行燈。ともしびなり。あんどんまおなじ。

あんどうふ　ナ。豆腐。くひものなり。くずかけのとうふをいふ。大草家料理書（あんどうふといふは二寸許まで切て湯煮をまて皿までいれて上までくずたまりをかけ）

あんどん　ナ。行燈。ともしびをともしておくもの。塵添壒嚢抄

あんない　ナ。案内。あないまおなじ。枕草一（いへあるじなれむあんないをよくまりてあけてけり）

あんないしや　ナ。案内者。みちまるべをするひと。太平

あんなか　ナ。足巾。わらぐつなり。あしなかまおなじ。

あんのほか　ナ。案外。おもひのほかまおなじ。今昔五（よせてせめんこそ彼奴をあんのほかまてまよはめ）

あんばい　ナ。按排。もののあぢをひをとものふるをいふ。

あんび　ナ。安否。やすくあるとやすくなきとをいふ。

あんぶく　ナ。按腹。たらをもむわざ。むらとりまおなじ。

あんべら　ナ。むしろなり。まちたうのたぐひのくさをもてあみたるむしろまて。もろこしよりくるものとぞ。

あんぽんたん　ナ。おろかなるひとをよぶあざな。

あんま　ナ。按摩。くすしのするわざまて。かたこしなどをなでさするをいふ。またそれをすぎたひとするひと。

あんまとり　ナ。按摩。あんまをもたすぎたひとするひと。

あんまのとかせ　ナ。按摩博士。つかさびとなり。あんまををしふるとかせまて。むかしてんやくれうといふつかさまおかれしつかさびとなり。職員令

あんみん　ナ。安眠。やすらかまねむるをいふ。

あんもち　ナ。餡餅。もちなり。あんをいれたるもち。

あんや　ナ。暗夜。つつやみ。またくらやみまおなじ。太平

あんらく　ナ。安樂。やすらかまたのしきをいふ。盛衰

あんらくえん　ナ。安樂園。うたひもののな。和名

あめ　ナ。大陽。あまつひまおなじ。古事記（あめつちのたじめのとき）万二（あめつちのいやとほながく）

あめ　ナ。天。あまつひのあるところなり。くにつちのうへのたかきところまて。あふげば。あをあをとみゆるところ。万一（うちさぶるこころさまみしひさかたのあめのまぐ

れのながらふみれむ)

あめ ナ。雨。くものなかよりおつるみづ。後撰(くれなゐ
む月もまつべし女郎花あめやめてとそ思ひさらなん)

あめ ナ。飴。くひものなり。もちごめをいひまむしたる
ま。ひきのもやしをまぜて。それより志ぼりたる志る
をねりかためたるものをいふ。和名(飴字をよめり)

あめ ナ。蛇。うをのな。あめのうをまおなじ。和名

あめう〜 ナ。黄牛。うしなり。けのきいろなるう〜。和名

あめうり ナ。飴賣。あめをうりてすぎたひとするひと。

あめがした ナ。天下。あめの志たまおなじ。和泉式部日記
(あめがしたまたきみのみやふる)

あめかぜ ナ。雨風。あめとかぜと。またあめをふくかぜ。

あめがた ナ。飴形。くひものなり。ひらたくのべたるあめ。

あめく ワ。ヒト。ヰ。嗅。かしがましくよぶをいふ。枕草二(
さけのみてあめきくちをさぐりひげあるものを)

あめざいく ナ。飴細工。あめのさいくなり。あめをもて

とりむしひとがたなどよろづのものをつくるをいふ。

あめしづく ナ。雨雫。あめと志づくと。またなみだのお
ほくこぼるるをいふ。拾玉一(かきくらしたれぬおもひ
のひまなきまあめしづくともながれぬるかな)吉野拾
遺下(いほまきたりてあめしづくとなけるを)

あめしらす ワ。ヒト。ヰ。あめを志らすをいふ。また ひつぎ
のみこなどのかくれたまふをいふ。万三(久方のあめ
しらしぬれこいまろび ひつちなけどもせんすべもなし)

あめちまき ナ。飴粽。ちまきなり。あめをぬりたるちまき。
三三職人歌合(あめちまきうり。さつきまやまこものみ
ともなりなましあめてふもののかざりちまきも)

あめつち ナ。天地。あめとつちとをいふ。古事記

あめつちのふくろ ナ。いたひのふくろなり。としのたじ
めまよろづのさいたひをとりいるべきれうまとて。ふ
くろをぬひていたふことあり。またそれをぬふをあめ
つちをあたすともいふ。一條大納言歌合(あめつちのふ

くろの数しおほかれむ思ふことなきけふまもある哉)
狭衣三(あめつちをふくろまぬひてとあるもたもしろ
がならもしきえたるいたひごとなめり)

あめのあ〜 ナ。雨脚。あめのすぢ。あめのすぢのいとの
やうまみゆるをいふ。枕草二(まつ人などある夜あめ
のあしかぜのふきゆるがすもふとそおどろかるる)

あめのいはと ナ。天石戸。あめのいたやどまおなじ。

あめのいはや ナ。天石窟。いたやなり。あめまあるいたや。
古事記(あめのいたやまます名を伊都之尾張神)神代紀
(あめのいたやますめるかみ)

あめのいはやど ナ。天石窟戸。あめのいたやのと。古事記
(あめのいたやどをたててさしこもりましましき)

あめのうみ ナ。天海。おほぞらなり。あをあをとうみのご
とくみゆるそら。万七(あめのうみまくものなみたち
つきのふねほしのたやしまこぎかくるみゆ)

あめのうを ナ。蛇。うをのな。かたちさけまにて。せより

をまとほりてくろきかふあり。うろこもこまやかならず。みも志ろくまたうすあかなるもあり。内膳式

あめのおきて ナ。天掟。あまつかみのおきて。かみのさだめ。たまくるおきてまて。よろづのもののがるまじきおきて。空穂俊蔭(むすめもてんたうまかせたてまつるあめのおきてあらむ園母にようごともなれ。おきてなくむやまがつたみこともなれ)

あめのおしがみ ナ。天壓神。おんむのみかどをまをす。この
みかどのやまとのくにまいらせたまひしとき。おん
いきほひことまて。ものをおしひしぐごとくおもし まし
しより。かくもたたへまをせるなりとそ。神武紀

あめのおしで ナ。天印。あまつ志るしまおなじ。万十(久
方のあめのおしでや是ならん秋の印とみゆる月影)

あめのかくや ナ。あめのまかごやまおなじ。古事記

あめのかごゆみ ナ。あめのまかごゆみまおなじ。

あめのぐれがた ナ。雨夕。あめのふるゆふぐれ。拾遺員外